



事前投票

	あの日へ続く道	路上の鈴	消罪の寺	もうひとつのドア	水槽の女	ミッドナイト・コール	知覧六月三日の邂逅
得点	9	35	7	16	31	61	7

びただきたい。この賞は皆さんのお力で成り立つ文学賞。『自分たちの選んだ文学賞だ』という思いの伝わる選考会を期待している。

司会者により選考の具体的な方法について、説明された。第一回目は全部の作品についてそれぞれ討議、その上で黄色の投票用紙により第一次投票を行ない、上位三作を選ぶ。後半はその三作に絞って討議。十分な議論の上に赤い用紙によって投票を行ない、最終的に「まほろば賞」作品を決定する。さらに加えて「この選考会で重要なことは、討議そのもの。投票である以上、その場の様々な要素に左右されることがあるので、その結果だけを重視するのではなく、優秀作として読まれ、討議されるという事自体が重要で、優秀作に選ばれたことと、その討議にこそ真の意味をおいてほしい」との補足があった。

予備選考で、郵送による3点満点の投票集計と、関東同人雑誌交流会の予備投票の結果が示され、「あの日へ続く道」9点、「路上の鈴」35点、「消罪の寺」7点、「もうひとつのドア」16点、「水槽の女」31点、「ミッドナイト・コール」61点、「知覧―六月三日の邂逅―」7点というこれまでの得点が発表された。ミッドナイト・コールは福岡か

●第五部 第四回全国同人雑誌最優秀賞

「まほろば賞」公開選考会

翌日三十一日の午前九時から、同じ会場で「文芸思潮」と三好市共催の全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」公開選考会が行なわれた。これは同人雑誌の最優秀作品を同人雑誌の書き手が権威などに頼らず自らの手で選ぶという、これまでになく新しい試みの公開選考会。「文芸思潮」に掲載された同人雑誌の優秀作を候補作とし、これを選考会の参加者が合評し、投票で最優秀賞を決めるというもの。会場の特別選考員と一般選考委員、そして会場には来られない文書選考員によって、投票の合計得点で決定される。

今回の候補作は「あの日へ続く道」林由佳莉（九州文学」529号）、「路上の鈴」遠矢徹彦（「風の森」10号）、「消罪の寺」斎藤澄子（「飛行船」5号）、「もうひとつのドア」中山茅集子（「クレイン」31号）、「水槽の女」こしばきこう（「ざいん」13号）、「ミッドナイト・コール」和田信子（「南風」26号）、「知覧―六月三日の邂逅―」西山慶尚（「海峡」20号）の七篇。どれも力作で、選考は難航が予想された。文書選考委員一人の持ち点は3点、会場の一般選考委員の持ち点は10点、特別選考委員の持ち点は50点で、

だがどの作品を推すか、会場には最初から緊張感が立ちこめていた。特別選考委員は、文芸評論家・勝又浩氏、徳島ペンクラブ・岸積氏（元徳島新聞論説委員）、作家集団「塊」の大高雅博氏（「群像」新人長編小説賞受賞）、八覚正大氏（「新潮」新人賞受賞）、小沢美智恵氏（蓮如賞受賞）、都築隆広氏（「文学界」新人賞受賞）、地元出身の作家・佐々木義登氏（「三田文学」新人賞受賞）そして司会を兼ねて「文芸思潮」編集長・作家集団「塊」の五十嵐勉氏（「群像」新人長編小説賞受賞）の八人。

特別選考委員が壇上の席に着いたところで、作家集団「塊」の八覚正大氏の一声により開会、まず徳島ペンクラブ会長山下博之氏より御挨拶をいただいた。「七篇の候補作どれも質の高い作品で、熱い討議の過程を経てどれが選ばれるか大いに期待しております。また駆けつけた三好市長にもお言葉を頂戴した。「今日は作品賞を中心に選考が行なわれるということで、どのような作品が選ばれるか期待を持って拝見させていただきます」。さらに全国同人雑誌振興会会長森啓夫氏も挨拶。「この公開選考会の主役はみなさんお一人お一人。その気持ちを受賞者を決めるにあわよくばそれが現在の芥川賞以上の作家に成長する第一歩として、みなさん一人一人に大きな責任が課せられている。忌憚のない御意見をいただいて、作家を育てていきたい。侃々諤々、どうぞ議論を合せていい作品をお選

らの票がたくさんあったことが付け加えられた。

第一次選考

いよいよ作品討議。まず会場に出席されていた林由佳莉氏の「**あの日へ続く道**」について意見が出された。この作品のよいところを

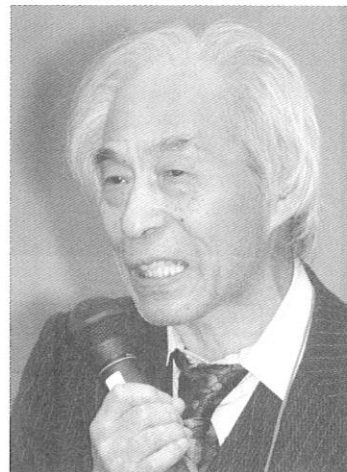
五十嵐選考委員が「この小説は過去と未来、現在と未来がある一点で繋がっている。そこがとても新鮮だった。こういう小説は私は初めてで、時間の螺旋の中で、その螺旋は本当は交わらないけれども、ふっと過去と繋がる。ある意味では染色体の構造のような、時間の螺旋の中でワープする、そういう瞬間をはっきり示したというのは、これまでの小説になかったのではないか。運命のなかで、現在迷っている自分、道を選択しなければならぬ自分がいて、そして未来の姿がある、この運命の経路と繋がりははっきり捉えられていて、現在と未来の姿が時間と運命の姿として再び浮かび上がってくる。こういうことを書ける作家はいない」と評価。

小沢選考委員は「ディテールの詰めが甘いところがある。細かい所に納得できない部分がある。新鮮ではある」と批評。都築選考委員は「タイトルや文章はきれい。だが全体的に説明がわかりにくい。蝶の描写などは死を連想してき

した。また尾関忠雄氏（「北斗」）は、「私はこの作品は好きで、時間軸を中心とした小説構造としては未熟なところもあるけれど、ハイデッガー的な時間も感じられて、特に二回目に読んだ時は、かなりいい作品だなと実感した」と肯定的感想を述べた。

二番目に議論されたのは遠矢徹彦氏の「**路上の鈴**」。八覚正大選考委員は「文章の描写力は全候補作のうち最も高い。ただ、時間的な構成がはっきりしないところもあり、後半学生運動から離れて女性との間で閉ざされていくので、やや失速感があり、自己愛的な狭さも感じる。しかし逆に学生運動の破滅が女性の破滅に象徴されているところは深みがあつてよく、文章の力は一番」と評価を表明した。勝又浩選考委員は「自足しているところが見られ、『ノンセクトの孤独』のような学生風の男」というような部分に、観念で書いているところが見える」とマイナスの批評。

これに続き、会場からの意見が求められた。長野統氏



「北斗」の駒瀬銑吾氏

いである。比喩にアニメを持つてくるのは、安易で惜しい」と批評した。

ここで会場からの発言が求められ、駒瀬銑吾氏（中部ペン）が「この作品はドラマがなく、収斂するところがないので、全体としては評価しにくいですが、こういう作品は同人雑誌にはない。こういう作品が出てきたという点では評価したい。心理学的な構造の上に立っているが、ドラマの要素を入れて、しっかり組み立てるようになったら、この作者はひじょうに期待できる方ではないか」と発言した。山口馨氏（「渤海」／過去二回優秀賞受賞者）は「時間というものを文章で書こうとすればどうなるのか、若い企みがあると思った。その点で私も評価した。これから伸びていく方ではないか」と続いて感想を述べられた。また波佐間義之氏（九州文学）は「この作品は確かに観念的で、リアリティがないかもしれない。しかしこの簡潔な文章はすばらしく、この表現力を私は高く評価したい」と推

（「私人」）は「私はこの作品が七作品の中でいちばんいいと思った。全共闘世代の作品は意外にいいのがない。カルチャーセンターなどでは、学生運動に巻き込まれたという青春時代の作品がひじょうに多いけれども、これだけしっかりした作品はほとんどない。この作者を見ると六〇年安保のときから学生運動をやってきた方で、学生運動を中核で経験している。この作品は作品の『鈴』が象徴しているように、鎮魂歌であつて、学生運動の挫折をきちんと象徴している。甘い作品と読まれがちだが、その奥には厳しいものが横たわっている。全共闘世代の悲劇は、六〇年安保のマイナス面をしっかりと捉えなかつたところに集中的に現れてしまった。全共闘世代以後、今日学生運動はないに等しい。この大問題をもっと取り上げなければいけないのではないか。この小説の難点を言えば『矢野』という人物が、その闘争の時代をどう生きたかがはっきり描かれていないことだが、七作品のなかでは最もいい」と強く推薦された。

また早川ゆい氏（「文芸思潮」）も

「私も七作品のなかでは最もいいと思つた。全共闘を知らない世代なので、わからないこともあるが、文章がとても描写が細やかで、すばらしいと思つたし、最後の部分も深いものがあつて、私は感銘した」と讚えた。



「北斗」の尾関忠雄氏



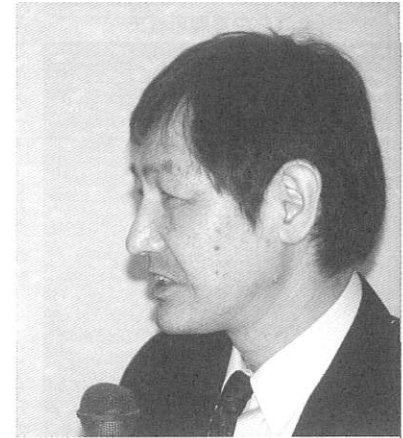
「私人」の長野統氏



「渤海」の山口馨氏



都築隆広特別選考委員



大高雅博特別選考委員



岸積特別選考委員

三番目は斎藤澄子氏の「消罪の寺」。会場には著者も出席され、地元の応援団も多数見られた。この作品についてはまず都築選考委員から発言。「この作品はミステリーとか刑事ものとかそういう色相で批判される懸念があるが、高く評価したのはミステリーのようなストーリーをちゃんと純文学の文体で書き切っているところ。ひじょうに文章が巧み。ミステリーとか人殺しとかは本来純文学とは反するものなので、書き上げるのがむずかしい。プロの作家でも丸谷才一さんの『横時雨』という小説もあって、それが純文学ミステリーの代表的なものでもあるが、それもうまくいっているとは言いにくい。プロの作家でもむずかしいのに、この『消罪の寺』はそのテーマに果敢に挑んで、おもしろい読み物に昇華されている。特に純文学の人間から読んでも、一般的な人から読んでも、ひじょうにおもしろい、わかりやすい読み物に仕上がっている点が評価できる。あ

とヒロインの『風』さんの人間性がわからないとか、動機が衝動的すぎるとかいう批判もあるが、いまの新本格ミステリーの流行からすると、殺人に至る人間の動機は理解するのがむずかしいので、その動機は本人しかわからないとすることによってリアリティが生まれるという主張がある。今のミステリーの流行的傾向と重なっているのだから、今の若者が読むとお風呂場での殺人といい、カーッとあって押ししてしまったという描写はかえってリアリティがあるのではないか。ここがむしろ僕にはマイナス評価にならずに、プラス評価になっている」と強く推した。

大高選考委員は、「私は全体にこの七作品についてはそれほど差がないと思っている。それをまず前提として、この『消罪の寺』は、犯人が遠く離れて手が届かないように感じられながら、最後にうまくわかるところにうまみを感じられる。あと雰囲気がおもしろい」と良い点を挙げまし

た。岸選考委員は「これは人形浄瑠璃だと思っていたきたい。一つの悲劇的な女性を見つめ、哀切をもって歌い上げる。新しい時代の動機としてはわからないけれども、愛憎取り巻く中で行なわれる一つの犯罪である。一つの謡として、見ていただきたい。徳島の人形浄瑠璃の伝統の上に立った、語りの推理小説的な作品である」と強調された。

会場からは「飛行船」の方が『風』という主人公の名前はあまりないと思うことだが、この名前は風のようにあってもなくさまようように生きる人間をよく象徴している、いいと思う。運命に翻弄される女がよく書けている。映画のように鮮やかに浮かんでくる部分もある。刑事の視点で書いているが、刑事が出しゃばっていない所もいい」と応援。また尾関忠雄氏（北斗）は、「小説としてのおもしろさが出ていて、巧みな文章によってついつい引き込まれていく。マジックにひっかかっていく感じがする。主人公について同情していくトリックもちりばめられている」と技巧に着眼した。

勝又選考委員は「文章はひじょうに古風だと感じた。無理が感じられる所もあって『風』さんが三歳で施設に預けられているのに『重々母親から聞き及んでいて』とか『母親の手切れ

金を見ていて』なんてある。古風な印象だが、さっき『人形浄瑠璃』と言われたので、なるほどと思った」と感想を述べられた。

四番目は中山茅集子氏の「PINKYUNIST」。司会者はまず直接会場の方から意見を求めた。駒瀬銑吾氏（中部ペン）は、「男女の性の問題というのは永遠に続いているものだと思うけれど、死の間際になってのところでエロス、良質のエロスは同人雑誌の中ではこれまであまりお目にかかったことがないもので、この作品はそのエロスがきちっと表現されている。しかもファンタジーが伴っている。日本の小説の中では良質のファンタジーは少ないが、私の理想ではファンタジーのなかにほんわかとエロスがあるというのがいいと思うけれど、そこまでは行っていないにしても、そういうものがこの作品の中に出てきているということが高く評価したい」と強く推した。また梶川洋一郎氏（安芸文学）昨年度優秀賞）は、「私はこれを一



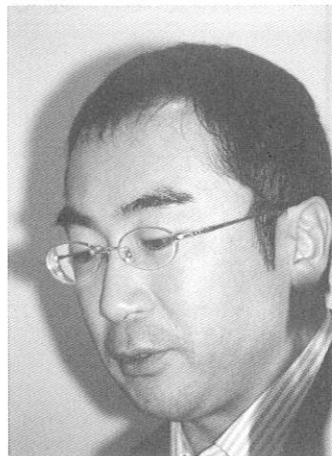
「安芸文学」の梶川洋一郎氏



小沢美智恵特別選考委員

番高く評価している。作者は八五歳のはずだが、年齢に関係なく、みずみずしい。豊饒な女性に対する憧れというものがよく書いてある。他の作品に比べてスムーズな流れだし、相当書き馴れた人ではないかと思われる。ひじょうにいい作品だと思う」とこれも強く推された。

小沢選考委員は「もうひとつのドア」は文章はうまいし、完成度も高いけれども、なぜか引かれなかった。隣の部屋が別世界という、主人公の深層心理に繋がっている不思議な感じも出ているが、それほど強いエロスをピンと感じない感じがした」という感想を述べた。佐々木義登選考委員は「病院という世界を一方で書いて病気を引き出しとして使いなから、一方でエロスとか戦争とか一つのパラレルワールドを構築されたという作者の狙いはよく書いて成功している。特に人工膀胱を付けた夫との夫婦の営みであるとか、若い女性のエロスとかはひじょうに印象に残る。その若い女性は主人公の心にスイッチされて、主人公の力になっているという点でも巧みに作られている。抑圧されて、人生の終末に近づいていて、夫も病気で、虚無性を抱いた主人公が、こういう若い女性と出会うことによって新たな、ま



佐々木義登特別選考委員

さしくひとつのドアを開けることによって、扉が開かれていくというのはひじょうに象徴的。先の大戦のことをキーワードにスイッチにして引き出すところにエロスの問題が根底にはあって、ここはメタファーではなくて、作者の言葉としてしっかり書き込む必要があったのではないかとと思う。大戦のことを起爆にしてスイッチをもっとしっかりしてパラレルワールドを構築したら、この作品はもっとすばらしいものになったのではないか。この作品を高く評価している」と推した。

五十嵐選考委員は次のようにポイントを指摘した。「中山さんは前の『魚の時間』でも、戦争の時代の残酷さとか、暴力性とか悲惨さを一シーンで象徴的に持ってくる。この作品にも同じようなところがあったて、『ラーゲリ』というシベリアの捕虜収容所の世界がちらつと出てくる。そこに、抑圧された囚われの男たち、性欲はどうなっているのかという象徴的なものを稲妻のように奥深くまで見せている。そこが、中山さんの持ち味。戦争のことを女性の側か



八党正大特別選考委員



「弦」中村賢三氏



勝又浩特別選考委員

ら、性欲という女性の持っている潜在的な力を表に出してくる作家はあまりいない。戦争に対してそういう方向から言う作家がいてもいい。『ラーゲリ』を持つてくるのはやや無理があるとは言っても、そこはよく見ておかないと中山さんのいいところを評価できない」。

これを受けて岸選考委員は「虫のようになって帰ってくる捕虜の男たち、それを女性たちが迎えるんだけど、満たされることがないという、鋭く短く戦争体験を切り取っている、これはいいなと思った。それと病院の状況が実によく描かれていて、音とか、病室の区別がつかなくなつて迷い込むとか無機質な部屋ごとの恐怖とか、ひじょうによく描かれていて、夫の人工膀胱のところなんか突き放して描いているところに打たれるわけですね、そうしているなかに生と死と男女のエロスが開かれていて、ひじょうによくできた小説で、この作者は鍛えられているなと思った。ただ、最後の所が同性愛的で、キスしなくてもいいんじゃないか、最後まで少し工夫があつてよかったとも思った。

高く買っている。『消罪の寺』といっしょに」と補足した。

また八党選考委員は「戦争で負ける男たち、それでも女性は生き延びていく。という視点を現代にも置き替えることができて、介護の時代ということになって、それでも結局女性は生き延びていくということになって、男性が先に逝く、それで生き残った女性のエロスは何かというと、女性は女性で最後の所は連帯していかなくてはいけない、とも取れて、そのモチーフはなかなかすごいと思った。しかしなかなかそこまで読み込めないで、作品としてはその辺の所をもっと添えてほしかった」と追加した。ここで会場からも声が入り、中村賢三氏（「弦」）が発言。「病院を素材にした作品は同人雑誌ではうんざりするほどあるけれども、これほど破天荒にあっちへ行ったりこっちへ行ったりしながら、熱意を持って語っているというのはすばらしいと思う。『ラーゲリ』だとか介護だとか、それらをきちんと読み込まないとこの小説は評価できない」と肯定された。次はこしげきこう氏の「水槽の女」。勝又選考委員は「大

江健三郎の『死者の奢り』を思い出しながら読んで、なかなかインパクトがあるなと思って読んだ。ただ、言葉がちよつとひっかかった。もう一つついていけないところもあった。読むときには二つ要素があつて、一つは文章で、文章がひっかかってしま

とダメ。文章表現が大事で、読者にスツと入って来ないといけない。もう一つは話題としてインパクトがあるものを持つてくるというのが大事。表現としての完成度と『これどうだ』というインパクトのあるものを提示すること。『もう一つのドア』もそういう点

ではよくて、いかにも井上光晴『文学伝習所』教室だなと思わせるところがある。『水槽の女』もインパクトが強く新しいものを持つていて、そういう点ではいいけれども、もう一つの表現というところでひっかかる場所があつて、相対化されてしまう」と述べた。

佐々木選考委員は「この小説は観念的な小説だと思う。女性の死体を描き込んでいく筆致は評価できる。最後まで押さえつけられたテンションを読者に与えつつ、最後に新しい命へ収斂させていくところが賛否両論あるかもしれない、うまくいっているかということについては意見が分かれるところと思う。しかし『水槽の女』も高く評価できる作品」と批評した。

福本安廣氏（穀雨）は、「描写が核心を突いていて、現在生きている自分が愛している女性と、死体となつている女性とその両方を描写しようとしている作品で、作者の意図がとてもユニーク。残念なのは結末で、少し別なものとする姿勢がはっきり出ている。死の深淵と同時に、生きる方向への光が見えているというところに、より深い大きい世界があるのではないか。死体を扱う小説は不遇で、『死者の奢り』も以前の『文学界』新人賞の『浮上』といういい小説も不運にして芥川賞を取れなかったので、こういうものをここでしっかり評価しておくことを希望している」と力説した。

岸選考委員は「『死者の奢り』は死体を見ていない作家が想像で、観念で書いている。しかしながら、そこにはユーモアがある。この作品には諧謔的な一さじの味がほしかった」と述べた。

六番目は和田信子氏の「ミッドナイト・コール」。小沢選考委員は「ほかの作品の題材はめずらしいものが並ぶなかで、普通の題材だが、とてもよく書かれていて、老人の孤独な感じとか、息子の行方がわからなくてとか、自然に書かれていてよくできていて。平易な言葉で書かれているところもいい。ただししばらく経つと、すごく印象が薄くなる。題材が地味なこともあるかもしれないけれども、あれ、何が書いてあったかなと薄れてしまうのが短所」と全体として肯定した。佐々木選考委員は「文体が軽妙。重苦しいテーマになりがちだけれども、軽妙な筆致で淡々と描かれている。ミッドナイト・コールという言葉の中に、待つている孤独があり、騙されてもいいという気持ちでいるとこ



「穀雨」の福本安廣氏

を見つめることを通して人間の存在の奥深くまで浮かび上がらせてくる。どんなにきれいなことを言っている、どんなにきれいな装いをしている、最後は結局こうじゃなか、というものを突きつけてくる。これを言語表現の中で提示するということはなかなかできないことだけれども、ここにはそれが描かれている。死体からの照り返しとして、じゃあこの生きていくことはどうなんだという、死体の反射の上に浮かび上がってくる生が、ここにはよく出ている。大江健三郎の『死者の奢り』という有名な作品があつて、あれは当然芥川賞をとつてよかったけれども、その当時の事情で取れなかった。あれは名作だと思ふ。しかし、あれは実存的な物体としての死体という方向に絞られていて、それから反射を受けて浮かび上がる生というものは、あまりなかった。妊娠した女子学生が出てくるけれども、それは転んで流産したということだけ。ここにあるのは一歩踏み込んで恋人の中の新しい命をしっかりと肯定しよう

るなど、緊迫感があるような、作者の意図が成り立っている」と述べた。

五十嵐選考委員が「電話がかかってくるのに、お金を払つてもいい、とにかく頼みたいという老齢の寂しさと同時にそこにほんわかとしたあたたかみがあるというおもしろい世界を拾っている」と補足。

会場からは志儀真由美氏（白鳩）が「この作品を読んだ、あ、『今』だなと思つた。口利きやさんとか商売になっているが、こういうものも商売になっているんだな。文体もすごく読みやすく、好きだけれども、息子の部分とか、きれいなことや逃げを感じる。そういういやなところもある。もう少しこの主人公は痛ましく、傷ついてもいいんじゃないか。踏み込んでいないところもある。そうしたところを除けばこの作品は好き」と発言。

八覚選考委員は「私はこの作品がいちばんわかりやすくいい。いい作品でうまくできていると思うし、オシだけれども、電話をかけてくれる男も、息子も、それを抜けてほんとうの人間の支えを与えてくれるまでには行っていない」とプラスとマイナスの点を指摘した。

最後に「知覧—六月三日の選返—」の議論に移った。

勝又選考委員の批評は「和田さんの『ミッドナイト・コール』は身近な話で、こういう話がいっぱいある中でちょっと工夫があるということ、助ける方が自分も荷物

をしよっているという点がいい。一方的に介護しているという話はうんざりするほどあるんだけれども、お互いに支え合っているのが見えるところがいい。また西山さんの『知覧—六月三日の邂逅—』は、僕が『季刊文科』で取り上げたのでちよつと責任がある。いい話だなと思って二度も紹介してしまった。しかし、今度読み返してみたら、会話で説明して運んでいるので、もつと省略をきかせてほしい。ここが弱点。逆にこのことにこだわっている作者の熱も見える。下手な所がひじょうにいい。逆に『もう一つのドア』は作者の『どうだ、やったろう』という作者の顔つきが見える。それがいやになるが、『知覧』は逆。見えた作者がいい。和田さんなんかはこういうところを抑えているところがうまい」と手厳しい。五十嵐選考委員は「誠実さが伝わってくる。特攻隊のことはいろいろな作品が出ている。これは特攻隊に行った人その人が書いている作品ではなくて、二世というかそれを聞いて、知って書いているものだけれども、何らかの形で、そういう誠実さを引き受けるということがとても大事。もう使い古されている題材という損な素材ではあるけれども、もう一辺見直して何かを受け止めなければならぬという、きれいな姿勢があった」、

「海峡」の出席者の方は、「西山さんはもともと理系の教師で、定年してから初めてペンを執った。彼の全部の作品

してもらいたい。それは尊い。これを一人一人が持つて、何らかの形でその思いを伝えていくということが、戦争に対する何かになると思う。技術はやればうまくなる。しかしその思いがなければ一番大事なものが生まれてこない。それは教えられるものではなくて、ご自分の中に根ざして動いているものなので、ぜひ大事にしていただきたい」。

第二次——決戦投票

七篇の作品の批評が終わり、第一次の投票が行なわれた。一五分の休憩時間を利用して、集計され、その結果が文芸思潮の里見アシスタントによって発表された。

一次投票は、「あの日へ続く道」47点、「路上の鈴」110点、「消罪の寺」196点、「もう一つのドア」104点、「水槽の女」136点、「ミッドナイト・コール」131点、「知覧—六月三日の邂逅—」105点となり、この結果、事前投票を足して、決選投票には「消罪の寺」203点、「ミッドナイト・コール」192点、「水槽の女」167点の三作が残ることになった。予想通りの激戦だった。

「決選投票に向けては、さらに突っ込んだ議論をしていただきたい」との司会者の導入で、ま

第一次投票

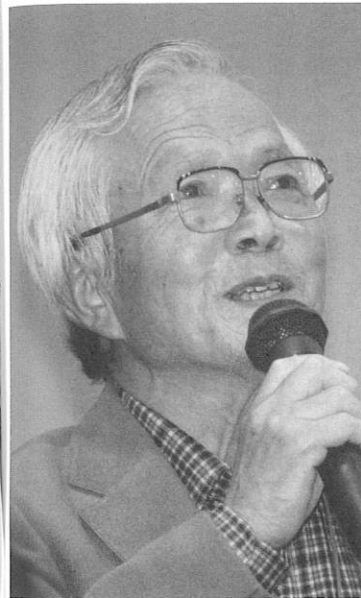
	あの日へ続く道	路上の鈴	消罪の寺	もうひとつのドア	水槽の女	ミッドナイト・コール	知覧六月三日の邂逅
得点	47	110	196	104	136	131	105
合計	56	145	203	120	167	192	112

事前票

には戦争に対する思いが含まれている。どの作品にも少しづつ入っている。この作品もテーマはありきたりで古いかもしれないが、彼の戦争に対する思いを汲んでくれたらいいと思う」と援護した。

都築選考委員は「内容はエッセイ調というか、旅行記のような感じで、重いテーマをすんなり読めた。読みやすかった。戦争をテーマにしながら受け入れやすかった。ただラストはちよつと破綻しているのではないか。後記だけでも取った方がいい」と助言した。

西山慶尚氏が会場に見えているので、一言コメントをいただいた。「戦争が終わった時は五歳だったが、私の一番上の兄が戦死していて、その戦死した兄のことを母親が悼む姿を小さい時から見ているので、戦争に対する思いは強いものがあり、その思いを文章にしてきた」と述べられた。最後に五十嵐選考委員が付け加えた。「その思いを大事に



作者の西山慶尚氏

ず「消罪の寺」について、議論が進められた。

小沢選考委員は「人形浄瑠璃とか、サスペンスの二時間ドラマとか言われてなるほどと思ったが、それが小説としてどうなのかと思ったときに、買わなかった。出だしに散歩しててちよつと死亡事件の当事者たちに偶然遭遇してしまつて、しかもそれが前に自分が関連していた殺人事件とリンクしていて、その女の人がすごくきれいな女性で一目惚れしてしまつている。そんなに都合良くいくものだろうか、ということが一つ。生い立ちも粗筋だけトントンといつてしまつている。あと『風』が哀れというものも一目惚れしてしまつた刑事から見ると哀れであつて、それを読者は最初から押し付けられている気がする。評価する人がこんななにかというのが逆に驚きだった」と辛口批評を展開した。

勝又選考委員は「最初の御詠歌があとでまた出てくるので、そこも問題になる。これは読み物で、純文学として読むと問題がいつばいある。もし書くなら『風』さんの情念をもつと書くようにしたらい。推理小説仕立て事件にしてしまつてるところが弱い。人間を掘り下げる方向に行つてほしい」と注文をつけた。

森啓夫氏（文学街）は、「いずれもいい作品で、どれにも賞をあげたい。同人雑誌作品の選考はその作者の明日への可能性に賭ける選考で、書かれた作品がいいから

と言ってそれがすべてではない。次に書かれる作品がどういう作品か、それが大事。可能性に賭ける。逆に今回ダメでも次に賭ける。『受賞しないことがよかった、次の作品に賭ける』というつもりでお帰りになっていただく。選者である皆さんも心の支援、援助を捧げていただきたい。斎藤さんの作品もとてもユニークで立派」と将来性、未来性を重視する選考を勧めた。

松田一美氏は「飛行船」「まずタイトルがちよつと読んでみたい気持ちになる。このタイトルは御詠歌の『万の罪も消え失せて』から来ているが、四国八十八カ所の聖域をあえて殺人現場に持つてくる。この発想がいい。これは地元でしかわからないけれども、最初の場所は表に出ている池は二つだが、奥にもう一つ池があつて、殺人はそこで行なわれている。そういうところの着眼がすばらしい。四



徳島ペンクラブ会長山下博之氏

国八十八ヶ所の聖域をあえて殺人現場に持つて来た発想が優れている」と、美点を挙げた。
山下博之氏（徳島ペンクラブ会長）は、「この作品はひじょうに土俗的な匂いを発する。御詠歌も我々子供の時から聞き及



全国同人雑誌振興会会長森啓夫氏

んでいて、このテーマにびつたり来る。作者は本質的な詩人で、女の哀しさが的確に表現されて、しかも阿波という土壌をよく背負っている。優れた作品ではないかと思う」と称揚した。

大高選考委員は「時代劇のような文体で、この事件はいつころの時代なんだろうという疑問がつきまとう。何十年前の話なのか、今の話なのか、よくわからない。土俗的にも、違う。文体的にもう少し考えた方がいいのかもしれない」と疑問を提出した。

次は「水槽の女」に議論の焦点を移した。
都築選考委員は「『消罪の寺』にこんな点が入って、責任を感じてもいるが、僕は『消罪の寺』と『水槽の女』がかなり競るのではないかと思つていた。『水槽の女』は商業文芸誌に載つていてもおかしくないほど完成度が高い。小説のツボを押さえている作品と思う。たださつきも指摘があつたように大江健三郎の『死者の奢り』のような感じがするのと、水槽の熱帯魚の下りが、村上龍の『コイ



勝又浩選考委員

描写が生きている。一つ一つそういう生きていく現実が、すべて死から照射されている。その描写の深さが他の作品とは本質的に違う。それだけでも、私はこの作品の根本にあるものが深いので、いまのような手続きの話は問題にはならない。実際自分の子供が女性のお腹に宿り、その命を引き受けることで、十分解放につながっている。ここに描き出されてくる日常というものが、根本的に死から照射されてくる世界の風景なので、この深い描写は優れている。それだけでもすでに賞に値する。死というものの実相を、人間の形の裏返しからしっかり見せてくれる、その執りの深さがあると思う」

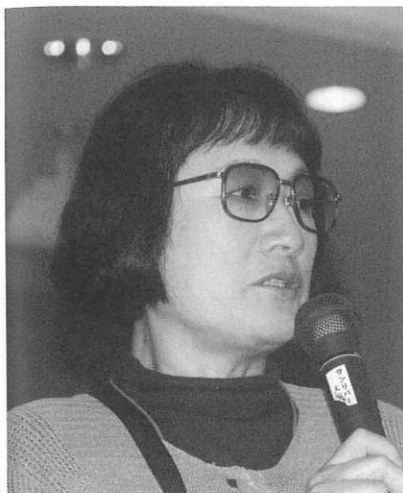
勝又選考委員の反論。「五十嵐さん、この主人公はいま何やっている？」

五十嵐「それは書かれていない。これは回想の世界で、この小説が書かれた時点は、普通だったら、現在があつて過去を回想していくということだけでも、この場合は違つていて、過去の自分がその時二二歳、このとき死体のアルバイトを経験して、それから少し経つた時点からこの小説を書いている」

ンロッカー・ベイビーズ」に似ているところがあるので斬新さがない気もする。その辺がマイナスになるかもしれない。あと文章では描写がくどいなど。一つのセンチンスもこの半分くらいで内容は通じるんじゃないかという印象を僕は受けた。しかし書いてあることのインパクトとテーマ性、小説としてのおもしろさを考えると、『水槽の女』は評価すべき作品と思う」と認めた。
八覚正大選考委員は「最初に読んだとき、ひじょうにこの作品にインパクトを感じたけれど、そのインパクトをどういうふうな作品として完成させるかというところに主眼をおいてさらに読んだ。死体に対して命が芽生えるという話が出たが、長く水槽の女につきまといわれているそのトラウマからどういうふうな解放されるかというところを書かないと足りないなという感じがする。問題はそこからどういうふうな癒えていくかというプロセスが書かれていない。それが足りないなという感じがする」
会場から意見がないので、五十嵐選考委員が司会を離れてこれに反対。「私は八覚さんの意見に真つ向から対立する。やはり描写が他の作品とは違う。口笛を吹いてみるとか、夜寝静まったところを歩くとか、そういう一つ一つの



勝又「回想する必然は？ 何のために回想している？」
 五十嵐「必然というのは表れていなくていいんじゃないんですか。この人はすでに六十何歳ですから」
 勝又「それは他から入っている情報だよ」
 五十嵐「書く立場から言うと、二十年前、三十年前のことを書くのに、どうしてそのような必然性を作品の中に表す必要があるのかわかりませんね」
 勝又「二十歳の時のことを書くのに、三十で書くのと、五十で書くのと、八十で書くのと違うよ」
 五十嵐「そんなことを押し進めていったら、作家は書けないことになってしまいうじゃないですか」
 勝又「いやいや、その年で書く必然が見えてこない。現在どこにいて書いているのが見えてこない。六十歳なんてのんきなことを言っちゃだめよ。この作品の中でなぜこれを書くのか見えてこない」
 五十嵐「人間の中には、その時、あるいは書く時点で、見えていないものがあるんじゃないかと思うんですよ。八十歳になってやつと、あるいは死ぬ直前になって見えてくるものもある。年月を隔てて書くという立場を大事にしてあげないと」
 勝又「それは作品を超えてわかってしまっている。作品の中でわからない状態



「弦」の木戸順子氏

勝又「僕はこれを認めない」
 会場からの木戸順子氏（「弦」）の発言。「ひじょうに暗くて、重くて、読みたくないという方もいらっしやるかもしれないけれど、死体のアルバイトの時の描写がしつこければしつこいほど、作者の若さとか悩みとか、それがよく出ていると思う。死体の女と自分の恋人の女とが、ひじょうにうまく対照的に書かれていて、死体が最後にグーッと浮かんでできてしまいましたが、その浮かんできちゃった死体が彼にとつてはほんとうに死んだ最後の時で、作者はこれで何か新しいものを見つけていくんじゃないかなあという印象を持った。本当の純文学というのはこういう小説だなと思って評価した」

岸選考委員は「書き出しがもたついている。死体の描写についても諧謔がないので、僕はあまり高くは買わない。しかし同人雑誌からこういう作品が出ていくことは大きな意義がある」と、補足した。

駒瀬氏が続けて。「過去にこだわることだったら私は『路上の鈴』のほうがもつといいと思う。これを書いた人はもつと若い人だと思ったので、それならば可能性を感じるが、過去へのこだわり方という点で言えば、『路上の鈴』の方がもつと素直。高く評価できる」

最後に「ミッドナイト・コール」を討議した。

福本氏は「この作品の中に流れているものは、人間の対話だと思う。根源的な人間の愛だと思う。自分の夫を亡くして、自分も体が不自由な状態で、不安定な状態なんだけれども、すごく淡々と書かれているところ、この作品のいいところ。もう一つはやはり描写。同人誌でがんばっている人たちの大半は、美しい描写を、美しい日本語を考えていると思うけれども、そういう点でもこの作品はいい文章で立派な作品と思える。いま活字離れうんぬんが言われているときに、このような作品は貴重だなと思う」と肯定。

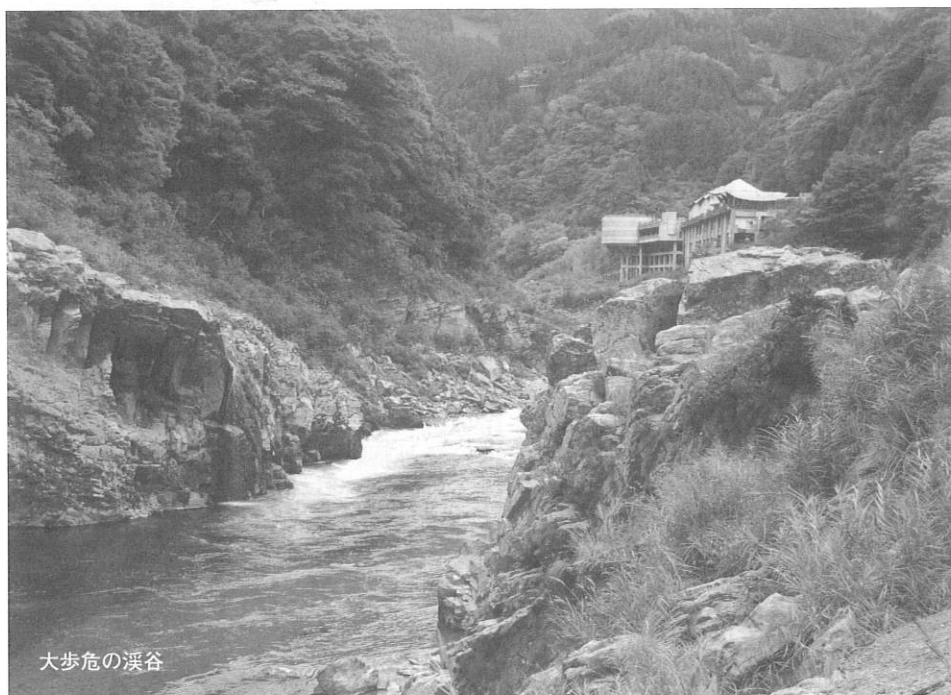
八覚選考委員は「読み始めたときにそんなにインパクトを感じなかったけれども、だんだんかわりがよくなってきて、静かななかに盛り上がってきて、その構図はよくで



都築隆広特別選考委員から、記念品のメダルを首にかけられる斎藤澄子氏

る「如見天心」の色紙額が特別記念品として贈呈された。最後に、三好市長と担当の鈴木良英氏へ、こういう催しを開いて下さったことへの感謝を厚く表明し、小沢美智恵作家集団「塊」メンバーによって閉会の辞が述べられ、同人雑誌諸氏への次回に向けての健筆と再会を誓って散会となった。

(文責/西田宏明)



大歩危の溪谷

きている。人が人を必要とするという、その根底の所が最後にふーっと出て、よく書かれている」と評価した。すでに制限時間の三時間が五分オーバーで一二時五分。時間がなく、これで切り上げなければならなかった。討議を打ち切り、最後の決選投票を行なう。三つの作品に絞り、赤い投票用紙を使って点数を書き込む。いったん休憩とし、集計結果を待った。

一五分後、また里見アシスタントにより、結果が発表された。高らかに点数が読み上げられる。

「消罪の寺」191点、「水槽の女」196点、「ミッドナイト・コール」370点。以上の結果により、「ミッドナイト・コール」が最高得点となりました。

会場から拍手が起こり、「ミッドナイト・コール」が「まほろば賞」として迎えられた。

「お聞きのように、今年度の『まほろば賞』は『ミッドナイト・コール』と決定しました。みなさん、もう一度拍手をお願いします」再び会場に拍手が鳴り響いた。

以上で公開選考は終了したが、出席された作者、「あの日へ続く道」の林由加莉氏、「消罪の寺」の斎藤澄子氏に、優秀賞の賞状、賞金、記念メダルが授与された。西山慶尚氏は交通事情の関係から早退されて残念だった。また五十嵐勉「文芸思潮」編集長の揮毫による

決戦投票

	あの日へ続く道	路上の鈴	消罪の寺	もうひとつのドア	水槽の女	ミッドナイト・コール	知覧六月三日の悪逆
得点			191		196	370	

「まほろば賞」
決定



「まほろば賞」優秀賞の賞状を授与される「消罪の寺」の作者・斎藤澄子氏



五十嵐勉「文芸思潮」編集長から優秀賞の賞状を授与される「あの日へ続く道」の作者・林由佳莉氏

新しい日本文学の潮流を

全国同人雑誌最優秀賞

まほろば賞

あの日へ続く道

林 由佳莉

わたしは時間に関して一つのイメージを思い浮かべるころがあった。それは、直線的に伸びる時間軸上の、ある時間の一点とその前後にそれぞれ立つ自分という三人の自分があり、真ん中にいるわたしが前後の自分をそれぞれ見て、時間の関係を確認している、という光景である。長すぎる時間の中では、ある特定の時よりも前なのか後なのかを考える方が、時間の感覚を掴みやすいと考えていたのだ。

進路希望調査用紙を前に、わたしは両親と話していた。大学受験を控えた年だった。しかしわたしは進路を決めかねていたのだ。自分が将来何をしたいのか、将来の希望が自分でもよく分からなかった。そのため、両親と話し合っ

ても進路がなかなか決まらなかったのだ。

話し合いが行き詰まりかけてきた。自分で決めなければ進まないことは分かっている。しかし、決められない。焦りを苦しいほどに感じた。わたしは一人になりたいと思いつき、散歩に出た。行き先は近所の公園だった。夕方気温が下がり始めていたので、用心のため上着を羽織った。そこは幼い頃よく遊びに行っていた場所だったため、遊ばなくなってもそこに行く幼い頃のことを思い出し、いつの季節であつても秋の風に吹かれたような心地になるのだった。その公園には大きな桜の樹があつた。いつも遊んでいた場所なので一年中その樹を見て過ごしていたはずだが、なんと言つても印象に残っているのは満開になつたときの樹の

姿だった。こぼれんばかりに花を咲かせた枝は裸木のときよりも重たげに見えるようなものに、逆に軽やかに見えるのが幼心に不思議だつたことを思い出す。久しぶりに公園へ行ったわたしは思わずその樹に駆け寄つた。夕焼けの薄い橙色の空に映える桜は昼間の青い空の下で見るとは違う印象だつた。どこか置き去りにされたように寂しげに佇んでいた。しかし、桜の樹の幹に掌を当てるとその確かな鼓動が伝わってくるような気がして、樹のみなざる生命力を感じた。それは掌を通してわたしにも流れてくるようだった。不安だつた気持が鎮まるのが自分でも分かつた。これで、またしっかりと歩いていく力を蓄えられたと感じた。

家へ帰ろうと思つて向きを変え桜の樹に背を向けて少し歩いたそのとき、周りの空気が変わったのを体全体で感じ、思わず振り向いて再び桜の樹を見た。今まで顔を撫でるように吹いていた風が突然、わたしに向かつて吹きつけるように吹き始めた気がしたのだ。穏やかに晴れた春の野にいたところが一瞬にして竜巻の中心に入ったような心地と言つても近かつた。

空気の流れだけではない。周りの景色が一変したように思つた。空は夕刻の胸を締め付けるような色から清々しい昼間の色へ、陽光も真っ直ぐに投げかけてくる夕陽から降り注ぐ柔らかな日差しへと。

そして、次の瞬間わたしの視界に一人の人物が入つた。先程はわたし以外誰もいなかった桜の樹の側に、一人の髪の長い女性が樹の方を向いて立っていたのだ。

その人の中には一匹の黒い蝶がいた。その人はじつとわたしを見、

「春子？」

と呼んだ。彼女はわたしを妹と間違えたようだ。妹の友人だろうか、とわたしは考えた。だが、彼女はわたしよりも年上に見え、妹の同級生とは考えにくい。見覚えのない人だつた。近所の人ではない。どのような知り合いだろうか、とわたしは心の中で考えた。

彼女の後ろにもう一人の女性が見えたので、はっとしてその方向に目を遣ると、目の前の女性もつられたように自分の後ろを振り返つた。新しく現れた人は、どことなく最初の人物と似た雰囲気を持っていたが、髪は対照的に短かつた。その女性はこちらへ向かつて歩いてきたが、わたしと髪の長い女性から少し離れたところではたと立ち止まつた。そして、わたしはその女性と髪の長い彼女との間にも一匹の黒い蝶が舞っているのを見つけた。不思議に思つて髪の長い女性の前に目を遣ると、やはりそこにも黒い蝶がいる。髪の長い女性が、首を左右に回してわたしの方とそ

の蝶はよく似ていて、同じ種類の蝶に思われた。やがて、それぞれどこへ行くというわけでもなく彷徨うように上下に飛んでいた二匹の蝶が、引かれるように互いに近づいて一ヶ所に集まった。わたしは無意識のうちに、蝶を目線で追っていた。

しばしの間、不思議な沈黙が立ち込めた。二人の視線を確認すると、わたしと同じく寄り添った蝶を追っているのでもわたしたちの視線は蝶の上で重なっていた。三人のうち誰一人口を開いていなかった。まるで、そうすることが暗黙の了解でもあったかのように。沈黙が続いているにもかかわらず、その場は逃げ出したくなるような雰囲気ではなかった。それどころか昼の光が射したかの如く春の陽光で包み込まれたような感じだった。

いや、実際その空間は先程風の流れが変わったと感じたときのとおり、昼間だったのかもしれない。あのとき世界が一瞬にして入れ替わったのかもしれない。辺りの様子は確実にこの公園へ来たばかりのときとは大きく変化していた。空には寂しさを誘うような茜色の代わりに霞がかつた。空には寂しさを誘うような茜色の代わりに霞がかつた。桜の樹は、なんと消えていた！あの大きな樹が忽然と姿を消したのだ。何が起きたのだろうか？わたしは訳が分からなかった。そして、驚くべきことはそれだけで終わらなかった。わたしに「春子？」と呼びかけてきた髪の長い女

ある年の夏、大きな台風が来て、強風でその公園の桜の樹が根元に近いところから折れてしまった。わたしは無惨に折れた樹を見て、様々な思い出に耽っていた。

その後、行政の関係者が来て残された木の幹を運び出し、機械を使って根元を掘り起こし、きれいに採ってしまった。子どもたちの安全のためということだったが、樹の痕跡が完全に除かれてしまった光景を見て、わたしは大きな寂しさを感した。

あるよく晴れた日の午後だった。わたしは何となく公園へ向かっていた。風が吹き、退職してから短く切った髪を軽く揺らしていた。わたしは公園の入り口に一匹の黒い蝶がいるのを見つけた。蝶を見たとき、どこかで見たことがあるという気がした。いつ、どのようにして見たのか思い出せないが見覚えがある、と直感で思ったのだ。しかも、以前見たのは一度ではなく二度あったと強く思った。

その蝶を以前見たことがある、という記憶は夢の中で以前見た夢の内容を思い出しているように不確かなものだった。

また、記憶などあるはずもないくらい幼い頃の経験のように、現実と夢の区別がつかないほど曖昧なものでもあった。

この黒い蝶と巡り会う経験は三度目だと思ったので、見

性が、くると向きを変え、公園の南側の出入り口に向かつて歩き出したかと思うと、そのうちに姿を消したのである。彼女がいたことが信じられなくなるほどごく自然に、当然のように彼女は姿を消した。

その二人の女性や二匹の黒い蝶の出現と、今わたしが目にした不思議な出来事は関連があるのだろうか？

数年が経った。わたしは家の近所を散歩していた。退職の後、実家に戻って数年後のことだった。

働いていた頃は二つの職業に就いた。最初の会社が気に入っていたため、転職したのはわたしにとって一大決心だったが、次の職業もその前の会社と同じくらい好きになって仕事に打ち込むことができたので、転職は今では賢明な判断だったと思っている。

わたしは以前、一度始めたことは諦めずに最後まで続けるべきだと考えていたが、少し違う考え方を得られたのは社会人時代の貴重な収穫だった。

諦めること、変わることも必要なのだ。わたしの家も以前の家から変わったが、既に新しい環境で快適に過ごしている。引越し先は元の家からそれほど離れていない場所だった。新しい家でも以前の家から見えていた山が同じ方向に見えた。以前時々行っていた公園は新しい家からも近かった。今でも時々行っていた。

覚えのある蝶を見るという不思議な体験にもそれほど驚かなかった。ただ、とこの体験を冷静に見ている自分がかかにいるような感覚があった。

そしてわたしはそのとき、黒い蝶の行く手に二人の女性がいるのを見つけ、その二人と自分の間に実在しない道を見た気がした。二人のうち一人は高校生くらいで、もう一人の髪の長い女性は、わたしより少し年下のように見えた。わたしは吸い寄せられるように蝶を追い、その道をたどって二人の方へ歩み寄った。近付くと、髪の長い女性の前にわたしが追ってきた蝶とよく似た蝶が舞っているのが分かった。わたしは二人に近づき過ぎないうちに足を止めた。

特に用事があるわけではないので、あまり近付くと不審に思われかねないと考えたのだ。わたしの前を飛んでいた蝶は、わたしが止まっても先へと飛び続けた。そして、二人の側に到着した。もう一匹の蝶はその蝶が来るのを待っていたように元気に舞い始めた。そして、二匹の蝶は飛びながら互いに近付き、一ヶ所に集まった。すると突然、視線の先にいる二人の会話が聞こえた気がした。二人との距離からすると聞こえるとは思えないほど小さな声だったが、それはまるでわたしの耳元で発せられた言葉のようにはつきりとわたしには聞こえた。「春子？」と、髪の長い女性が呼びかける。呼びかけられた高校生くらいの女の子は答えなかった。答えはしないが、表情からは何かの反応が読

み取れる。わたしのいる位置からは見えないそのような細かなことまで何故か手に取るように分かった。髪の毛の長い女性、今度はその女の子とわたしの顔を交互に見比べた。何かを考えているような表情にも見えなし、何かを確認しているようでもあった。そして、ほんやりと二人に目を遣っていたわたしは不思議な光景を見た。髪の毛の長い女性がわたしと高校生くらいの女の子から離れる方向へ歩き出したかと思うと、しばらくするとすっとその姿が消えたのだ！まるで、空気の中に溶け込んだように彼女は文字通り姿を消した。

そのとき、不意に何かの頭の中でざわめいた。思い出しそうでも思い出していないことがある、と予感のようはどこか遠いところで微かに感じた。それは本当に微かなものであったにもかかわらず、とても気になった。

だが、どんなに考えても思い出すことはできず、わたしはもどかしい気持ちを抱えて公園の入り口に戻った。

その夜、わたしは夢を見た。夢の中で、わたしの前の暗闇に浮き上がった長く伸びる白い道を見た。そして、わたしの足元には一輪の花が咲いていた。なにげなく道を歩き始めたわたしは、しばらくして再び最初の花を目にした。予想以上に短い時間で元の場所に戻っていたのだ。自分が今いる空間の広さも足元に伸びる道の長さも分からなかった。

た。街には明るいライトが輝いている。それはわたしを冷たく拒絶する輝きに思われた。実家があった場所がそれほど街中ではなかったためだろうか。大学を卒業して当時の会社に就職し、地元を離れて数年経ってもまだ街の喧騒や夜の眩しさやめまぐるしさに慣れることができなかった。

目の前の部屋の壁を見て、母に言われたように実家に戻ることを考えてみた。戻ったところで何があるのか。職のある保障はなかった。当時の職業も就労できたのは幸い中の幸いだったと思っていた。最初のうちは希望に溢れて仕事をし、充実した毎日に満足していたものだ。それがその頃には全く異なっていた。

仕事に追われ、夜遅くただ寝るためだけに部屋に帰るような、会社と部屋を歩き来するだけの日々。心身共に疲れきっていたのだ。あれほどやり甲斐を感じていた仕事にもかかわらず、ここまで苦勞してするほどの仕事なのか、というそれまで考えもしなかった疑念が心の中に芽生え始めていた。

そうは言っても、その街で新しい仕事も見つけられそうになかった。求人広告などで調べてみても当時の仕事を辞めてまで就こうと思えるような仕事はなかった。興味が湧かない、と言う方が近いかもしれない。

部屋の壁は乾燥しきったその頃のわたしの気持ちを映したように、ただ単調に白く、退屈だった。そのようなもの

だが、思っていたほど広くも長くもないようだと感じた。そのとき、体がふわりと宙に浮いたような感じがして、足元の道が細く、花が小さくなり始めた。自分の体が何故か上昇しているのだと理解できた。次第に道が細くなり、自分かなり上方へ来たとき、わたしは驚いた。直線だと思っていた道は実は大きな円を描いていたのだ。わたしが直線だと思ったのは、その円のほんの一部に過ぎない部分だったのだ。だから、今道を歩いて元いた場所で見えた花を再び目にしたのは、この円を一周して同じところに戻ってきたという訳だったのだ。

翌朝、目が覚めてわたしは昨日の出来事と見た夢の内容を思い出していた。すると、霧に覆い隠されていたものが徐々にその全貌を現すように、忘れていた記憶が少しずつ蘇ってきた。どうして忘れていたのだろう。

「仕事は辛くなったらいつでも戻って来るのよ。無理ななくて良いからね」今から数年前になるその頃、実家に電話をかける度に母は同じ言葉を言ってくれていた。

「お母さん、分かった。ありがとう。でも、もう少し考えてみる」

そう言うわたしは通話終了のボタンを押した。

小さくため息をつき、わたしは部屋の窓のカーテンを少し開けて外を見た。外には春の夜の生ぬるい風が吹いてい

を見つめていても、何か良い考えが浮かぶ訳でもない。

ぼんやりしていると、つけたままのテレビから流れる声が耳に入った。キャスターがその日のニュースを伝えようとしていた。彼の言ったその日の日付に反応したのだ。

慌てて携帯を開き、日付を確認する。母の誕生日がいつの間にか迫っていた。それまで、母の誕生日を忘れることなどなかったのに……。やはりそのときのわたしは、過ぎ行く毎日に鈍感になっていたようだ。わたしは再びため息をついた。

とりあえず、翌日の休日を利用して母へのプレゼントを買いに行こう。わたしはそう決めた。プレゼントの内容は、その前年日傘を贈ったので、その年は夏物のバッグにしよと考えた。

翌朝、買い物行き先をその街に来て数年の間にあまり行ったことのない方面に決めた。部屋を出てバスに乗ること数分。目的のバス停で降車すると、まず人の多さに気後れした。休日なので人出が多いだろうとは予想していたが、予想以上だった。それに、陽射しも思っていたよりも強く眩しかった。三月から五月頃の方が夏よりも紫外線が強い、と言われるがそのことを実感させる、射すような強い陽射しが初夏を感じさせる青い空から真っ直ぐに降り注いでいた。

「この仕事に就けて、本当に良かったー」

「そうなの、就活頑張ってよかったね」

すれ違いざまの二人の女性の会話が耳に入った。思わず彼女たちを見ると、わたしより少し年下のようだった。恐らく、この春に新社会人となった人たちだろうとわたしは思った。彼女たちを見ていると、今の自分と比べてしまい、また、自分が就職したばかりの頃を思い出し、胸が締め付けられるような気持ちになった。

新しい場所へ買い物に行くときも、その頃は以前ほどの期待感がなかった。以前なら、買い物などに行くときは、普段仕事のときはただ一つに束ねているだけの髪を丁寧に結び、お洒落をして出かけて行っていたものだった。しかしその頃は、外出のためのお洒落と言っても、ただ飾りのついたピンで肩下まで伸ばした髪を留める程度だった。そして、街の景色もわたしの目に灰色で興味を引くような色彩に乏しく映るのだった。それでも、少しでも良いものを手に入れたという思いから自分を奮い立たせた。

建ち並んだ店を一つ一つ覗き込むようにしてゆつくりと通りを歩いた。ある店の前でわたしはふと足を止めた。一匹の黒い蝶が目止まったのだ。その蝶はまるでわたしにその存在を誇示するように視線の高さまで舞い上がった。そして、わたしが見守る中店の前から路地に入ってしまった。わたしは、導くような行動を取ったその蝶を思わず追っていた。

に見える風景がわたしの心を捉えて離さなかった。ついにわたしは突き当たりまでたどり着いた。

そこには、期待通りの風景が広がっていた。このような狭い路地の突き当たりにはあるはずのない空間がそこにあっただ。突き当たりになど着いたときわたしは、わたしの心を大きく揺さぶる風景である公園の中に立っていた。その瞬間、自分に降り注ぐ太陽の陽射しが変わったことを感じた。それまで肌を突き刺すような強い陽射しを投げかけた初夏の太陽がそっと薄い雲に覆われたように、陽射しが柔らくなつたのを感じたのだ。思わず空を見上げると、夏を思わせる青い空から霞がかかった水色の空に変化していた。まるで季節が少し前に逆戻りしたようだった。

蝶は公園の中を今までと同じように舞っていた。わたしは思わず後ろを振り向いた。先ほどまでいたのはわたしに住んでいた関西、しかしこの公園はわたしが育った福岡にあるはずの公園だ。帰路を考えての行動だった。後ろには懐かしい公園の風景が何の違和感もなく広がっているだけで、先ほどまでわたしがいた街の光景は少しも見られない。一体どのようにしてここへ来たのか、そしてどうすればあの街へ戻ることができるのか全く見当もつかない。

何が起きたのだらうと考えながらも、わたしの視線は自然と桜の樹を探していた。そして、落胆した。なんと、あ

蝶を追って路地を曲がったわたしは視線で蝶を探して路地の先を見、思わず足を止めた。ここはどこなのだ？ 後ろを振り返ると、今曲がってきたばかりの路地の入り口に先程入ろうとした店がある。間違いない、そこは当時わたしが住んでいたところから少し離れただけの場所だ。白昼夢でも見ているのだ、とわたしは自分で自分に言い聞かせた。

白昼夢でなければ、その場所であのような光景を見るはずがなかった。

蝶を探したわたしが路地の奥に見たもの、それは……。路地の突き当たりはコンクリートの壁になっているのが普通だ。それがその路地だけ異なっていたのだ。

路地の突き当たりには見知った風景が見えた。まるで、突き当たりの壁がスクリーンになってその風景の映像を映し出しているかのようだった。そう、あれは現実そこにある風景ではない。わたしは自分に言い聞かせ続けた。何故なら、その風景とはわたしの実家の近所にある公園の風景だったのだ。だが、当時わたしがいた場所は関西で、実家のある福岡から遠く離れていた。だからこのようなことは起きるはずがないのだ。幻か見間違いだと考えたのだ。

とうとうわたしは更に歩を進め路地の奥に向かって歩き始めた。あり得ないことだと思っただけでも、路地の長さから考えられる突き当たりまでの距離の割に不思議なほど明瞭

の樹がないのだ。どうしたのだろうか。わたしは自分の目が信じられず、桜の樹があるはずの場所へ思わず駆けて行った。そこから少し西側に寄った場所に、高校生と思われる女の子がいた。蝶が舞いながら彼女の方へ行っていた。わたしも蝶を追いかけて彼女に歩み寄った。遠目からは彼女の細かい顔立ちが分からなかったが、近づくにつれて彼女に見覚えがあるような気がしてきた。その気持ちがわたしに彼女に対する特別な親近感を抱かせた。彼女の近くまで行くと、見覚えがある、という感覚の理由が分かった。彼女はわたしの妹に似ていたのだ。彼女が振り返ったので、わたしは顔をよく見た。妹に確かに似ているが、少し違う気がした。それでも「春子？」と、わたしは呼ばずにいられた。周りの風景、目の前の人物、全てが懐かしく胸が一杯になつていった。わたしの呼びかけに対し、彼女は返事をしなかった。しかし、僅かに表情が動いた。わたしはそれを彼女から反応があったと受け止めた。この光景にいつかどこかで出会った気がしたが、それがいつのことなのか分からなかった。そのとき、女の子がはつとしてわたしの後方へ注意を向けたので、わたしも思わず後ろを振り返った。その方向から、新たな女性が歩いてくる場所だった。髪の短い、わたしより年上と思われる人だった。そして、不思議なことに彼女の前にもわたしが追ってきた蝶とよく似た蝶がいたのだ。

わたしは女の子とその女性を交互にゆっくりと見た。なんとなく、二人が似ているような気がしたのだ。自分でその仕種をしながら、それがずっと以前馴染みのあった、とても懐かしい仕種だったような気がしていた。

そのとき何故か突然、わたしはあることを思い出した。それは忘れていた夢とも言うべきものだった。就職をする際、わたしは二つの職業のどちらを選ぶかで迷ったのだ。一つは以前から憧れていた職業だったが、悩んだ末に結局大学で学んだことを生かせる今の職業をわたしは選んだのだ。そして、そうして選んだ当時の職業で挫折しているそのとき、もう一度出直して違う道に進んでみるのも一つの方法かもしれない、と思った。そのためには、新しいことにも失敗を恐れず挑戦してみることが必要かもしれない。本当に不思議なことだが、わたしは彼女達に会ってそのことを思い出し、そう考えた。

そして過去の自分の夢を思い出せたことはわたしに思いがけない新鮮な刺激を与えてくれ、わたしは勇気が出たのだ。だった。

ふと我に返ると、先程来た店の前に再びいた。店に入り、わたしは母に似合うバッグを見つけてくれた。満足して店を出たときのわたしの目には、もう街の景色は灰色ではなく色彩を持って映った。せつかく普段来ない街へ来た。

「覚えてる？ 小さい頃言っていた、あの日へ続く道の話と、幽霊事件のこと」

と小さな声で言った。懐かしい響きの言葉に眠っていた古い記憶がゆっくりと静かに蘇る。

あの日へ続く道。それは、幼い頃わたしたちがしていた遊びの一つだった。アニメか何かだっただろう、「あの日へ続く道」というものが出て来た。その道は時間を越えてある二つの時点をつないでおり、そのためその道を辿れば時間旅行をするように時間を飛び越えることができる……というものだった。わたしと春子はその話に夢中になった。そして、庭の表から裏へ通じる細く暗い通路をその道に見立てて遊んでいたのだ。だった。

そのようなある日。裏の庭でわたしたちが遊んでいるとき、不意に顔を上げた春子が「あっ」と声を上げた。聞けば、表と裏をつなぐ通路のところから誰かが顔を出し、すぐに引つ込めたと言う。

「お母さんじゃなかったの？」最初わたしは言ったが、春子は、

「違う。知らない女の子だった」と言った。そこで春子はその通路を覗きに行った。戻って来た春子は、

「女の人の後姿が見えたけれど、だんだん消えてしまった」とわたしに話した。わたしたちは顔を見合わせた。

「もしかして、幽霊？」

たのだから、少し自分の買物もして帰ろうかとわたしは思った。久しぶりに心の中に何かが溢れるのを感じていた。それは清らかな泉の水のように心地良く、尽きることはない、大切なものだった。

その翌朝、わたしは早く目が覚めてしまった。窓の方に目を遣ると、まだ暗い。わたしは布団から出てそつと外の様子を窺った。街に夜の明かりが残る中、空はやや明るくなり始めていたようだった。そして、次第に透明度を増した空に突然光が射した。美しい一日の始まりだった。わたしは少しだけ窓を開け、まだ涼しさを含んだ朝の空気を一杯に吸った。昨日心に満ちた、まだ新鮮な輝きを持って心に存在していた泉の水がこの美しい光景によって更に増したことを感じた。

もう、今の境遇にも負けないだろう。他の道を選ぶ余裕を持てるだろう。私の心にも朝陽がさんと射していた。

そのことを思い出すと、今でも気持ちが晴れ晴れとした。不思議な夢を見たその日の午後のことだった。

「お姉ちゃん、聞いて」春子がわたしに言ってきた。興奮した様子だ。

「どうしたの？」不思議に思っただけで尋ねると、

「本当にあつたの、あの道が」と言う。

「何のこと？」理解できずにいると、

春子が怯えた声で言った。

「わたしたちの家に幽霊なんかいないよ」

わたしはきっぱりと言って春子を安心させた。

これが、わたしたちの間で「幽霊事件」として記憶されている出来事だった。

わたしたちのうちどちらもそれ以降幽霊に出くわすことはなく、この話題もお互い口にすることはほとんどなかった。

「覚えてるよ。それで？」

懐かしい出来事を思い出したわたしは答えて、春子を促した。

「さっき、裏の庭の方に行ったの。その道の途中で、突然裏から声が聞こえることに気が付いたの。誰かいるのかなと思っただけで裏を覗いたら、小さな女の子が二人いて……驚いたから、慌てて表に戻って来た」

春子は先程よりも一層声を潜めて言った。

「分かる？ あの日、わたしが見た女の子はわたしだったのよ。あの通路が本当にあの日へ続く道になって、それを辿ったわたしは幽霊事件のあの日へ行ったんだと思う」

春子はこのことを言いたかったようだ。

わたしは、

「でも、あのとき春子が後姿を見た女の子は消えてしまったんでしょ？」

富士正晴全国同人雑誌 **第4回**
 フェスティバル
全国同人雑誌最優秀賞
まほろば賞
 2010 公開選考会 あなたも選考委員

10月31日 日 AM9時
 同人雑誌最優秀作品を自らの手で選ぼう
 同人雑誌界のエポックを

会場 ● 徳島県三好市サンリバー大歩危

主催 ● 徳島県三好市・徳島ペンクラブ
 全国同人雑誌振興会・文芸思潮

後援 ● 徳島新聞社・四国放送・三田文学・季刊文科
 中部ペンクラブ・作家集団「塊」

参加費 ● **無料** (候補作品を読んでいただくことが必要です)

※候補作は「文芸思潮」35号・36号に掲載

参加申込 TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848 文芸思潮

メールでも受けつけます asiawave@qk9.so-net.ne.jp 宿舎も手配します

「そう、あのときはそう見えたの。私だって信じられない
 と思った。本当にこんなことが起きるなんて。でも、今覚
 えているあの日見た風景と今日見た光景は辻褄が合う。女
 の人が消えたこと以外は、ぴったりよ。やっぱりあの道は、
 本物だと思う」
 わたしは思わず春子を見つめた。春子が強く言う言葉に、
 わたしの中でもう一つの出来事が思い出されてきたのだ。
 空気に溶け込むように消えた女の人。あれは、昨日の公
 園だった。そのとき、わたしも幻の道を見たのだった。春
 子の言うことが本当なら、昨日わたしが見た道も……だっ
 たのだ。それならば、昨日わたしが公園で見た二人の人物
 は、わたしだったのだ。いつも真っ直ぐに時間を歩いてき
 たつもりだった。だが、直線だと思った道は実は巨大な円
 の一部だったのだ。この今の時間も、多分まだ知り得ない
 「その日」につながっているのだろう。
 そのことを考えると、これから先、いつあの道に出会う
 ことがあってもいいように、直面する岐路に迷い悩んだ道
 程を滲ませながら生きていこうという思いが湧いてきたの
 だった。



林 由佳莉

はやし ゆかり

- 1984 北九州市生まれ
- 2003 福岡県立東筑高校卒業
- 2006 九州大学文学部心理学研究
 室卒業
 「九州文学」同人



九州文學

福岡県

「良質」の作品を目指して

「九州文學」は昭和十三年生まれだ。火野葦平さんや岩下俊作さん、劉寒吉さん、長谷健さん、原田種夫さんといった人たちが築きあげてきた老舗である。すでにその先人たちはこの世にはいないが、「九州文學」は健在だ。

しかし、近年の同人の高齢化、若者の参加の減少という傾向はわが「九州文學」においても例外ではなく、百人ほどいた同人数も一時は半数ほどにまで落ち込んで存続が危ぶまれた時期もあった。このまま立ち消えてしまったらどうしよう。先人たちの厳しい眼が天の上から針の雨のように降り注がれる。絶対に「九州文學」の灯を消してはならぬ。天の声は私たちの耳に痛いほど響き渡る。先も見えず、気力も喪失したまま惰性的に続刊していた第六期を断ち切って、第七期を立ち上げたのが平成二十年の春であった。新しく出発するにあたり、編集委員たちが福岡に集まって、とにかく「良質」の作品を目指すことを

誓い合って意思を一つにした。

その第一号に発表した編集委員でもある江口宣の「イエスよ涙をぬぐいたまえ」が「文學界」の下半期同人雑誌推薦作になり、幸先のよいスタートを切る事ができた。これに弾みがつき、同人たちの創作意欲が増し、次々に話題作を発表するに至った。

その後、「文學界」の同人雑誌評の打ち切りという残忍（？）な仕打ちにあったけれども、地方紙の「同人雑誌評」や「文芸思潮」「季刊文科」「三田文学」といった文芸誌の応援をいただいたことで、同人たちの創作意欲は衰えるところか、ますます盛んになったのである。

そうなると思わなかった。どこからともなく若い人たちからの問い合わせがメールを通じて現れるようになった。これは樋脇由利子さんの「文芸同人誌案内」というホームページを通しての訪問である。「九州文學」もここで紹介されていた。同人になりたいがどうすればいいか、というのである。彼および彼女らはどこかの新人賞に応募し、何回も失敗した挙句、同人雑誌に発表の場を求めてやってくるのだろうかと思っていたら、そんな人ばかりではなかった。その中の一人は、今の商業誌にあきたらず本屋さんで手にした同人雑誌を読んでいるうちに自分も書いてみたいと思っただけという。そう言えばわが「九州文學」も近辺の本屋さんで置かせてもらっているのだが、どこの本屋さんで

も一冊も売れなかったという号は一度もない。一つの本屋さんで最高二十八冊売れたこともある。これには私たちの方が驚いた。この現象をどう捉えたらいいのか、私たちはまだ捉えきれずにいるのだが、潮が満ちてきたことだけは確かだろう。

同人数もようやく百人近くにまで回復し、皆無だった二十代、三十代の同人が最近ではさらに増え続け、四十代までを含めると全同人の一割を超えるようになった。直近では十代の人も加入した。本誌に転載の、同人雑誌優秀作に選ばれた林由佳莉もその若手の一人である。「良質」の文学こそ「九州文學」の目指すべく方向である。

第七期「九州文學」は季刊で、現在、すでに九号（通巻五百三十号）を発行している。

（「九州文學」編集人・波佐間義之）



九州文學発行事務局
〒809・0028
福岡県中間市弥生一・二〇・二五波佐間方
093・244・8501

路上の鈴

遠矢徹彦

徒労に終わったいくどめかのハローワーク通いの帰途、なるとかせねばと思いつた方策があるわけもなかった矢野の心に、不意打ちのような強い帰郷への想いが湧き、路上に立ち尽くした。あの土地に戻って、しばらく身も心も投げだしたい、ただそれだけの願望がひどく切実な唯一のことに思えだしたのだ。ハローワークの建物を背に坂道を下りながら、彼は厄介な立木を切り倒したあのような空虚な心持ちになっていた。

列車内で飲みすぎた缶ビールのせい、膨張した重い血液が踵のあたりにけだるく澱んでいる。その足をひきずりながら金沢市内の目抜き通りをぬけ、ホテルに向かつて歩いた。片町の裏通りに面したあまりめだたないプチホテル

を、この街でしばらく逗留する必要がある場合にときおり利用していた。

ホテルにたどりついたその瞬間、なにかしら臓腑が凍てついていくような深い疲労感に引きずりこまれて、そのままベッドにもぐりこんでしまった。夜半に目が覚めてトイレに立ったあとも、寝つけないままに備え付けの冷蔵庫を開けて缶ビールを飲んだが、ふと路上で拾った金の鈴のことが気になりだして、床に脱ぎ捨てたままになっているズボンのポケットからそつと抜き出して眺めた。ホテルの近くまでやって来て、庇を密集させた飲食店街からこのホテルの位置に不意に折れ曲がる裏道に差しかけたとき、靴先にあたってかほそく澄んだ音色を立てて転がっていくも

のがあった。そのまま行き過ぎようと思ったのだが、その

音色の染み入るような響きに惹かれてほとんど反射的に片手を差し伸べていた。誰かが落としていったものらしい、金色の鈴のついたどこにもあるキーホルダーであった。どうしてこんなものを拾ってしまった、おまけに夜中にそれ

のようだ。
ふと、室内に立ちこめだしている夜気の澁みが息苦しく感じられてきて、いっきにそれを掻きまわしてみたくなった。少し力をこめ思いきつて鈴を振ってみた。静謐な水面を打つ水滴のような音色であった……。

*

とから自分のなかに入りこんでしまったこのものの存在が、疎ましいようなしきしまさら棄てるには惜しい断ち切れない郷愁にも似た未練、そんな物思いが矢野をゆっくり揺らしはじめていた。ひとたびめざめてしまったその感情の轍が、しだいに消しがたく深い条痕を心の皮膜に刻んでいくようなのをひっそりと感じていた。彼はベッドの上であぐらをかいたまま壁にもたれかかった。今はいったい何時なのだろうか。壁時計の液晶文字はひどく読み取りにくかったが、どうやらもう午前二時を過ぎていくようだ。香林坊の裏通り界隈の飲み屋街も、ときおり遠くで深夜の客を送り出す女たちの、嬌声のさざめきがほんの微かに聞こえているだけになっていた。寄りかかっている壁の反対側の壁、ちょうど真向かいにあたる位置に四角い大鏡があり、スタンドの明かりだけのせいなのか、いやに陰影の濃い鏡く肉のそげた青白い矢野の顔が映っていた。腹部のあたりで缶ビールを左手に握りしめ、れいの鈴付きのキーホルダーを右手でつまみ上げている。どこかの見知らぬ初老の男

意識がまだ戻らないでいるその女の顔を、矢野はタオルを絞ったりする合間にもすばやく盗み見ていた。それまで気づかなかったが、血糊をぬぐいとられた耳朶には、朱色の七宝のピアスが光っている。そのことがいつそ彼の視線を注意深いものにさせていた。妙に大人っぽい眉のあたりの意志的な暗さとはうらはらに、透けて見えるのは目もとやあごの輪郭に残る幼顔なのであった。そしてその顔立ちには、すでにどこかで出会ってしまったような気がしてならない。からまりあう地下茎の繊毛にも似た模倣とした記憶なのだが……そのときであった、あまりにも幽かどほとんど耳鳴りか幻聴の類いともとれる澄んだ鈴の音を、たしかに聴いたように思った。ひよっとすると、彼女のポケットにでもしまわれていた鈴付きの御守りか何かがあるいは鳴ったのかもしれない。その昔色は、耳に染みついてなおしばらく残りつづけた……。

お茶の水駅を出て、通いはじめたばかりの美術研究所に向かつて歩いてみると、駅構内にも微かに立ちこめていた催涙ガスの悪臭が、風の向きぐあいでもわかにか強まり、群衆の喚声とガス銃の発射音が聞こえた。慌しげに行き交うものの中には、隊列から離れてピラを配っているヘルメット姿の学生たちもちらほら見受けられる。受け取ったピラにはベトナム反戦、成田空港阻止という見慣れた活字が並んでいた。大通りに出たとたんに、道路を遮断した赤黒の旗とヘルメットに埋もれるぎっしり一塊になったデモ隊列、それらと一定の距離をとってガス銃と桶をかまえた機動隊という、すっかり馴染んでしまったいつもの光景が目に入った。その日はしかし火炎瓶なども飛び交っていたりして、かなり党派系の学生や群衆の動きも活発で、彼らの興奮の度合いがその喚声の高さに表れていた。が、矢野は物見高いやじ馬の間をすりぬけると、いくらか冷えた心持ちを抱いてペーブメントを研究所のほうに向かつて歩いた。まだ開講までには時間があったので、大通り沿いの行きつけの喫茶店に入った。こうした騒乱の眺めはすでにこの界限の日常風景でもあったから、たいていの商店や喫茶店は営業中の看板をだしていた。

店内は昼飯時のせいもあってか、取材用のカメラを卓上に置いた新聞記者らしいのや、すぐ先ほどまで群衆にまぎれて石畳の欠片を投げっていたのかもしれない、ノンセクト

く荒れているな、学生さんたち。この界限を解放区にしようってんだからな、ちよつと無茶だよねえ」と誰にもなくぼやき口調で言った。

「鍵をかけちゃいましょうよ、それにシャツターも」顔色の悪い学生風の男が顔見知りらしいマスターにそう言うと、マスターも慣れた態度で領き、作業員たちと矢野のほうに諒解を求める視線を投げた。

作業員のほうも矢野も、むろん外に出るつもりなどなかったので黙って領き返し、そのまま食事をつづけていた。ふと気づくと、それまで新聞を読んでいた作業員のひとりが、ゆっくりと窓辺にやってきて窓ガラスに両手をあてがいて、街路で始まりだしたいっせい検査の光景を食い入るように眺めている。まだ若い、たぶん学生たちと同じ年頃の男なのであろうか、陽に荒れたやや偏平な顔立ちに濃い意志的な眉が印象的であった。

「あ、ひでえな、またやられてるわ、可哀想に」と男は独り言めいて呟き微かに眉をひそめていたが、すぐに無表情に近い状態に戻るといつまでもじつと街路の光景に見入っていた。

が、そのとき矢野は、男の農民の面影を刻んだ横顔と角張った肩の輪郭に、ふと言いやうもない飢えに近い寂しさが滲みだしているのを感じた。それは大都市の仄暗い隧道を微かな光を求めて、たった一人で歩かねばならない者の、

の孤独そうな学生風の男、そして騒ぎのただ中であっても、仕事を続行しなければならぬ道路工事の若い作業員たちもいた。トーストと紅茶を注文すると街頭が一望できる窓ぎわのテーブルに席をとり、美術研究所発行の薄っぺらなテキストに目を通したりしていた。

独学で習得した木工芸の技能が思わぬところで役立ち、矢野は都下多摩地区の障害者施設で働きだしていた。けれども、彫刻家を志しながら窮迫した家計の事情で、美大入学を断念した暗い思いだけはずっと心に残っていた。その研究所に通学しはじめたのも、そうした心のひもじさをいくらかでも満たそうとしてのことだった。そこは主として美大受験生や日曜画家たちの溜まり場なので、講座内容も美術教養的なものでしかなかった。

にわかに窓ガラスごしの街路が騒がしくなりだし、歩道を小走りに行き交う人々の動きが激しくなった。ガス銃の発射音がひっきりなしに間近で響き、デモ隊列が散り乱れて大通りを駆けぬけていく姿が見える。

「おお、始まつたらしいな、いっせい検査が」そのときを待ちかねていたように、記者らしい男がなんだかひどく嬉しそうに呟いて、カメラを手に立ち上がり勘定もそこそこ外へ飛び出していった。

「因果な商売だね、記者つてのも」男を見送りながら、マスターは蔑むような笑いを浮かべ、「しかし今日は、自分で自分にも覚えのあるあの心持ちなのに違いなかった。いつしかその男の眼差しに重ねながら、矢野は街角の叛乱の終焉を見つめていた。

喫茶店前の路上に落下したいくつかのガス弾から、まっ黄色い催涙ガスが噴きだし、それが扉の隙間から侵入しはじめた。マスターはシャツターを半分ばかり下ろし、濡らした古新聞を隙間に詰めこむ応急の目張り作業をやりだしたが、すぐに手を休めると傍で手伝っている矢野たちを見返り、扉のガラス板の向こう側を無精髭のめだつ顎先でしゃくつてみせた。

「おい、あれを見ろよ」

見ると、路上をこちら側に向かつて、少女めいた身体つき若い女が、酔っ払いのようにふらついて歩いていた。首に引っかけられた顎紐にだらしなく吊るされた格好で、黒ヘルメットが彼女の背中でのたひたに揺れる。前のめりになって手を伸ばした彼女は、扉にたどり着くとガラス板に両手をあて、しゃがむような格好で身体を支えながら内部の様子を窺いだした。たぶん追われているのであろう、額の傷から流れだす血液のすじがいくつにも分かれ、頬から顎へ伝って滴っている。それが陽を受けてきらつき、オカッパ刈りの頭髮が粗彫りの阿修羅像のように逆立ち、血糊でごわつき膨らんでいた。疲労と興奮のために澱みくすんだ顔面の血色が、内臓を病んでいるもののように青黄色

く、鋭く張りつめていた。その植輪人形に似た単純でつぶらな目と、何かを叫んでいる小さなまるい口の形だけが、いやに元氣そうに見えるのだった。不運にも網にかかって陸へ引き上げられ、地べたで空しく跳びはねている小魚の顔だな、とそんな印象が彼の脳の襞に柔らかく触れてきた。彼女は二、三度扉のガラスを激しく叩いてから、ぐにやりと膝を折るとその場所へ倒れこんだ。コンクリートの上を転がるヘルメットの音がうつろに響いた。マスターは扉の内錠を開けようとして少し慌てていたのか手間取っていた。さいわい追手は来ないようであった。テーブルと椅子を片側へ寄せると、その女をどうにか横たえるだけのスペースが床板の上にできた。彼女は緊張の緩みと額に受けた打撲の衝撃とで軽い失神状態に落ち入っているらしく、少し傾いた蒼白な横顔を見せたまま昏睡している。耳朶から首筋にかけてこびりついた血糊がまだ鮮やかなまま。マスターが奥の部屋から毛布を抱えて出てきたのをきっかけにして、矢野たちは水を汲みに走ったり、タオルを冷やしたり、扉口で見張りに立ったりしはじめた。

「マスター、血止め薬みたいなものはないのかね」と若い作業員は手ぎわよく彼女の胸もとを緩め呼吸を楽にさせながら言った。

出血はいくらか止まりかけていたとはいえまだつづいていた。彼は絞ったタオルで彼女の額の埃や凝固しはじめた

らか困惑した面持ちでそれを受け取りながら言った。

「あたし、節子っていうんです。大学はM美、故郷が金沢なの……それだけで勘弁してほしいんですけど」

「いや、いいんですよ、当然のことですから。でも、驚いたな、しかし」

「なにがでしょうか？」

自分の郷里も金沢であることを言うと、あら偶然ね、と呟いただけで、それだけのことでそんなに驚くこともなからうに、といったふうであった。

「せつちゃん、という幼友達がいましてね。その子の名が節子なんですよ。……亡くなりましたけどね、幼い頃に」

「好きな子だったんですか」

「あの年ごろじゃ芽生えないんじゃないかな、そういう感情って」

喫茶店で耳にした幽かな鈴の音のことを、彼は思い浮かべていた。

「そんなことないわよ、現に生きてるじゃないのよ、あなたの中でせつちゃんが……嘘ついても駄目です」そう言うのと彼女は、ようやくすべての事情が呑みこめたとでもいうふうに独り合点に領き、それまでいくらか硬さの残っていた表情をふっと崩して、柔らかない笑みを浮かべた。

「ところで、妙なこと聞くようだけども。きみ、鈴付きのお守りかなんか持ってない、ポケットに」

血液を拭き取っている。タオルは矢野が洗い、学生のほうはバケツの水を取り替えるためにまた奥へ走り出した。後で聞いたのだが、その作業員は故郷の村の消防団員だったことがあり、救急処置を一通り心得ていたのだ。彼のてきぱきした処置ぶりに、矢野は感嘆の思いで見とれていた。

「これで消毒すると、よくきくん」飲み残しの度の強そうな焼酎入りの大瓶を差し出してマスターが言った。

焼酎の瓶と家庭用救急薬箱をマスターから受け取ると、村の元消防団員は立て膝のまままで彼女の首の下に手を差し入れた。

彼女の風体がめだつとまざいということ、乗車駅を變更し、神田駅まで作業員たちの業務用の軽トラックに乗せてもらった。彼女の下車駅が国分寺だったので、同方向の矢野が彼女を送っていくことになったのだが、衣服の損傷があまりにひどかったので、間に合わせのジャケットとジーンズを通りすがりの洋品店で購入した。駅のトイレで衣服を取り替えて出てきた彼女は、なんだか別人のように快活そうに振る舞いだした。顔の大きな絆創膏にときおり人々の視線が走ったが、彼女は平気で人ごみをすり抜けていった。ホームのベンチで電車を待つ間、やつとお互いの内部に遠慮がちな視線を投げるような心持ちになっていた。

手持ちぶさただったので名刺を差し出すと、彼女はいく

「そんなもの、持ってるわけじゃないでしょ。なぜ？」彼女は、沈黙してしまった彼の内部を覗きこむような目つきをして、「へえ、矢野さんて面白い方なのね」と手にした名刺と彼の顔を見くらべながら、その四角い紙片をひらひらさせて言うのであった。

国分寺駅で下車する間ぎわに、それまで無言だった彼女が顔を矢野の耳もとに近づけて囁いた。

「あたし、せつちゃんの身代わりになってあげます。きつと訪ねていきますから、近いうちに」

しばらくして彼女のほうから電話があり幾度か会ううちに、両親とは絶縁状態で仕送りも途絶えがちなこと、したがって家賃も滞っていて明日にでも出なければならぬ窮状にあることなどを知らされた。彼はごく気軽な口調で、部屋を整理さえすれば、きみが使えるような一室ぐらいいんとかなりそうだよ、などと喋ってしまっただけから、すぐにへんな間の悪さを覚えてたじろいでいた。

「つまり、間借り人ということね」と彼女は、ひどく晴ればれとした声で言った。

「間借り人か……ちよつと無味乾燥に響くなあ。同居人ってとこかな」

彼は気持ち少し上滑りしている状態を意識していた。「同居人。いいわねえ、もうそれに決めたわ。……同棲って言葉が流行ってるけど、あたしあれ大嫌い。べたつとし

た感じがして」

すっかり上機嫌になった彼女は、その国分寺駅前の居酒屋でカウンターに頬杖をつき、何杯目かのビールの大ジョッキを飲み干しながら喋っていた。外見のひ弱そうな体型からは予想外な、その飲みっぷりに驚かされたが、彼のほうも先ほどのへんな間の悪さとたじろぎをいつしか忘れてしまっていた。彼女の家財道具が運びこまれたのはそれから間もなくであったが、一室だけではとても納まりきれなかった……。

*

ホテルを出た後も、ベッドで感じた昨夕の疲労の深さからまだ抜け切れていなかった。しばらく歩いて行くと、大通りを外れた裏道沿いに午前の薄陽を映して用水路が流れている。その流水はところどころで渦を巻き、急傾斜の優美な曲線コースを蛇籠の網目にも似た鋭い流紋をつくって走りぬけていく。強い流速が巻き起こす風を受けて、水際の石垣に繁茂する蘚苔類に混ざった茎の長い白い花々が、小止みなく一定のリズムをとってふるえていた。それらの草花は勢いのよい流れから偶然の微妙な力学によってそこへたどり着いたものらしい。

香林坊通りの道筋がゆるやかにカーブを描き、犀川大橋にいたっている河岸沿いの街並みが見えた。旧犀川大橋の、

背後で森田の声がした。作品を一通り見終えたららしい森田は、画廊の片隅に据えられたソファで一休みしていたが、やがて立ち上がると矢野の脇から覗きこんだ。

『失われた時を彷徨する女の自画像』と題されたその人物画の描き手は、アマチュア画家で森田の知りあいの三島澄子という女性だった。病んでいるような肌色をしたもうあまり若くは見えない女が、鮮血に近い朱色のイヤリングをつけて手に花束と麦藁帽子を持ち、ひっそりとうつむきかげんに立っていた。一瞬、矢野は息をつめて身動きできなくなっていた。その女の輪郭から醸しだされる雰囲気、別れて久しいあの節子にあまりにも似ていたからなのだった。が、気を落ち着けてあらためて視線を定め直している間に、すでにその印象はかき消えていた。全体のバランスを無視した奇妙な明るさをたたえている青、過剰な塩分を孕む死海の藍、腐っていく沼の緑青、それらが液状に混じり合う空間へなれば溶けくずれていきそうな女の像は、深い眠りの底に置き忘れてきた一葉の写真、へんになまなましいくせにに輪郭をもつことのない夢魔といったものとの類縁性を感じさせた。美術的な価値とはまたべつこのころで、その作品に知らぬまに魅せられてしまっている自分に気づいて、彼はわれに返った。森田は、矢野の視線が絵の方に引っぱられたままなのが気になるらしく、こんどは矢野よりも熱心に女の像に顔を近づけた。その女性画家

塗料の剥落した灰白色のずんぐりした姿はすでになかった。スケッチブックに描きつづけた遠い日の面影だけが、淡い木版画風の輪郭を残して喰の薄皮に刷り込まれていた。橋梁の見えるこの界限にやってくるたびに、胸のあたりが妙にざわついた。いつのまにか嫌な癖になってしまっている溜め息をつき、矢野は大橋の中ほどの手摺りにもたれ、灰色の川面をしばらく見下ろしていた。川風の向きが変わるたびに、堰から溢れる流水の轟きが不意に音量を上げて耳もとをかすめていく。

画廊『S』のあまりめだたない看板が、河岸通りに面したひよろ長いビルの二階の壁面に取りつけてあった。その建物の前で矢野は心になんとなくひっかかるものを覚え、はてなんであつたらうと思案顔で立ち止まり、くすんだ看板をしばらくぼんやりと見上げていた。すると二年ばかり前に幼友達の森田に案内されて、この画廊を訪れたときの記憶がふと蘇ってきた……。

氷片を透過する光のような照明の輪の中に浮かぶ、壁面の女の像を見つめたまま、矢野はしばらく立ち尽くしていた。

——ほう、さつきから、えらく熱心に見とるねえ……ああ、なるほどこれか。いかにも矢野の好きそうな絵や。ちよつとわしらには暗い感じやけどな。

についての面識などなかったのだが、森田たちのやっている小さな読書グループ『犀の会』のメンバーらしいことは彼から聞いて知っていた。

そのとき矢野は何ものかの強い力によって、全身の感覚の中樞が女の自画像に向かつてふたたび吸い寄せられているのを意識した。ああ、やっぱりあそこからだ……。それはかなり明晰な感情をとまなう一種の気流であり、絵画の内部からこちらに向かつてたしかに放射されていた。目眩感を打ち払うように矢野は軽く頭をふると、森田を促しながらわざとゆっくりとした足どりで、その画廊の受付口をすりぬけビルの階段を下りていった。出てきたばかりの画廊の仄暗い空間の方になお氣をとられている矢野の目の底に、朱色の小粒の塊が焼きついていて、青い影のさした自画像の女の、襟元からのぞく肌色にその朱が染みだしている。残像が光と輪郭を失っていく速度を恐れるように、矢野はビルの出口で立ち止まり目を閉じていた……。

醒め切らない物思いをなけば引きずりながら、矢野はその画廊の前を通り過ぎ、いつしか香林坊の裏道を歩きだしていた。そのあたりから大通りよりもかなり低い地形が広がっている。湿った空気が静けさの中に澱んでいて、それはちょうど死者が漂わせているものに近かった。夜の化粧を落とさぬままに眠りこけている女たちの姿態を思わせる

飲食店街、屈曲した路地のあちこちに庇を重く垂れたまま、依怙地に沈黙している古ぼけた格子戸の民家の軒先といったものが、商家と混在しながら犇っている。河岸に平行してそれらの狭小な街路に沿った家並みが、筆先から滴る薄墨書きの線条となって幾筋も走っていた。

不規則に蛇行して流れる用水路脇の小路をゆつくり辿りながら、いつのまにか長町方向をめざしている自分に気づいて、矢野はふと歩を緩めていた。やはりあの場所に向かつて歩きはじめていたようであった。まるで自分が同じ行動を繰り返すネジ巻き人形みたいに思えてきて、彼はいくらか自嘲気味に足もとの小石を蹴った。それは水路の急流に音もなく吸い込まれた。けれども、水路の暗い水底に潜むという精霊たちの、静かでしかし抗いがたい力は、矢野を誘って容易に離さなかった。屈曲度の強くなっている用水路の石垣に打ち当たる水流のせいで、水音が高くなっている地点に来たときであった。上流で誰かが落としたものらしい赤いゴム風船が一個、早い流れに翻弄され水面を踊り跳ねるように滑走していくのが見えた。しつこい不眠症に悩まされていた頃、周期的にその兆候が現れはじめるとかならず見る夢があった。黄褐色の奔流が、犀川の河岸ざりざりにまでせり上がった。群集が河岸沿いに何か大声で喚きながら駆けていく。彼の名をくり返し叫びつづけて助けを求める女の子の声が聞こえていた。先ほどまで自

分の手をしっかりと握っていた柔らかい手の感触と温みが、鋭く脳神経を引っ掻きまわした。黒い流木に見えかくれして、激しく川波に採まれている赤い一個の風船……。

その犀川沿いに建っている神社の、閉じられた社殿の扉は風雨の侵蝕で塗料の剥落が目立っていた。狭い河岸通りに境内からせりだすように枝を広げている楠の古木が、道路を跨いで護岸の側にまで梢の先端をさし伸ばしている。そのほとんど変わっていない形と、暗く厚く重くなった葉の繁みから仄かに匂う樹脂の香りが、遙かな日の楠の匂いを呼び覚ました……

或る年の夏の夜、楠の木陰に遮られた夜祭りの社殿の欄干に額を押しあて、彼はずっと一人の少女を待っていた。矢野の母が再婚先で病死して間もなく、浅野川沿いで遊郭を営んでいた義父の弟夫婦一家に少年の彼は引き取られた。夫婦には彼より四歳年下の娘がいて、その彼女の名が節子であった。せつちゃん、と愛称で呼ばれていた彼女を妹がわりに連れ歩いていた或る日、ふとした矢野の油断から犀川下流で彼女を溺れさせたことがあった。近くでゴリ漁をやっていた男たちに助けられたが、肺炎を患った彼女の予後は捗々しくなかった。里親と義父から叱責を受けた彼は、せつちゃんと遊ばないという条件つきで、郭の離れの物置のような一室が彼の新たな居場所になった。水難事故があって以来、せつちゃんと意識的に顔を合わせないようにし

ていたが、登下校の途中などで遠くから互いの視線が交わされる瞬間がむろんないわけではなかった。けれども、そこから先へ心が伸びていこうとするのを反射的に避けていた。家族の視線を恐れてというより、惹かれるものへの理由のない反発感が足首を縛っていた。鬱々と過ぎようとしている梅雨の終わりの頃に、せつちゃんが夏祭りの夜に犀川神社のお巫女さんとして踊ることになったという、郭の娼妓たちの噂を耳にした。犀川神社にお巫女さんの欠員が生じたのを、仕事の関係で縁のあった宮大工の義父が聞きつけて、弟夫婦に持ちこんだ話らしい。

社殿の奥の大鏡の鏡面が暗闇になかば溶けだして、光る楕円形を浮かび上がらせている。この地上に行き場をなくした彷徨える魂魄というようなものがあるとするれば、たぶんこんな風であるのだろうか。すぐ近くで神官が太鼓を打ち叩き笛を吹いていた。巫女が舞う空間は、四方の大蠟燭の明かりのせいで、スポットが当てられたようにほぼ円形に浮かび上がっていた。すっかり大人びた物腰になっているせつちゃんが、その中央つま先立って伸び上がっていた。右手の金の鈴のついた柄をしゃらん、しゃらんと巧みに捻って鳴らし、ゆつくりと左右に白衣の袂と赤い袴の裾をはらうように舞わせている。不意に激しい摺り足で黒光りする床板を滑るように小走り、白足袋の幾重にも重なりあう弧を描いていく幼顔の白塗りの巫女。彼女は

ふたたび中央に戻り、赤い袴の裾を優雅なしぐさで少し蹴り出すようにして足腰でバランスをとりながら、こんどは思い切りぐいぐいと伸び上がり背筋を大きく反らせると、その仰角にのけぞった女に成りかけの白々とぬめる喉首が、いきなり彼の目に烈しいフラッシュを浴びせる。せつちゃんは両手で金の鈴房の柄を掴み持つようにして高々と差し上げ、白衣の肩先を物狂わしく震わせてその鈴房の柄を連続的に力強く捻った。仄暗い空中に差し伸べられた巫女の袖口からあらわになった腕のしなりが、烈しく絡み合い交尾する二匹の白蛇の鎌首に見えてくる。大蠟燭の明かりに照り映えた金の鈴房が、エピソードの大捻りを数回繰り返すと、しゃらん、しゃらん、しゃらん……とひとときわ高く鳴った。

その夜、遅くなってから気づかれぬように自室に戻った彼は、寝入りばなに夢を見た。しなり絡み合うふたつの白腕の先端で鳴り震える鈴房の、眩むような光が額から背筋に沿って下半身を貫いたかに思えた。幽かな痛覚の入り混じった甘美で奇怪な感覚に怯えて弾かれたように起き上がる、濡れた下半身の感触をたしかめるために慌てて掛け布団をはぐった。シーツに半透明の歪んだ楕円形の粘った染みができている。異様で未知なこの体験の衝撃に惑乱しながら、噴き零したものの返り滴に光り、まだ疎らで柔らかな性毛の茂みに起立するそれを、彼は凝然といつまで

も見つめた。夜半に近い街頭で客を呼ぶ娼妓たちのさざめきが、離れの居室の窓ごしに聞こえていた……。

神社からの帰途、河岸通り沿いの小さな喫茶店に入った。そこは和菓子などを作っている店なので、喫茶コーナーは狭く相客は居なかった。通りの護岸側に風情のよい一本の柳の古木が孤独そうに立っていた。

珈琲を注文し終えて店内のいくらか空虚な静けさに身を沈めていた。写真入りの旅館広告を刷り込んだカレンダーが、店内の壁面に吊るされているのが目に入った。何げなく視線をその上に這わせていた矢野は、その写真と宣伝文句に目が吸い取られ、瞬きを止めた。河岸通りを歩いているときに感じた、たえず何か忘れ物でもしているような心持が離れなかったそのわけが、古い木造旅館の輪郭をカレンダーの写真に見いだした刹那に納得できた。過ぎた歲月の傷みを封じこめた一葉の写真を、書物に挟み忘れたままにしていた或る日、偶然にそれを書架で発見したときの、あの軽い空白感と驚きのない混ざった情緒。それらが不意に記憶の底から重い浸出液となって、欠落した意識の隙間に押し上がってきたのだ。

節子と暮らしはじめた頃、一度だけこの河岸通りを歩いたことがある。長引いた労働争議の果てに失業し、食いつなぎに行商めいたことをやっていた。彼女は絶縁状態になっている実家などにむろん立ち寄ろうとはしなかった。知

女の後ろ姿が、職場で仕事の手を休めたときなど、矢野の脳裏にふっと浮かんだりする頻度がしだいに多くなりだしていた。

日曜日だったせいか居酒屋はまばらな常連客だけなので静かであった。矢野は入り口に近いカウンターに席を取り、所在のままに彼女から手渡されていた反戦ピラや政治パンフの類いに視線を落とした。今朝方、珍しく早起きをした彼女は、黒ヘルメットを押し込んだリュックを背負い、着古したジーパンにジャンパーといういつものスタイルで、未明の路上を一度も振り返らずに三里塚闘争の現地めぐしで急ぎ足で去っていった。その節子のいかにも颯爽とした後ろ姿を、矢野は立ち尽くしたまま眩しそうにいつまでも見送っていた。

「待った？ これでも大急ぎで来たのよ」居酒屋の扉を勢いよく押し開けて入ってきた節子は、大仰に吐息をつきながら言った。

「おれも来たばかりなんだ……それより、無事に戻れてよかったな」

「月並みな言い方するのね、それとも皮肉のつもり？ 大怪我するか、バクられてもすればよかったかしら」彼女はえくぼの濃い笑顔を浮かべて、わざとのように矢野の顔を

り合いに出会うことさえ恐れて行き交う者にもひどく気をつかって道を歩いた。それでも二人には久しぶりの帰郷であったので、来し方の心の強ばりがいくらかほぐれていくような気がした。河岸通りにやっと安い一軒の旅館を見つけ、その二階の窓を開け放つと、眼下に犀川の流れを見渡すことができた。狭い窓枠のせいで、互いの肩が窮屈そうに重なり合うのも快く感じられ、半身をのりださせて流れの音と風を感じている一刻が、まるで小さな旅の途上にいる見知らぬ若い男女の絵姿のようにも意識されたりした……。

*

その日も国分寺駅前の居酒屋で、矢野は節子を待っていた。彼女との同居生活のきっかけになった場所であったが、二人はその後日を決めてそこへ出かけていた。職場が遠距離だったせいもあり彼の出勤時間は早かった。節子は集会やデモなどといった活動家連中とのつき合いを、いぜんとして生活の要にしていたので帰宅も遅く朝の寝起きも悪かった。矢野はそのことを気にしていないというわけではなかったが、自分たちのこのちぐはぐな生活のリズム感が醸し出す奇妙な明るさと放恣さを、はじめはとても新鮮なものに思っていた。けれども帰宅してから夜半まで、居間の片隅にイーゼルを立てカンバスに向かいつづける彼

覗きこみ、足もとにリュックを無造作に置くと彼の隣に座った。そしてタバコに火をつけ深々と吸いこんだ。

「どうだった……現地の様子は」

「みんな、なんとかがんばっているわ。……でも、セクト間の内ゲバが激しくなりだしているの。それがいちばん辛い、機動隊よりも恐ろしい」

「そうなのか、やはり」

「だんだん暗くなっていく。足もとからなにもかもがガラガラといきそうで……心の火が、そのうちふつとかき消えてしまう気がするの」そう言っただけで、マスターが置いていった大ジョッキのビールの泡を、硬い表情のまま頬杖をつき、唇をまるめると勢いよく吹き飛ばした。

そしてカウンターの木肌には散る泡屑が液状に変容するのを、放心したように凝視しつづけている。ヘルメットに押され、いびつに変形した毛髪のあわいから彼女のかたちのよい耳朶がのぞいていた。見慣れた濃い朱色の七宝のピアスが、室内の明かりを反射して光っている。二人を襲った不意の沈黙に抗うようにして、矢野もまたその光る血の塊に似た小粒のピアスを、見つめつづける以外に方途がなくなっていた。

ちようど相席の客が入ってきたのを潮時に、矢野は久しぶりに街頭の賑わいの中をぶらついて見ないかと節子を誘った。駅前受け取ったピラに、商店会主催の恒例の祭り

の案内が載っていたのだ。路上の夜店も出るという。

「夜店ね、いいなあ……もちろん異議なしよ。でもその前にちよつと準備しなきゃ」と言つて彼女は頷きながら先ほどの濃いえくぼを取りもどすと、すぐに闊達なしぐさで立ち上がり足もとのリュックに手を伸ばし、その中を「ごそごそやりだした」。

リュックからは黒ヘルメットや汚れた軍手、タオルといった類いのものがぞいでいたが、目的はそれではないらしかつた。取り出されたのは見覚えのあるジャケットであつた。それは、かつて神田駅前境界の洋品店で間に合わせに彼女に買ひ与えたあの一着だつた。あれ以来ほとんどそのジャケット姿の彼女を見かけたことがなかつた。そのことがあらためて不思議に思えてくる。

「大切にしまつておいたのよ、ずっと」訝しげな矢野の表情を察知してか彼女は言った。

「今日あたり、これを着てみようかなつて気がしてたの。予感的中ね、持つてきてよかつた。久しぶりの街歩きにジャンパーとリュックじゃ、やほくさいもの」

そのジャケットを小わきに抱え、彼女は小走りにトイレに向かつた。着替え終えて戻つた彼女の櫛を入れた髪は、柔らかな弾力をとり戻して膨らんでた。薄いルーージュがそのジャケット姿にじつによく似合つている。神田駅のトイレから出てきたときの印象がその表情に重なり、矢野の

頬はひとりでに緩んだ。節子はリュックを背負い直すと彼の前に立ち、歩幅のある歩みで暮れなずむ街頭の賑わいの方へ向かつた。

夜店の人込みにも飽き、少し疲れて裏通りを歩いていたときであつた。

「珍しいわね、こんなところに」と言つて立ち止まつた彼女が、民家に小さな看板を出しただけの目立たない一軒の店を指さし、矢野の視線をそちらに誘つた。

その店には彫金と七宝焼の手作りのアクセサリーが並べられていた。間接照明のおだやかな灰明かりに包まれたそれらのひとつひとつが、独自の美の陰影をひっそりと競いあつている。壁面には目立たないかたちでいくつつかの静物画が掛けられていた。

「この色、とても気に入つたわ」

顔を近づけ熱心にアクセサリーを吟味していた彼女は、そのうちのひとつをつまみ上げ、ほらつというような手つきで矢野の前に差し出した。それは彼女のピアスよりひとまわり大きい七宝のイヤリングで、明るく鮮やかな朱色に輝いていた。

「お似合いてすよ、きつと。わたしもその色がとても好きなんです」

それまで奥の古い籐椅子に静かに腰掛けていた和服姿の女主人が、気づかぬ間に笑みを浮かべて節子のそばに立つ

ていた。豊かであつたときの名ごりをとどめている灰白色の長髪を無造作にヘアピンでまとめている。そのヘアピンの飾りにもやはり朱色の七宝焼の小粒の珠が光つていた。彼女は近くにあつた姿見の前に節子を誘い、慣れた手つきで節子のピアスを外してイヤリングをつけた。鏡面に映る二人の女の、微笑みながら寄り添う立ち姿を、矢野は少し離れた場所で眺めていた。彼女らを飾る二つの七宝珠の朱の強い魅惑の磁力が、彼をその鏡面の内側へしきりに誘いこもうとしている……つかの間おそつたそんな幻惑が、私たちの部屋に入り込んだまま出られなくなった孤独な少年の甘美な悪夢、久しく忘れさつていた意識下のフィルムを不意に唸に蘇らせる。彼はしばらくそのせつない揺らぎ感に身をまかせてじつとしていた。買うことに決めたイヤリングの支払いをすませていると、背後から節子の弾んだ声が聞こえた。

「誰が描いたものなのかしら、この絵」

先ほどまでそれほど気にしていなかつた絵だつたが、彼は節子に促されてその壁面の絵に目を凝らした。現代絵画の領域から取り残された古風な写実を基調とした作風なのだが、力強い線と色彩のリズム感には素人ばなれしたものがあつた。その絵画に見入つていた節子が、女主人のほうに問いかけの視線を投げると、すばやくレジを離れた彼女はにっこり笑つて頷き返し節子のほうへ歩み寄り、その絵

は自分が長年描きつづけてきたものの一部分のだと、いくらかほにかみがちに話しました。そして偶然にも節子と同じ美大の出身であることがわかつた瞬間から、彼女たちの会話は急速に親密さの度合いを深めました。女たちに特有の軽やかに転がっていくお喋りのピリオドはなかなかやつてきそうになかつた。矢野はしかたなさそうに壁面の絵のいくつかを繰り返し見つづけていたが、そのうち絵の印象のほうもしだいに希薄になりだした。

帰途の路上にはまだ夜店が並んでいた。狭い商店街の人込みを歩いている間も、彼女はイヤリングが気になるらしく、ときどきショーウィンドーに映る自分のシルエツトに目をやっていた。

「なんだか、あたしには華やかすぎる気がしない？」

「そんなことないよ、すごく似合つてる。きみの雰囲気」

「でも、ヘルメットを被るときは、外さなきゃね」

「……」

「やっぱり、これを付けるのは今夜かぎりにしておこうかな……」そう言いかけて彼女は、矢野の沈黙を解きほぐそうとでもするように言い足した。「とても楽しいひとときだったわ。きつと忘れられない日になりそうな気がする。だから大切にしまつておきたいの、このイヤリング」

夜店を見終えて中央線で立川駅に向かつてた。二人は

吊り革を掴んで快い電車の揺れに身を任せていた。夜の車窓の硝子面には、節子と矢野の輪郭のぼやけたシルエツトだけが映っている。しかし節子の眼差しはそこではなく、もっと遙かな茫漠としたものを追うように、いくらか不安げに見ひらかれていた。

「あのひとのように、働きながらひっそりと、誰かのためにでなく絵を描いて生きていく……いいなあ、ああいうのって」節子はぼつんとそう呟いたきり、車窓の向こう側に抜がる闇の流れを見つめつづけていた。

節子を抱いたのはその夜がはじめてというわけではなかったのに、矢野にはなぜかはじめてなのだと思えてならなかった。彼女の肌に熱い未知なおのきが間歇的に疾走しさをのを彼は感じた。逃れ去る火の鳥を捕まえようと、彼は不器用なしぐさでそのたびに節子をひしと抱きしめていた。深く寝入っている節子の耳朶には、今夜かぎりなのだという、あのイヤリングが大粒の血滴のように鈍く光ってみえた。夜半に目覚めた矢野は、彼女のそれをなおしばらく凝視しつづけていた。ふとそのとき、矢野は彼女のそれに見入るおのれの眼差しに、なにかしら卑しく薄汚れた酷薄なものを意識してたじろいだ。彼自身にさえもしかとは定め難い、つかの間に移ろう情感の陰影であったが……。

美大を中退してからの彼女は、かつての活動家仲間との縁のほうも切れたらしく、デモなどに行くこともなくなっ

てのことなのか、とても不可解なことではあったが、その油彩画は節子の言うとおりに玄関脇のトイレの壁板に、すでに三年近くも立て掛けたままにしていた。たぶん今日あたりの段階でついに仕上がりの目処がたつたのであろうと、内心ほっと溜め息をつきたいような気分分、満月と狼の童画のようなその構図にぼんやりと目を凝らした。ああ、今年もやっぱり駄目だったわ、と公募展が迫ることに聞かされつづけた彼女の、あの悲痛なくり言をもう聞かなくてすむのであった。同居生活という気楽さがすっかり気に入ったらしく、一緒に暮らし始めてまもなく取りかかったのがこの絵なのだ。

障子の向こう側からは、あいかわらず節子が立ってくる気配もなく、しかたなく立ち上がろうとしたときだ。よく耳をすまさねば聞き取れないほどの、底深く押し殺した唸り声とも唸り上げる声ともつかぬ音を耳にした。背筋を突き抜ける冷たい力に弾かれていきなり部屋に走りこんでみると、縁側のガラス戸に額が着くほどの位置で節子が座っていた。正座の挨拶姿のポーズで頭と首筋をぐいと上方に伸ばし、低く唸りながら開かれたカーテンの隙間から夜空を凝然と見上げている。その夜は空気が澄んでいたのか、珍しく月の明るい夜であった。帰宅した自分への悪戯めいた座興にしてはちよつと手がこみすぎているな、と思っていたのだが、不意にガラス質の透明な壁に囲まれてしまっ

ていた。街頭に吹き荒れた五月の嵐は去り、路上の反抗者たちの群れもしだいに見えなくなっていた。都会のペーブルメントには、デモ隊の投石用に使われて半欠けになった石畳や、催涙弾の濃いガスを浴びつづけたであろう石畳などが、まだ剥がされないまま斑状に残っていた……。

トイレ入り口の板壁に立て掛けられたままになっているその油彩画の構図には、人目を惹く不思議な力が作用していた。不吉なほど黒く太く縁取られた一匹の狼が、エチレンガスの炎に似た光を湛えている藍青の夜空の、鮮やかすぎる黄色の満月に向かって喉首を不自然なほど反らせ、鋭く伸び上がり遠吠えをしている。ちよつと見にはごくありふれた絵本などにもありそうな、いたって単純な構図なのであったが、なにかしら色彩のマッスに潜められた狂気の気配が漂っていた。

ある夜、ドアを開けた拍子に、油彩から発散する真新しい揮発性の匂いがした。その日は労働組合の総会などがあり、かなり遅い帰宅になったので節子はもう寝ているのだろうと思っていた。それなのに障子ごしの部屋の明かりは煌々としたままなので、あるいは起きて本でも読んでいるのかもしれないと思ったりしたが、それにしても読んでいるのせいもあって、戸締まりもそこそこ上がりかまこにしばらく腰をおろして目を閉じていた。いかなるこだわりがあっ

ている彼女の姿態に、影のようなとらえどころのなさをひしと感じた。胸底から湧き上がってくる不安の煙の塊を追い払う手つきで、彼女の肩に触れて軽く揺さぶってみたが、凝固した節子の身体は微動もなかった。ほとんど瞬きのない険の陰に、何かにとり憑かれて見ひらかれた白目のめだつ堅い眼球が、けものめいてせりだし気味になっている。いっしんに見上げている彼女の視線の先には、やや歪んだ青白い満月がエチレンガスの炎に似た光輪に包まれて、地上の闇にうずくまる暗い物象の群れにうすい光の小雨を降らせていた。

矢野の姿にまったく気づかないで、低く唸りつづけている節子の、不吉な病を予感させる喪神状態はかなり深そうであった。

「どうした、節子」と、彼は上ずり気味に言った。

唸り声かふたたび高まりそうになったとき、思いきって力をこめ、節子の頬を数回立てつづけに平手で激しく打っていた。ようやく正気に戻った彼女は、乾いた焦点の定まらない目で、しばらく彼のほうを見上げていたが、突然、畳に身体を投げ出し大声をあげて泣きだした。今年もやっぱり駄目だった、出来なかった、と彼女は涙声の濁音で切れぎれに言うのであった。駄目なもんか、あんなに見事に出来上がっているじゃないか、となるべく下手な慰め言葉になるのを避け、さりげなく言ったつもりなのだが、それ

がたちまち過敏になつて自意識を刺激したらしく、彼女の背中をさするようにしていた矢野の手を邪慳に払い落とし、あなたなんかにあたしの苦しみがわかつてたまるもんですか、あれでは駄目なんです！ もうあたしには何もありません、みんなおしまい。ああ光が見えない、とかん高く叫んでまた泣きつづけた。

手のつけようもなくなつた彼は、泣くままにしておけばそのうちに気が落ち着くだろうと思ひ、ジーパン姿で畳に伏している節子から離れ、部屋の片隅で遅い晩飯をつくつて食べていた。すると、疲れたのであろうか静かになつた節子のほうから、軽い寝息が聞こえた。困惑の果てにこみあげる物悲しさともユーモラスな気分が頬の筋肉を緩め、彼女の寝姿を見つめながら思わず彼は箸を止め苦く笑つた。

ジーパンをパジャマに着替えるつもりで、昏睡に近い眠りでぐたりとなつた節子の身体を抱き隣室に運んだ。指がジッパーに触れたとたん、弾かれたように半身を起こした彼女の右手がしなつた。したたかに矢野の頬を打ちすえ胸板を突き飛ばした。先ほどの満月を凝視していたあの目が、眼前に光っていた。そのつもりはなかつたのに、敵意にみちた彼女の抗いがかえつて矢野の心を依怙地にさせていた。理不尽な衝動を抑えきれぬままにこんどは本気で節子の身体を求めだしていた。頑なに拒む女の閉ざされた愛の溝を、

が開いて、節子が不自然なほど緊張した姿勢で卒然とそこに立っていた。彼女は血の気のすべてを抜き取られた蒼白の顔面に、感情の昂進が急迫している徴候でもあるあの見ひらかれて迫り出した目で、彼を見下ろした。

「いま何をしたの。何を殺したのよ、あなたは！」と彼女はおそろしく早口で叫ぶように言い、矢野の手も指さした。

その潰された不運なカマキリの死骸は小ぶりの雌だったらしく、ちょうど箸箱の真下に隠されたかたちになつた。彼女の視野には入っていないはずなのに、と彼は一瞬不審に思ひながら沈黙した。

「なぜ黙つてしまうの。ごまかしたつて駄目なのよ、いまさら。あたしにはみんなもうわかつてることなんですから、あなたのやり方が。……たつた今、打ち殺されたばかりのちっちゃないきものの靈魂が、眠つてるあたしの目の中に飛び込んできたわ。そして泣き叫んで、呻き苦しんで、救つてくれて。……狂つた蛍火みたいにぐるぐる目の中で回転して、痛い、痛いつて、あなたの惨たらしい仕打ちを訴えてたわ。……さあ早く出さないよ、隠さないで！」

むろん隠すつもりなどなかったし、今の彼女に下手な釈明はかえつて激高に拍車をかけるだけのうな気がして、彼は無言でのろのろと箸箱を持ち上げた。黄緑色の内臓をはみ出させたその雌のカマキリは、鎌状に折り曲げた前肢

むりにでもこじ開けようとしてジッパーを引き下ろした。あなたつて人でなしよ、エゴイストよ。愛してもいなくて！ どうせ、せつちゃんの哀れな身代わりなんですから、あたしなんて、と嗚咽まじりに叫ぶ彼女の抗いはほとんど狂乱に近く、その日を境に節子はぶ厚い鎧の内側に入り込んでしまった。居間で寝ることを余儀なくされた彼は、眠れぬままに冷えたガラス戸に額を押しつけて、やや移動した中天の満月を節子と同じ眼差しでしばらく見上げ、立ち尽くしていた。

やはり遅く帰宅した夜、冷蔵庫の残り物を温めなおし居間の片隅で簡単な晩食をとつていた。節子が台所に立たなくなつてからはいつもそうしていたのだ。隣室でもう寝ているようなので、神経質な彼女の耳障りにならないように気をつかいながら箸を使っていると、首筋になにやら動くものが触れた。反射的に払い落としたそのものは一匹のカマキリであつた。家のそばに草地があつたので、ときどき昆虫が窓の隙間から入ってきたのだ。そいつは、ひよいと巧みに着地すると前肢を鎌状に折り曲げ、小さな三角形の頭部にアンバランスなほど大きめの、灰色の眼球で矢野を睨み上げた。その目つきがへんに彼を苛立たしくさせ、いきなり手にした箸箱で物音の立たないように押し潰してしまつた。

音の響きはさしてなかつたはずなのに不意に隣室の障子を持ち上げ、横倒しになつた姿勢で完全にべちゃんこになつていた。虫の骸を前かがみで黙視しはじめた節子は、突然ひいっとアルミ板を釘先で引つ掻いたような声をあげ、両腕を胸もとで組み合わせて身をすくめると、満月を凝視していたあの形相に戻つて矢野の方を見すえた。

「よく平気でやれるわね、こんなむごいこと。カマキリは仏さまのお使いなんだつてこと、あなた知らないの。あたし、小さいころから母にいつも言い聞かされてきたわ。それを打ち殺すなんて、なんて残酷な男なの、あなたつて！」

満タンになつていたダムの水路がいちどきに開いたように、またもや彼女は矢野の無知、非道をあらゆる語彙を総動員して責め立てたが、その勢いはことのほかエネルギーに満ちたものであつた。生き生きと闘つていた頃の節子の輝きが、なんだかその瞬間だけ舞い戻ってきたようにも思えたのだ。北陸の夏空に突然訪れる激しい通り雨をやり過ぎす一刻のように、彼女から噴出してくるものに耐えながら、矢野はなにやら愉楽にも似た微かな爽やかさをささえていた。ひとしきり言葉の鞭でたたかいた彼を打ちすえたと、いくらか気が鎮まつたらしい彼女は、隣室で眠りに就いたようであつた。食事の片付けとカマキリの骸の後始末をしていると、ふだんよりも大きめの寝息が聞こえてきだした。

節子はあの満月の夜のことがあった以来、ずっとジーパ
ンスタイルのままで寝起きして着替えることがなくな
っていた。その衣服から発散する臭いが日増しに強くなっ
ていて、ときには異臭を覚えることもあり、いくどか注意
したので頑なに拒むばかりであった。

室内には衣服からのものであろう濃い臭気が澱んでいた。
布団からはみ出ている手の位置をなおそうと彼女の手首を
掴んだが、死体のようにぐたりとしていてかなり深く寝入
っていた。彼は今のうちに取り替えようと思いつき、ゆっ
くりと時間をかけ着衣を取り替え始めた。もう少しでその
ジーパンが脱げようとしたときだった。気づいた彼女が鋭
い怯え声をあげて跳ね起き、彼を突き飛ばすとジーパンが
脱げ落ちたのもかまわずに、立ち上がると毛布を腰に巻き
つけたまま部屋を飛び出て玄関口まで走り出た。ドアの錠
をいじっている彼女を、追いつがって必死の思いで抱きと
めた。深夜の街路を、そんな風体で喚声をあげ髪振り乱し
て駆けまわる節子、その後を大声で追うという光景だけは、
なんとか辛うじて免れることができた。その夜から彼女は
部屋で寝ることさえ拒みはじめ、押し入れて眠ると言いだ
して譲らなかつた。根負けした彼は、押し入れの中に節子
の薄暗い居場所を大急ぎでこしらえねばならなくなつた。
押し入れに閉じこもつた節子は、へんな抑揚をつけてじく
じくと啜り泣いた。障子ごしのその低い声音が居間に戻つ

若い女店員がテーブルに近づいて来たので、彼はそうたず
ねた。

「あんなに大きくなかつたと思いますけど……」と彼女は
カレンダーをちらつと見上げて言う。「わたしらの子供の
頃に、この店の二、三軒向こうに建つてたの覚えてますよ。
でも年寄り夫婦が亡くなつてしまつてね、廃業したんやと
聞いてます」

その旅館は素泊まりだったので、夕食を外で済ませよう
と矢野が節子を誘つて宿を出たとき、こちらの懐くあいを
察したらしいその旅館の老夫婦が後を追つて来た。対岸の
町筋にあるという安価な川魚料理店の方向を指さしながら
教えてくれたのだ。そのことがつい先日のことのように思
い出された。が、なぜか川魚料理店の名称と所在のほうだ
けはひどく曖昧なのであつた。テーブルから立ち去ろうと
している女店員を引き留めて、ぼやけている記憶をたどり
ながらいくらかしつこくたずねた。彼女は途方にくれたよ
うに、さあ、とくり返すばかりであつた。やがて店の他の
者に聞いてみると戻つたとき顔を見せなかつた。

遅い昼食を川魚料理店で食べてみるのも悪くはないな、
歩きながらそんな気分が彼のなかで徐々に膨らみだした。
そしてそのように意識しだすといつそその欲求がつのり
だしていった。対岸の入り組んだ裏通りの、川魚料理店ら
しい面影を持つ店を片っ端から探したが、節子と食事をと

た彼の耳に、いつまでもまつわりついて離れなかつた。

矢野の居ない日中は部屋に出ているようで、食事の用意
をして置くとなくなつていたのが、そのままになつてい
る日が多くなつた頃から、不安は急速に深まりだした。彼女
のほうが先に滅ぶのか、自分が先に滅ぶのかを競り合つて
いるような、こんな生活をなんとかしなければならぬ、
そうした思いの切実さが彫刻刀の刃先となつて無力感に萎
えた胸もとを突いた。せっぱつまったあげく、彼が以前に
節子から聞いていた両親に連絡し事情を話すと、久しく音
信のなかつた父親の、恨みがましい練り言と母親の涙声
電話の彼方から長々と響いた。精神医の受診を終えた節子
と両親を東京駅に見送つた日、目を伏せて何ひとつ言葉を
発しなくなつた彼女の削げ落ちた背中の中の残像が、帰途の路
上で立ち疎む彼の網膜からなかなか消えていかなかつた。
たつた一度だけ彼女の実家に電話をしたのだが、矢野であ
ることがわかつたとともに通話を切られた。父親であろう
その男の声にも憎しみのパルスが、受話器を握る手に
伝つてきた。

*

「たしかこの近辺に、古い木造の旅館がありましたよね、
あのカレンダーの写真のような」

ちよんどのとき注文した和菓子と抹茶を盆に載せて、

もにしたあの店はいつこうに視野に入つてこなかつた。道
行く者にたずねてみても、在るには在つたが今はもうない
のではないかと、浅野川方面に在るのではないかといつ
たふうの、いたつて曖昧模糊とした内容のものであつた。
歩きまわつた末に、徒労感を深めるばかりなのに気づいて、
結局どこにもありそうな料理店に入つてしまった。

夕刻に画廊『S』の前で待ち合わせることにしていた森
田の姿はまだ見えていない。しばらくすると、手にしてい
た文庫本をポケットにねじこみながら、のそつとビルの物
陰から姿を現した。片手を挙げて振り、こちらに向かつて
ゆつくりと歩いてくる。

画廊のすぐ近くに彼の行きつけの喫茶店があるというの
で、そこに入った。夕暮れの斜光が差しこむ窓ぎわの席か
らは、画廊『S』のひよる長い老朽ビルが見えていた。久
しぶりに会つた彼は、いくらか白髪がめだち顔面の皺も深
くなつたが、表情には北風が抜けていつた後のような穏や
かさが、内面から惨み出る微光のようにも感じられた。銀
行員の森田は、帰郷のたびに数を減らしていく矢野の幼友
達の一人で、今では会うのもほとんど彼に限られてしまつ
ている。こんどの帰郷もさして意識はしていなかったけれ
ど、じつは彼に会うためだつたのではないかとさえ思えて
くる。ひよつとしたらこのままこの土地に踏みとどまつて
いけるのかもしれない、ひっそりと木など削りながら……。

ふとそんな淡いしかし切実でなくもない、望みのようなものが湧いてきたりする。

「三島澄子展以来になるなあ、あれからどうしとるんや。

……あの彼女の絵、もういつペン見てみたいと思うことがある。でもまあむりやろうな」矢野は、窓の向こう側に視線を投げながら言った。

「ああ、三島さんの絵か……じつはな、彼女、先年亡くなられてね。なにせ急な病やったもんやさかい、しばらく誰も気づかなかったそうや」

「……」

「部屋のドア近くで倒れとったらしい。マンションですつとひとり暮らしやったさかいね。近くに住んどる両親が尋ねて来たときや、もう冷とうなつとつちゅうわけや」

「妙なこと聞くようだけど、……三島澄子ってのは本名なのかねえ」と矢野は、少し前からむずむずと喉もとに絡まりはじめていた疑念を思いきって言った。

「さあ、わしらは読書会で知りあつとる関係だけで、プライベートなことはようわからんのやけど……ま、ふだんはどことなく独身という雰囲気、寡黙な女性やったけどねえ。ただビールを飲み出すと底なしでね、なんだか小難しいことを元気に喋りまくっていたな。東京の美大生だった頃、過激派学生の仲間だったことや、そのとき知り合った男と一緒に暮らしていたというようないつもワンパターン

の話を、冗談まじりに彼女からいくどか聞いた覚えがあるな……でもねえ、あの彼女のメランコリックな画風からは、ちよつとにわかには信じがたいがね」

「葬儀には、むろん参列したわけやろ？」矢野は、最後の駄目押しでもするような口調で言った。

「それがね、親族だけの密葬なんや。で、読書会のメンバーはだれも行つとらんわけや」森田は、喉が渴いたのかコップの水をいっきに飲み干し、「矢野。どうしたんや、いったい。えらくこだわるねえ？」と問い返した。

「いや、なんとなくね……」いくらからうたえて言葉を濁し、矢野はぎこちなく席を立った。

「おかしな男やなあ、まったく。相変わらずやね」

森田も苦笑しながら席を立ち、二人は出口に向かった。ひそかに脳裏に描いていた幻の画像が、額縁ごと頭の中からすつぽり抜け落ちてしまったような気分を抱いて、矢野は香林坊の裏道を歩いた。片町の裏通りにオープンしたばかりのオーレリアという洋風居酒屋があるので、そこでとにかく一服しようやと言いついで、森田はさつさと先へ歩きだした。が、矢野はなんとなく気乗りがしなかった。遅く食べた昼食のせいだけではなかった。胸につかえている物思いを、もつと直接的に吐き出せる内密な場所が欲しいと思っていた。

「どうかしたんか？ なんやらさつきから気分悪そうな顔

しとるねえ」と彼はのろい足取りでついてくる矢野を振り返って言う。

「いや、そんなわけじゃないんや」

「ほんなら安心や。今から直行するぞ、オーレリアに」

大通りから脇に下がる緩い坂道を抜けて裏通りになると、用水路沿いに息を潜めている家並みの連なりがあり、平行しながら人通りの少ない小路が片町方向に続いていた。赤い風船を水面に踊らせながら勢いよく流れていた水路の、あの光る刃先に似た波形は日没ととともに闇のなかへ消え失せ、幽かに爪弾かれる弦のような流水の音だけが聴こえている。

森田と別れた後、矢野は疲れも出ていたのか真夜中近くに泥酔状態でホテルに戻った。付設の喫茶室の飾り窓を押し開いて、顔見知りのフロント係の女が困ったような硬い愛想笑いを浮かべて顔をのぞかせた。その表情が、不意に身勝手な酔っ払い心理を刺激した。彼はわざとのようにエレベータを利用しないで、はあはあと荒い息をつきながら階段を靴底で踏み鳴らして上った。フロントの女にも自分

にも、むしろに意地の悪い感情がむらむらと湧いてきた。落ち着きはらった屋内の静寂にさえ憎しみのようなものを覚え、彼は何かわけのわからぬ言葉を喚び出した。虚ろな深い穴底に、かけがえのないものを不本意にも棄て去ってしまった後の、ひりつく空白感から逃れようとあがいていた。

が、もうそこへは手のとどきようがない。階段を転げ落ちていき、首の骨を折って身悶えている自分の姿を脳裏に弄び描いて、彼はホテルの階段をよろめきながら上っていった……。

目覚めぎわのしぶい臉を細めて、レース織りの白いカーテンごしに洩れ落ちる鈍い光の方角を見上げると、どうやら秋雨でも来そうな気配であった。ベッドから下りてカーテンを開けてみると、やはり秋雨が降りだしている。ホテルの窓ガラスが室内の暖気で薄く曇っていた。長町方向に広がる古い家並みと混在する商店街の、モダンな装いの小規模ビル群を、立ちこめだした薄墨色の霧が覆っている。窓ぎわの小テーブルの白いクロスの上に、路上で拾ったキーホルダーの鈴がしんと光っていた。チェックアウトの時刻だったので、矢野は大急ぎで身支度をすませると、金の鈴をたしかめるようにぎゅっと握り締め、上着の内ポケットの底深くに押しこんだ。



全国同人雑誌最優秀賞まほろば賞

●全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」

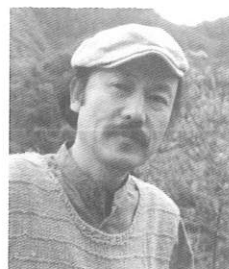
文芸同人雑誌の振興と創作活動の奨励を図るため、全国同人雑誌振興会および文芸思潮では、全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」を創設しました。これにより、同人雑誌で活躍される方々の創作エネルギーを鼓舞し、優れた同人雑誌の作品を、文芸を愛する人々に広く読まれる運動を展開していきたいと存じます。

●全国同人雑誌最優秀賞の選考過程

- ① 全国同人雑誌振興会選考委員会および文芸思潮編集部により、同人雑誌に掲載された作品のなかから（3年以内とする）優秀作を選び、文芸思潮に掲載する。これに同人雑誌賞優秀賞を贈り、同時に最優秀賞選考の候補作品とする。優秀賞は6篇前後とする。優秀賞には賞金1万円と賞状・記念品を贈る。
 - ② 毎年**公開選考会**を行ない、候補作品について十分な討議を重ねたのち、投票により、最優秀賞を決定する。全国および海外からの送付による投票も点数に加える。
 - ③ 選考委員は候補作全作品を読んだ者とする。
 - ④ 選考委員は特別選考委員と一般選考委員（選考会参加）、および文書選考委員（選考会不参加／文書のみ）によって構成される。一般選考委員、および文書選考委員は希望志願とする。
 - ⑤ 各委員投票持点は特別選考委員50点、一般選考委員10点、文書選考委員は3点とする。一般選考委員、および文書選考委員の人数枠は当面設けない。
 - ⑥ 文書選考委員の投票は公開選考会一週間前までに行い、選考会当日までに開票集計して発表する。
 - ⑦ 最優秀賞は一人が原則だが、二人もありうる。
 - ⑧ 最優秀賞には10万円の賞金と、賞状、記念品を贈る。（賞金は、できるだけ有志の寄付を募り、その寄付金によって、将来賞金額を上げていくことが望まれる）
 - ⑨ 最優秀賞選考過程・結果は「文芸思潮」に発表する。
 - ⑩ 優秀賞を4回受けた作者には「まほろば作家賞」が授与される。※
- この全国同人雑誌賞は、多くの方に参加していただき、その賛同と御協力によって運営されていく新しい賞です。ぜひ同人雑誌からの文芸復興をめざして奮って御参加いただきたいと切にお願いするしだいです。

2007年5月25日（2009年5月1日※⑩を加えて改訂）

全国同人雑誌振興会
文芸思潮

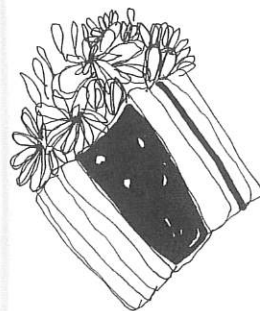


遠矢徹彦

とおや てつひこ

金沢市出身、高校在学中に地元の同人誌「北陸文学」入会を試みたが、主宰者の私の提出作品についての感想は『文章甚だ未熟につき今少し学業に傾注されたし』というものだった。過敏な自意識を傷つけられた文学少年は、いささかやけくそ気味も手伝って、学業を放擲し当時燃え盛っていた内灘闘争に参加、以来左翼運動に傾注、ついにパルタイから左翼小児病との烙印

を押されるに至った。そしてこの病はついでに結核という肉体の業病をも併発させた。この二つの病はともに私の内部の深層に今も潜伏しつづけている危険な宿痾なのだ。金沢を追われるように去り、南九州のサナトリウムにて長期療養中、患者運動体の一員として60年安保闘争を体験。上京後も、再度の長期療養を経て60年代後期の反戦派諸運動に合流、若き活動家群像との交流を深める。1974年、文芸誌「アングレス」創刊、アナキスト詩人秋山清追悼号をもって休刊。1978年、文学伝習所の設立趣意書に共鳴し参加、機関誌にて創作活動を始める。1998年、「ボルバの行方」で新日本文学賞。2001年、短編小説集「波うちよせる家」（新日本文学会刊）で泉鏡花記念金沢市民文学賞。2004年短編小説集「ぺちゃんこにプレスされた男の肖像」（審美社）を出す。現在、「風の森」「北陸文学」等の多くの同人誌の仲間とともに、永久革命者ならぬ永久文学青年の初発の志を持続しつつ、なお生きかつ闘い、書き継いでいる。



☆「文芸思潮」は左記の書店で
店頭販売されております。

〔東京〕
ジュンク堂池袋本店
紀伊國屋書店新宿本店
書泉グランデ神保町本店
東京堂書店神保町本店
〔富山〕
紀伊國屋書店富山店
中田図書販売

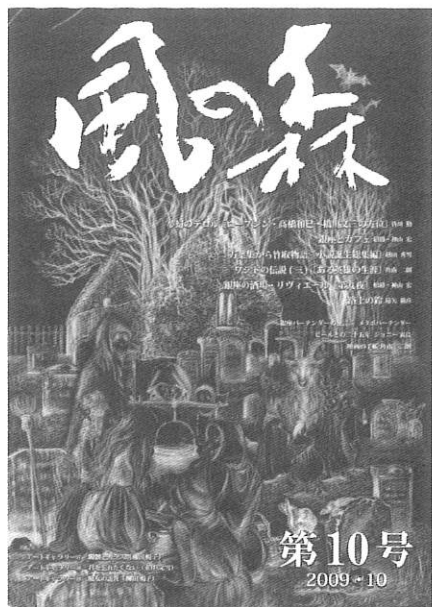
風の森

東京都

酔妄の梁山泊

新宿や銀座などの繁華街では、風の森という言葉は爽やかで上品なイメージを喚起させ、文化的な趣きを感じられます。温泉や喫茶店また日本酒や文化サロンなども親和性があるようです。しかし、北海道のブナやトドマツの原生林に風が舞うと、深い森林のざわめきが不気味な暗い予兆を感じさせるところがあります。

新宿ゴールデン街は世代交代の時期になっていて、若い人の飲み屋の新しい看板が目につき、団塊の世代はすこしずつ肩身が狭くなっています。学生運動の華やかな頃、薄汚れたカウンターで激しい議論の火花が散り、泣きながら立ち去る連中もいました。いまでは隣の席のお客と理屈を捏ね合うという雰囲気は希薄になっていますが、住職や映画監督あるいは絵描きや編集者などの出入りする酒場はやはりセピア色の香りが漂い、懐かしい時代の幻想に浸れます。



第10号
2009・10

表現には妙にこだわっています。小説と批評との識別から離れ、思うがままに書くという行為に惚れているのです。人間の心理や宇宙の神秘など、面白い事象は無限にあり、それを表現する試みはお酒を楽しむことにも通じているようです。

文学と社会あるいは文学と人間などは迷妄の視点であって、頭の中のイメージをどのように文章化するかが問題なのです。自分に似合った文章を創り上げ、つまり言葉の職人に徹することによってはじめて個性が生まれてくるのではないのでしょうか。昔の作家はひたすら原稿用紙に向かい、言葉の宇宙をさまよっていたのです。文学の社会的意義などは後付けの屁理屈にすぎません。マスコミは文学や絵画をひとつの文化事象として捉えています。そこに安住するのは敗北です。

文芸誌・風の森は精神の梁山泊であり、他者の視線に惑わされず、みずからの夢を追い、それが唯一の現実になっています。その手応えが未知のエネルギーを誘発し、道なき道を切り開き、そこには文体というものが生きています。文章による表現はすべて文体に収斂し、精神と肉体の意匠なのです。皆川勤は気配りの味わいに満ち、遠矢徹彦は不可思議な迷宮をさまよっています。

常連の皆川勤は豊かな教養と知識を自在に操り、地味ながらも示唆に富む評論で多くの読者に支えられています。

両手を広げれば両側の軒に触れそうな狭い路地——十年ほど前に酒場・風の森が開店し、団塊の世代の常連が多く、文芸誌「風の森」はその名前を拝借しました。ウイスキーやリキュールが乱雑に並んでいます。酔えば奇声を上げる禿頭や、ポケットから小さな緑ガメを取り出す老人は出入り禁止になりました。カウンターで語り合う常連は穏やかな人格者で、文学の毒とは無縁です。風の森の同人は別の場所に徘徊しています。

主な書き手は六〇歳代で、美しくはない過去を引きずっていて、光と闇の対比に惹きつけられたのはずっと昔の物語です。思想に疲れ、感覚も鈍っていますが、言葉による説得性の高い論評は風格を滲ませ、図書新聞などで活躍していますが、突然、雄大な構想の思想小説を発表しても不思議ではありません。そういう気配は確かに感じられます。遠矢徹彦は団塊の世代よりも先輩であり、安保闘争や全共闘の荒波を掻い潜っていて、その経験を独自の幻視の世界に昇華しています。泉鏡花記念金沢市民文学賞の受賞者です。精神の闇を精妙に描き、現実そのものは妖しい幻視の中に織り込まれ、闇の美しいメタモルフォーゼは存在するものに内在する原罪をも照射しているかのようです。商業誌や若い世代のはるか頭上を飛翔しているのです。

(編集長・東谷貞夫)



柳田暢子

風の森編集室

〒169・0051

東京都新宿区西早稲田三・一・三

☎03・6457・6430

消罪の寺

齋藤澄子

四国八十八ヶ所一番札所靈山寺

御詠歌

靈山の釈迦の御前にめぐり来て

よろずの罪も消え失せにけり

赤黒い月が出ていた。大代谷川は、女のため息のようなせせらぎを、握りつぶした罐や廃棄されたビニールに任せている。藤島翔一郎は、夜の散歩の途中だった。

田舎でも町でもないこのあたりに、街灯はある程度ついていて、翔一郎の影法師は一つではなかった。前へ伸びていく薄い影法師を見つめていると、後ろから寄り添ってくる影があった。一番の驚きは後部からの自動車が走り去るときで、翔一郎の影は、突然のように足元から前に伸

び、急速に後ろへ消えていく。絶えず、街灯と車の数だけの影法師を同伴して翔一郎はゆらゆらと歩いていた。あるとき突然、生身の翔一郎はそのいずれかの影法師と入れ替わり、ひたひたひたとどこかへ消えてしまうかもしれないかった。

歩くほどに細い川の向こうは一面のすすき原となった。休耕田を放置したために八重むぐらとなりはたなのであるうか。街灯の光の届く範囲でゆらぐすすきの群生は夜空をなでてさえずっている。そのありさまは壮観、煽情的ですらあった。

すすき野の途絶えるあたりの街灯の下に戦前の趣、雨露もしのげようかと心配される茅葺きの傾いた家が一軒。そしてまたその家の前から翔一郎の歩いている撫養街道に向

けて、申し訳程度の短い木の橋がかかっている。街道沿いには豪邸とはいえないまでも新築の家が立ち並んでいるというのに、その家は、一斉に起こるすすきの種の旅立ちに、見えにくくなり、そのまま消えていくのではないかとさえ思われた。

あと一年で定年を迎える藤島翔一郎は、事件の処理にあたる時、証拠の底でうごめく犯罪心理をたどるのが好きであった。

好き嫌いでどうこうする手のものではないけれど、翔一郎は微罪の底に滞留するものがありかを尋ねたり、人間関係のしがらみの糸を必要以上に解きほぐしたりしたがった。それはときに、同僚から、勘に頼るものとして排除され、捜査を混乱するものとして忌避されたが、そのやり方は単に彼の体質のようなもので、それが彼にとって好ましいというだけのことであった。

黙秘する被疑者からたちのぼる言葉の気配や複雑にからみあう人間関係がひそかに物語るものを、彼としては無視するわけにはいかなかったからである。

昇進試験の機会を逸し刑事ひとすじで過ごしたことを、翔一郎は後悔していない。苦勞をかけた妻を去年失い、一人息子は念願の司法試験に合格し、裁判官になった。寂しくはあるが、身辺整理はついている。あとは定年までの一年をどう生きるかのみであった。

その一年を見るように、翔一郎はすすき野のあばら家を見た。

と、その時、女が悲鳴をあげながら駆けだしてきたのである。男の怒号がそれを追った。

「なんとしたことしたんや」

「なにもしてない、わたし」

「ほんなら、なんで、息子があんなことになつとるのに、走り出るんや」

もみあっているうちに、女はすすき野にあとずさった。

「あんたやって、出て来てるやないの。わたし怖いもん」

「怖い、お前。義理でも息子やぞ。何したんや、お前は」

「なにもしてない、わたし」

「なにもしてない言うたかて、浩は死んでるんやぞ」

「なにもしてない、わたし」

「警察呼ば」

「やめて！ それだけはやめて！」

「なら、やったんか」

「やってない！」

女の声は哀切で、すすき尾花をふるわせた。夜目のせいかわ女はことさらに色白で、いい女のように思われる。

男の野暮ったさは歴然としていて、ステテコに腹巻姿のようであった。男は後ろ向きで顔が見えない。

もみあっているうちに男が女を組み敷き、ああーという

女の細い声がして、赤黒い三日月が雲にかくれた。

翔一郎は、この夜、女にわしづかみにされた。この恋の行方はさだかではなく、成就への思いも浅かったが、定年を一年後にひかえた翔一郎の胸の底に、赤黒い三日月の夜のすすきを一本、植えつけたのは確かなことのようなのである。

刑事藤島翔一郎がすすき野で見かけた女は、田沼源五十二歳の内縁の妻、西原風二十七日歳であった。警察関係者の最初の驚きは夫婦の年齢差だったが、もつと驚かされたのは風の美貌であった。色白で伏せたまつ毛が嘘のように長く、粗末なベージュの服の膝に重ねた細い手が震えている。

源はこれという手職もなく臨時の土木作業員で終始していた。人がよく愛想もよかったが大酒飲みで、夜道に大の字張って寝ていて車にひき殺されかけたこともある。

源のような男と、風のような女の取り合わせが、どのようになりゆきで生まれたのかについて、署の人間は不思議がったり羨ましがったりした。

夫婦のことはともかくとして、事件が事故かさだかではないが、二十歳になる源の息子浩が、風呂の湯船に頭から突っ込んで溺死していたというのは、だれが考えても奇妙なことである。

そして浩は、源の実子でさえない。子なしの源の先妻が、

若気のあたりで子を生んだ十五歳の女からもらい受けてきた子供である、というところまではわかっている。先妻は

夫の源にすら浩の出生のすべてを明かさず、生まれ落ちた日に引き取って実子として届けたのだということだった。

文字通り、藁の上から育てた浩が小学二年生になったとき、先妻は「将来に希望が持てない」と言い置いて、源のもとを一人で去った。

一番の原因は浩の学業不振である。顔色のさえないもやしっ子の浩は、知能も低かった。いつまでたっても日雇いの域を出ない源に愛想を尽かしたのもあろう。それにしても非情な女である。

源の家の風呂は外風呂であった。あばら家よりも傾いて、湯船から出たときは寒さが身にしみた。いまどき珍しい薪を燃やす方式の風呂で、浩が入浴してまもなく、風が薪を繕いに一度家から出ている。

父の源は茶の間兼居間兼寢室のテレビを横になって見ていたし、浩に湯加減を聞いたあとの内縁の妻西原風は、いちいち土間に下り立たなければならぬ台所で、明日の朝食のためのきんびらごぼうを作っていたのだという。

からすの行水のはずの浩が夕食後、七時前に風呂に入ってしまった、いつまでたっても出てこないの、風が見にいって不慮の死が確認された。

どういふことでそうなったのかはわからないが、頭から

湯船に突っ込んで溺死したというのは、できすぎている。

「二十歳の息子と言うても、そんなに生きのええ息子ではありません。へえ、まあ言うたらモヤシみたいな子オでして……」と五十二歳の源は薄くなった頭をかいた。もみ手する源の顔はわずかに笑っていて気味悪かった。

モヤシみたいな子……近所の人や中学校の同級生によれば、源の言葉に嘘はなく、浩は身長が百六十センチ、やせていて顔色も悪く、歩き方もひよろひよろして元気がなかった、とのことであった。

二十七歳だという風は伏し目したまま取調室の椅子に座っていた。顔をあげて相手の目を見て答えるようにという藤島翔一郎の要請に、風はおどおどと目をあげた。

翔一郎の脳裏にすすきが一本。このように穏やかな取調室を、かつて経験したことがあったろうか。

藤島は沈黙していた。絵を見るように風を見ていた。風はしばらくもじもじしていたが、その静けさに絶えきれずにしやべり始めた。

「旦那さん。どうしてわたしが源さんの大事な浩ちゃんを殺せましょうか」

風の声に、翔一郎の心が揺らいだ。それは声になる前の声のように小さかった。

これは鳴門の潮騒だ。天に舞うかと見せて人の心に落ち

かかる……抜けるように色白のその女は、きりりと青ざめ、心持ち斜視の大きな目で、翔一郎を見た。

「家の中のことでですから、家族以外のアリバイ証言で言われても、困ります。……困ります。……困ります」

風の声は哀切であった。翔一郎は私情に溺れそうな自分を叱咤して尋ねた。

「源さんと浩君、源さんとあなた、あなたと浩君の間にいさかいはありませんでしたか」

「……ありません。ありましたとも。家族ですから」

「例えば」

「浩ちゃんは物言わずですよ。元気がないもんですよ」

「怒るんですか」

「……源さんは、えろう優しい人なんやけど……お酒の力借りて、言いよるんです。しゃんとせえ、しゃきつとせえ言うて……なんでなんやろうか、浩ちゃんは元気がなくて」

「あんたは、どうです？」

「腹を痛めた子おではないから、と思うておられるんやろうけど、そんなことはありません。いつしよに暮らしているうちに、なにやら温うになって、わたしがいてもいなくても、浩ちゃんは気楽にしました。どうしてわたしが……」と言ったまま風は目にいっぱい涙をためて、翔一郎を凝視した。「浩ちゃんを殺したりしますか」

浩は顔を強打し、うつ伏せのまま浴槽に倒れ込んでいた。流し場が古い板でずるずるしていたため誤って倒れ、コンクリートの湯船の縁で顔を打ったか、だれかに鉄棒様のものでも打ちさえられ湯船に顔から突っ込まれたかのいずれかであった。

翔一郎が散歩の途中で目撃したすき野でのあの一件、風に詰め寄った源の「お前がやったんか」の激怒の声は、翔一郎の耳にこびりついて離れようとしなかったが、しかし、風の穏やかな声音は、家族の軋轢の存在をきれいさっぱり消し去るかのようであった。浩は多分、運動神経の鈍さから、なにかの拍子にもんどりうって浴槽に頭を突っ込んだのであろう。

いやしかし、逆に、運動神経が鈍かったという浩は、誰かの力が加わらなければ、もんどりうって、とは行かなかったかもしれないのだ。

簡単な事件でありながら、確たる証拠がないために、刑事は苦渋の選択を迫られることになる。

西原風は、鳴門市北浜の遊廓「金長」の二代目西原二吉の孫娘であることが判明した。戦前の「金長」の隆盛については、翔一郎も故人となった父親から聞き及んだことがあるし、実際に小学生のころ、その前を通って仰天したこ

ともある。

開け放たれた入り口の右側に朱塗りの長い欄干があり、その上部に造花で縁取られた女たちの大きな写真がずらりと並んでいた。

ほかあと口をはって見ている翔一郎を裸足で駆けだしてきた長襦袢の女がはがいて締めにして「かわいらしい坊やなあ。きれいなとこやろ、大きいになったらここへ上がれるようになる」……女たちの嬌声が頭の上から降ってきた。驚きと喜びが交互に来て翔一郎は舞い上がった。化粧の匂いは翔一郎にとんでもない力を与えていて、その日のけんかは無敵であった。

遊廓「金長」の主人二吉の新妻紀伊は遊廓の女将に似合わず、色白でものをやわらかな風情、人当たりもよく、二吉の後ろでうつむいて座っている、といったふうな女であったと聞き及んでいる。

戦後まもなく二吉が死んだとき、紀伊は生まれたばかりの恵理子を抱えていた。急遽店を畳み、売り食いに転じて暮らしをしいだ。その後、建物を改造のうえ芸妓屋をいとなみたいという人に「金長」を譲り、その金で紀伊はなんとか生計を立てたというわけである。

夫の没後、紀伊には浮いたうわさももなく、順調に成長した娘の恵理子は東京の女子大に進学した。卒業後、恵理子は律儀にも母を気づかって帰郷し、鳴門わかめを製造販売

する事業所の事務員となった。

紀伊に似て口数の少ない恵理子は、邦文タイプも打てたし、経理も達者で、所長も頼りにしていたし、息子の嫁にとも考えていたらしかったのに、恵理子は突然、雲隠れのように姿を消した。悲嘆のあまりに母親の紀伊は死亡した。二年ほどたつて帰ってきたとき、恵理子は子供を連れていた。それが風である。

田舎の風潮で未婚の母を嫌って、だれも恵理子を雇わなかったので、恵理子は風を連れて、またどこへともなく去らねばならなかった。

「刑事さん。ここに西原風という人間がいる。それでいいじゃないですか。話したくないんです。生い立ちのことは。そしてわたしは浩ちゃんを殺してない。殺す理由がない。殺してません」

と風はさめざめと泣いた。

これは完成しないジグソーパズルだ。

だが風は父親なのか。風はどうやって生きてきたのか。今のところ、どうあがいてもジグソーパズルのピースが二つ足りなかった。

このピースが発見できれば、被疑者の心に食い入り切り裂き、すべてを明らかにできる気がする。だが、公的に風の過去を追い続けるのを許されるほどの余裕はなかった。

源の所に居ついて六カ月の風は、まだ鳴門市に住民票を

移していなかった。世間話の揚げ句、翔一郎は風の前の住所が大阪市中央区大阪城近くの古いアパートであったことを知る。だが、詳しい住所を風は明かさそうとしなかった。自分の心の中にすきを一本植えつけたかといいやつ、継子を殺したかもしれない疑わしいやつ、顔をあかず眺めながら、翔一郎は大阪市中央区に捜査照会の公文書を出し、風の住民票を手に入れることを考えていた。

四国八十八ヶ所一番札所靈山寺の境内で起きた、いまだに犯人のあがらない殺人事件を、翔一郎は一年前から抱えていた。口にし出さないが、担当者たちは迷宮入りを感じ、事件そのものを遠目で見るような気分になりかけている。

一年前の九月三十日、その日の靈山寺への参拝客は比較的少なかった。午前十時と午後二時に観光バスが一台ずつ、後は単独の参拝者が幾組かあっただけである。

観光バスで乗り付けた人達は、すぐ脇から寺へ入るのを避けて、わざわざ正面にまわり、山門をうやうやしく仰ぎ見、順打ち「順番に巡って参拝すること」旅立ちの寺、四国八十八ヶ所の一番札所靈山寺にたどり着いた喜びにひたるのであった。

弘法大師が四国の東北から右廻りに八十八使の煩惱の数

にちなんでまず霊場を開いたのが徳島県鳴門市大麻町板東のこの地である。

山門を入つてすぐの右側にひなびた売店があり、この草餅きび餅は格別においしかった。

その日は特別に県内産新米のおにぎり百食の無料接待があり、それをお目当ての近郊の人も集まり、参拝客らと混み合っていた。

おにぎりを配る近隣の女たちががいがいしく立ち働いている。

「お接待」と呼ぶ茶菓おにぎりの接待のありようは常に無料である。女たちの奉仕は参拝する人達への無垢の奉仕であり、この精神は戦前から戦後へ、そして未来へも引き継がれようとしているのだった。

一番札所霊山寺の御詠歌は次のようである。

霊山の釈迦の御前にめぐり来て

よろずの罪も消え失せにけり

本堂へたどり着くまでの大きな池には、錦鯉が群れている。鳩たちのはばたきが樹木の匂いを切り裂くように響く。

バスで霊山寺に訪れた人達は、おおかたが観光客で、ほとんどの人が私服であった。

私服のまま四国八十八ヶ所めぐりをする人もあるが、

むものの、急に人けが少なくなることもあり、何かの拍子で池に落ちたか、落とされたかということになる。

翔一郎が現場に着いたとき、死体はすでにあげられていたが、池にはひそひそ話をしまわる多数のみずすましがいた。小指ほどの鯉の稚魚が勢いよくはねあがっている。

釈迦如来をまつる本堂の手前、石段の脇に山からの落ち水を自然に流し、岩を配した二つ目の小さな池は衆生の悩みを底に沈めて、高い山椿に抱えられ、まだ青い楓の下に灯籠、さるすべりの花にクロアゲハ……不謹慎なことながら、死体が物語るには、うってつけの場所であった。

ただ、溺死は焼死と同様、自殺か他殺かの判定がむずかしいのが常識である。

池のほとりで景色をめながら立っていた二人連れ。その一人がひよいと相手の肩を押して池に突き落とす。運よく相手が溺れて死ねば、これで殺しは成立する。

ましてや場所は四国八十八ヶ所一番札所霊山寺、白装束となれば、自殺と判定される公算大である。

死体は、参拝者のことを配慮してか、南向きの山門を入つてすぐ右の売店の東側、境内からは隠れて見えない駐車場のビニールテントの中に横たわっていた。

痩せて小さな老人である。こけた頬にまばらな不精ひげ。

男はその過去を白装束に包んで黙っていた。

死なねばならぬ理由がこの男にはあったのだろうか。

霊山寺で四国遍路の装束を買い求め、着替える人も多かつた。

沙羅雙樹は夏の日照りに弱っていたし、寄進された新しい仏像が、参道脇にぎらぎら立っているのは、いかにも目障りであり、これ以上増えるのはまっぴら御免だが、山からの落ち水を満たした二つ目の小さな池の傍らの石段を上ると本堂。本尊は弘法大師の持仏釈迦如来であった。

信仰篤い者も観光客も、まず一番の願ひ事をして、本堂の隅に開かれた店でみやげ物を買ったり、遍路の装束を買い込んだ。

小さい店であるため、ちょっと人が立て込んでくると混雑の極みだった。

店に続いた接待所を借りて人々はかましく白装束に着替えた。

同行二人と背中に記した白衣は、弘法大師と二人で歩むという意味で、ひと相応に身が引き締まるものであるが、今はもう、大師と二人だなんて背中がかゆい、という若者すらいる。

手甲をはいた手に念珠、首には輪袈裟と納札入れの木箱、接待の品物や御布施を入れるずだ袋、鈴のついた金剛杖をつき、すげ笠を深くかぶれば、世を忍ぶ姿にさえなれた。

死体は、九月三十日の午後三時十二分に本堂のすぐ手前の池で発見されたのだと言う。……参拝者はひとしきり混

藤島翔一郎は男の人生を読むように死に顔を見つめた。

殺された仏には言いようのないうらみの表情が残ることが多いのに、男にはそれが見られなかった。むしろ、言い知れぬ悲しみをたたえた男の横顔であった。

藤島が連れてきた新米の戸塚要が、テントの支柱の前で背中をまるめて腕組みしたまま深刻な面持ちで翔一郎に問いかけた。

「覚悟の自殺でしょうか」腕組みのわりには、のん気な声の戸塚である。

「そんな思い込みは、今晚のおかずにしる」
……おかしいと翔一郎は思った。

「この靴は仏さんのか」

「そうらしいです」間抜けた声に腹が立ったが、それをしのご勢いで事実が翔一郎を捉えて離さなかった。

靴が濡れている。巡礼の白装束は、明らかに和服のいでたちであるが、今はみな足元はわらじではなくて、スニーカーのたぐいの靴を履く。それが革靴というのも不自然だ。

「あげてから脱がしたのか」

「いえ、揃えて脱いであります」……巡礼に不似合いな黒い革靴は、したたか水を吸って光を失っていた。

男を水に沈め、靴を脱がせて池のほとりに置いた者がいる。この男には、連れがいたはずであった。

検死官を待つ間にもう一度、現場を確認したかった。

「本堂の前の池、でいいのだな」
「いえ、もうひとつ隠れて見えないところに池があつて。そこです、そこ」

なんだと、もうひとつだと、という思いがあつた。寺には三つの池があるわけだ。

翔一郎が見た小さな池の東側、駐車場の北側に道ひとつ隔てて、その池はあつた。外からは池の風情は見通せず、人ひとり通れるほどの木戸に掛け札があつて、《池を見た方はお申し出ください。勝手に入らないようにお願いします》とある。

木戸を押すと簡単に開いたので中に入ろうとしたが、かなり大きな池らしく、池を配した中庭全体を見はるかすことができなかったたので、石段をあがり本堂横の接待所あたりから、池を見下ろすことにした。

檜の大木が枝葉を広げて天を領し、はるか下の池に、葉ずれのざわめきを落としている。自然のような石組みは池に降りる段となり、はるか彼方のように、その池は見えた。

それは、まるで殺人者の煩惱の深さを示すかのように遠かつた。

《池が深くなりました。気をつけてください》との立て札がある。

足元を気にしながら、翔一郎は池のほとりに降り立ち、うずくまつて石組みの間にたまつた土を見た。濡れている。

一の四十人ほどの客に紛れて、スーツから巡礼の白装束に着替えるのを、ツアー客のなんんか認めている。売店も接待室も混み合つていて、それらしい女を見た者はだれもいない。女はいたかもしれないが、団体客ならいざ知らず、ツアー客はいわば寄せ集めで連帯感もなく、お互いを気にしあい、いたわりあい、確認しあうということもないので、着替えの最中にお尻がぶつかりあつたりしても、まあいやあね、狭いこと、と思うくらいが落ちであつた。

そして調査の結果、ツアー客の中には途中で欠落した者はなく、男とその連れは単独で行動していたと推測された。男の住所氏名もまったく不明のままであつた。白装束に着替えた後、身元が判明するすべての衣類、持ち物を、だれかが持ち去つたからである。

女、それもヒール四センチ、サイズ二十二の靴を履いた小柄な女は、男の身元を見事に消し去つた。警察は目撃者捜しに躍起となつたが、それらしい人間を認めた者は誰もいなかったのである。

しかし、水のしたたりが駐車場を抜けたあたりで切れている以上、女を乗せて逃げ去つた車があるはずだと警察関係者は考えた。緊急捜査網は直ちに敷かれたが、それらしい車の発見には至らず、久方ぶりの事件に色めき立った捜査陣の努力は徒勞に終わった。

もちろん地元新聞で何度も犯人割り出しの協力を促し、

したたかのしずくは犯人の足跡を示して駐車場から裏道に通じる路地の手前に至り、そこでぷつりと切れていた。土にぼつんぼつんと小さな穴があいている。

ハイヒールのかかとのように思われた。穴の底は湿つていて、足取りが不揃いに乱れていた。

女か、と翔一郎は思った。

戸塚要に言つたように、思い込みは晩御飯のおかずしなければならぬが、突き落とされたあと、自殺と見せかけるため、女は池に入って男の靴を脱がせた。胸元まで濡れたままで、女はどうやって寺を抜け出したのか。

となりの小さな池をさえる高い山椿、山椿に続く檜や楠の大木。死角の池のほとりを、まだ紅葉せぬ楓の葉を映して、いよいよ青ざめた女が、まつわりつく濡れた衣服に気狂いしたようになりながら、木戸押し開け、人けのない駐車場を駆け抜ける。……言いやうもなく哀切な場面に思えて、翔一郎は胸が詰まつた。

「よろずの罪も消え失せにけり」と詠まれた寺で罪を犯さねばならなかつた女が哀れであつた。

鑑識もハイヒールには気がついていて、濡れた衣服の女を捜せということではあつたが、どう行動したのか、女の名前は否として知れなかつた。

解剖の結果はもちろん溺死。仏の年齢は六十歳後半。死亡推定時刻は午後二時から三時。二時すぎ、男がバスツアー

男の身元についても全国に照会したが、どちらもなしのつぶてであつた。

犯人像を思い描いた一年の間に、女のおもぎしや姿形が翔一郎の胸中を行き来した。殺人現場を何回も何回も思い描くうちに、翔一郎は自らが女となり、霊山寺の池のほとりを悲しみの水したたらせ、心乱して駆け抜ける夢を見るようになった。奇妙な体験の中で翔一郎は獣のように犯人のありかを窺つていた。

日中のこおろぎは、ことさらに哀れな鳴き方をする。日陰のマリーゴールドの繚り言、咲き残りの西洋ほうせんかのため息。

ゆく夏の景気付けのように、種をふりまいていた通称ネコジャラシも、おとなしくうつむいている。

疑わしい点はあるものの浩の死は事故死となり、田沼源も西原風も無罪放免となつた。

畳一畳ほどの狭い外風呂は、湯船がコンクリートのむき出しで、縁が鋭角になつていた。浩の傷は両目を結ぶ一直線、これは浩が風呂の縁に打ちつけた結果であり、それがもとで湯の中に頭から落ちた、という結論になつた。

加害者が危害を加えようとして、何かをどう振り回しても、狭い風呂の中では傷は一直線には付きがたい、という

ことなのである。

ただ故意に、洗剤を風呂のぬめった木の床にしたたかばらまいて水で湿らせ、浩をすべらせることもできる、と藤島は考えなくてもなかつたが、西原風がそんなことをする女に思えなくて、目をつむったということであった。風呂場には、それらしい洗剤の残留も認められなかったことでもある。

その後、何カ月か経って、

「翔さん、知つとるんかい。あの一件のよう、西原風、奴さん、腹ぼてやぜ。大きな腹かかえて歩きよつたん見た」
刑事仲間の広瀬に言われて藤島はぎよつとした。

妊娠していようとしていなかろうと、今はもう無罪放免の風のことなのに、翔一郎は一瞬血が逆流するような衝撃を受けていた。

浩をやっているにしろ、いないにしろ、妊娠を告げることは不利と感じて、口をつぐんでいた風を、このときなぜか翔一郎は、激しく憎んだ。

憶測を広げるのは今となっては手遅れだが、浩の死は、風の妊娠と関係はなかつたろうか。自白への追及の手をゆるめた自分が翔一郎はうとましかつた。

あのものぐさの田沼源が落ちそうな鼻水を横殴りにして風を凌辱する様が、翔一郎の脳裏に浮かんで消えた。

雨が降りだした。枯れ草の下に潜んだこおろぎの声は、雨滴のせいできれときれに聞こえた。

年があげて一月下旬、風は男の子を産んだ。

源の喜びようは格別で、まさに大騒ぎ。近所に配る赤飯まで注文していたのに、生まれて六日目に子供は死んだ。葬式は執り行われず、夫婦は雨戸を一月ほどしめて、ひっそりと暮らした。暗がりの家から出てきた風は、ものけのように八百屋の前で立っていたりしたが、親しく声をかける者もなかつた。長らくうろろろして、白菜を四分の一、などと言う。気さくな女主人がざくざく白菜を切るのを、風はおびえたように見つめていた。

源はやがて酒びたりでいよいよ働かなくなり、道路で寝込んでいることも多くなった。あの有様ではいつかは車にひき殺されるやろうね、と人々はうわさした。

しかし、源は働いていて交通事故に遭って死んだのである。霊山寺の近くの細い町道を夜中に整備する仕事に携わっていて、つるはしを振り上げたときに走ってきた乗用車に無残にひき殺された。源が酒をあおって仕事についていたのかどうかはさだかではないが、ともかく多額の賠償金が風のもとに転がり込んだというのが、もっぱらのうわさだった。

「風さんが放っていったんですがな」

目の不自由な家主の老婆は、呑気な声で言った。

「借り手がつかないでしょう、これじゃ」「借り手がつきやあ、処分しようと思つてりました」……けんどもあ、マンションやオクシヨンの時代ですよつてに、こんなアパートには借り手もつかしまへん。片づける手間も惜しおますよつてに……老婆はもみ手した。

窓を開け放つと、ビルの遮蔽をかるうじて逃れて大阪城が見えた。風は孤独をかこちながら、隆盛と不運の城——大阪城を眺めていたのだろうか。長いまつげを伏せるしくさの風が思い出された。

仏壇の位牌は風が持つて出たのであろう。

藤島翔一郎は窓際の段ボール箱の上に無造作に置かれた写真立てをとりあげた。積もつたほこりを右手でなぞつていくと、風の笑顔が現れた。傍らの男も笑っている。どこかで男と会つたような気がして藤島の心が揺れた。

「この男はだれです」

「そら、風さんのええ人ですよ」

「どんな人でした？」

「どんな人言うてもなあ、目えよう見えへんさかいに……ほいでもなあ、仲はよかつたようやで。風ちゃんはお父さん、お父さん言うて、相手の人を呼んどつたよつてに」「お父さん……」藤島の心に衝撃が走つた。

「どうしたんです、これは」
とりたてて家財道具らしいものはなかつたが、段ボール箱にはいった粗末な衣類や、小さな仏壇や食器の類がほこりをかぶつて放置されていた。

年末、翔一郎は大阪市中央区から届いた西原風の住民票をポケットに、大阪を訪れた。
大阪市中央区法円坂六丁目にあるそれは、二階建て八戸のみすばらしいアパートで、高層ビルの谷間にあった。風が住んでいた二階はいまだに空室であったので、翔一郎は大家に許しを得て部屋にはいった。

風は源の死後も夫の家に居ついて、大代谷川のほとりの廃屋でひっそりと暮らしているらしかつた。
冬のすすきは刈り取られる様子もなく、むしろ傲慢に大地を占拠しつづけていた。冷たい風に抗するよううねりを止める冬のすすきを遠景に、翔一郎は毎夜ただひたすらに歩きつづけた。それは健康維持のためではあつたが、どこへ踏み込むとも知れない危うさがあつた。その危うさが快いのはなぜなのだろうか。小さく口笛を吹いてみる。

年末、翔一郎は大阪市中央区から届いた西原風の住民票をポケットに、大阪を訪れた。

大阪市中央区法円坂六丁目にあるそれは、二階建て八戸のみすばらしいアパートで、高層ビルの谷間にあった。風が住んでいた二階はいまだに空室であったので、翔一郎は大家に許しを得て部屋にはいった。

「どうしたんです、これは」
とりたてて家財道具らしいものはなかつたが、段ボール箱にはいった粗末な衣類や、小さな仏壇や食器の類がほこりをかぶつて放置されていた。

「で、西原風にお父さんと呼ばれていた男はどこへ行ったんですか」

「それが、いっしょにおらんようになったんで……ああ、そうそう、二年ほど前に二人でお四国さん巡りをする言うて、うれしそうに出かけようとしたがな。……帰って来たときには風ちゃん一人のようで、しばらくしてから、また帰ってくるようなこと言うて、風ちゃんも姿をくらましてしもうたようなわけであ。何が何やらさっぱりわからん。けど私はこんな年寄りですさかいに、まあええか、と、のんびり構えとりました」

……お四国さん巡りとは、四国八十八ヶ所参りのことである。

西原風と四国八十八ヶ所一番札所霊山寺殺人事件とが一気につながった瞬間であった。藤島の脳裏には、自らがひそかに愛した風のたよりなげな面影が浮かび、それは瞬く間に異様にねじれて消えていった。

西原風の事情聴取が再開される日が来た。「浮かん顔してるやないか。美人と再会できるのに」刑事部長豊田のひやかしに翔一郎は苦笑した。

「いやあ、思わぬ展開です。柵からばた餅とは、このことですか。……まあしかし、取り調べはこれからです。はっ

ゆつたりと座っていた。

「じゃあ、大阪を出発するときから殺意があったということだね」と問うと、

「違います。違います」

風の否定は、つぶてのように翔一郎の顔を打った。刺すような風の視線に驚かされる。

「喜んでいたんです、わたしも父も」

四国八十八ヶ所巡りを志す人は、行きたいなど一旦思うや、それは知らず知らずのうちに熟成され、ある時を迎えると念願決行の好機を迎える。

その「ある時」がどのような時かは、説明しがたい。人それぞれの心の果実が不思議な作用で熟する時というべきか。

風と男はいそいそと家を出た。

男は堀田寛治といった。太平洋戦争後、朝鮮から父親とともに徳島に引き揚げ、苦難の青春時代を送った。そのころはまだ山本姓で、米ぬかを固めた石饅や、海水を煮詰めて作った塩を売り歩いて生活の糧とし、父母と第二人を助けた。見よう見まねで炭焼きも試みた。近くの山に登り、手当たり次第に枝を払い、炭にしたというわけだが、誰も寛治をとがめなかったのである。

戦争中、寛治の父は有名な大阪生糸の朝鮮支社長で、裕福この上ない生活を送っていた人であるが、帰国後はまる

きり犯人とは……」

「謙遜謙遜。田舎にしては、でかい事件が解決に向かうということやから。頑張って」「いや、どうも」

部長に背を向けた藤島の顔がひきつっている。迷宮入りかと思われた事件が解決に向かうとき、担当の警察関係者は得体の知れぬ意気の高揚に酔うものなのだ。だが、今度の藤島は違っている。不思議な悲しみに包まれていた。自らを鼓舞して事件を見据えなければならなかった。

どんな理由があったにしろ、連れの溺死を知りながら逃亡したのは、非道の限りであった。事情聴取を終えてないまま、犯人だと決めつけるのは危険であるが、家主の証言から慮れば、風は限りなく黒に近い。

そしてまた、犯人は犯行現場に回帰するのが定石だが、あの賢そうで美人の風がなぜ田辺源と内縁関係なのか。それに、源の一人息子浩の変死は、四国八十八ヶ所一番札所霊山寺殺人事件とつながっているのか。

謎は多かった。

「君は霊山寺で、あの男を池に突き落としたのか」

「はい。私が殺しました」とだけ答えた風の頬が紅潮する。花が開く瞬間をいきなり見せられた思いがして藤島は膝がふるえた。なんとという大胆な言いさま、潔さなのか。藤島の驚きをよそに、風はむしろ、呪縛から解放された体で、

で気概をなくし、ちつとも働かなかった。十八歳の寛治に寄り掛かり、感謝もしなかった。

寛治の運が開けたのは、徳島出身で東京に本社を置き沈没船などの引き上げ作業をするサルベージ会社の社長堀田龍之介に出会ってからである。龍之介は寛治を見込んで、東京の大学を受験させた。寛治の一家の面倒を見たのはいうまでもない。これは龍之介の胸の内に目算あつての取り計らいであったが、寛治も家族も、ただ有り難がっているばかりであった。

寛治は早稲田の理工学部を卒業後、龍之介に一人娘との結婚をきりだされ、一応は驚くが、妙に納得するところもあつて、あつさり承諾した。龍之介の経営する堀田サルベージの後継者となるのが約束されたというわけである。

当時、サルベージの事業性は高く、夢のある仕事であった。のちに寛治は瀬戸内海で謎の爆沈を遂げた戦艦陸奥の引き揚げを意図し、マスコミを賑わすことになるのである。

西原風の祖父二吉とサルベージ堀田組の社長堀田龍之介とは、共に阿波生まれということを知り合ひであった。風の母恵理子は故郷徳島での縁談を嫌って上京。徳島で会ったことのある龍之介に頼み込んでサルベージ堀田組の事務員となった。

そのころの恵理子のことを寛治は、

「あなたの母さんが座っているあたりが、ばあつと明るく

て、なぜだかは分からないけれど、自分の置かれてる立場とか生きざまとかが、とたんに嫌になり、糞虫みんちのくせに糞を即座に脱ぎたいと渴望し、震えが来た」と風に語っている。

が、しかし、糞を脱いだのは恵理子の方で、寛治は口実を構えては、現況にしがみつき、揚げ句の果てに舅しゅうとの言を入れて、わずかばかりの手切れ金を持たせ、恵理子と風を徳島に追返したのである。寛治四十歳の折りであった。女子大を卒業しているものの、子連れの恵理子は、故郷鳴門でも厚遇されず、大阪の旅館で住み込んで働くことになるが、流行性感冒をこじらせて肺炎にかかり死亡。風は三歳で施設に預けられた。

サルベージ堀田は戦後の時代経過と共にサルベージの仕事に行き詰まり、土木事業に転身するが失敗、手痛い目に遭った舅は婚をうらんで会社から放逐した。常に家付き娘を気取る嫁に未練はなく、寛治は飄々ひょうひょうと家を出た。子供もいなかったから後ろ髪引かれることもなかった。寛治は五十五歳になっていた。

以後、寛治は十年あまり、主に関西をまわって美容院のこまごました用品のセールスに携わった。それは市販していない化粧品やシャンプー・リンス剤であったり、ブラシやヘアピンやカーラーの類であったりで、豪気な男にとつては気恥ずかしいことであつたが、慣れるとどうということ

とはなかったのである。

むしろ、女の園の美容院で値切られたりからかわれたりしながら商売することが楽しくなった。

大手の販売会社から、ファックスで注文した品を受け取る美容院が多くなってからは、寛治の商売はきつくなるばかりであつたが、それでも、彼との取引を鼻屑ひなきにしてくれる顧客もあつたのである。

大阪城近くのさびれた美容院チロルを久しぶりに訪れた寛治は、わずかばかりのシャンプーを購入して、高価なクリームや美容液をサービスに置いていけと迫る年若い店長に困惑していた。店長は近頃客の入りか激減してお冠かんむりだつたので、寛治に無理難題を吹き掛け、ストレス解消に及んだというわけである。弟子は一人しかいなかった。

「大体、この子が来てから、ろくなことあらへん、しんねりむつりやる。そやさかいに客が減つてもして」

この子、と呼ばれた娘はシャンプー台の前でタオルを手洗いしていたが、店長の語気にしばし手をとめ、わずかに身を引いて寛治をちらと見た。風であつた。

寛治は金縛りに遭つたまま風を見つめた。

「なに口はってんねんな、いやらしおっさんやなあ。この娘はきれいやけど、でくのぼうや。施設で美容師になつた娘で、うちが預かつたんやよつてに腕は確かやけどな。うちかて若いころにはコンクールで大阪の代表になつたこと

あるんやで。パーマかけしたら大阪一や。

ほやのに何や？ よその店でカットだけして、ぐちゃぐちゃに髪逆立ててやで、あぁーこれすてき！ なんとら言うて喜んであるねん。阿呆臭いわな。なに、何あわててるねんな。これ、おまけにつけてくれるのんか、おおきに。そやさかいにあんた好つきや。また来てや」

寛治はあわてて外へ出た。「早うタオル干しといで、言うてるやろ！」店長の怒声が聞こえる。……神様は小説のような出会いを私に投げ与えた。あれは私の捨てた恵理子に生き写しや……寛治は怖かつた。

更地に生い茂つたすすきがおいでおいでをしている。

風は見た目はかよわげに見えたが、誰にも頼らないで生きていく心構えはできていて、破れない風船であるかのようになんか生きていた。雨の日でさえも風船は空を目指そうとする。透明のビニール傘を傾けて、抱えた小さな湯桶、銭湯ののれんをくぐる時は、自分以外の客がいませんように、と祈つてしまう。

誰もいないときは、湯船の縁に体を預け、ため息のような小さな声で「お父さん」と呼んでみる。風の声は湯気に包まれたまま、揺れながら昇っていく。うつとりして。風の体は父への慕情そのものとなり湯船に沈んでいるのであつた。

会つたことのない父への慕情は、風のお守りのようなもので、ひそかに「お父さん」と呼ぶことは、捨てられた子の自らの慰めで、無邪気な楽しみでもあつた。

寛治に店変えを勧められ、美容院アリサに移籍した風は、何度か食事を共にするうち、寛治が父親であることを知る。

子供を持つたことのない寛治は大喜びで、天にも昇る心地とはこういうものかと、母親似の風に見入つた。

なんの財産もなく、年老いているが、子供と暮らす幸せを私にいただけですか、と寛治はプロポーズする若者のように風を見つめた。

天涯孤独だと思つていた自分と暮らしたいと父親が言っている。風はうつとりしながら寛治の言葉をうけいれた。

体が熱くなり、みるみるうちに風の頬が染まった。風の心中の破れない風船は天に昇つた。

風のなかでは父親を許すも許さないもなく、父親の細胞を自分のなかに取り入れたような思いがあつた。これは経験した人でないと分かりはしません、と風は取調室で泣きつづけた。

「そんなに深いところで、理屈ぬきで許しているお父さんはどうして殺してしまつたのですか」

翔一郎はため息まじりに尋ねた。
風と寛治との共同生活は親子というよりも恋人同士のようであつた。寛治は捨てた子に気兼ねして風を「風さん」

と呼び、風は逆に銭湯ですら「お父さん」と呼び続けてきた寛治を「お父さん」「お父さん」とお呼びに呼べる幸せを噛みしめていた。

父に捨てられたいきさつは、重々母親から聞き及んでいて、それはテレビドラマのように映像化され、風の脳裏に去来し、知らぬ間に心の奥底に澱んでいたが、娘の父親への慕情は想像のほか強く、ましてや風は天涯孤獨の身、父と同居ということになればうれしくて、恨みつらみがどこかへ飛んでしまうのは当然である。

それに、寛治は資産家でもなんでもなく、日銭を稼ぐ老人で、風が同居生活を始めたということは、寛治の死を看取ると約束したも同然で、真実、父親との邂逅を喜んでのことであったと推測される。

どちらから言い出したのかは判然としないが、たぶん寛治の発案であろう。

二人で四国八十八ヶ所を少しずつお参りしよう、ということになり寛治と風はいそいそと家を出た。

風が母親の位牌をひそかに携えたのは言うまでもない。

「母さんも連れて行ってあげよう」と言わなかった寛治に多少の不満はあったけれど、風は父親が照れのせいで言いだせなかったものと善意に解釈した。

四国八十ヶ所一番札所霊山時にたどりついた時、風は感動の余り、しばらく、口が利けないような状態になった自分を感じた。二十六歳となった風は、もちろん小娘とは言いがたかったが、初めて父と旅してたどりついた場所が一番札所霊山寺であったのが格別にうれしく、父が母への贖罪のために霊山寺を訪れたものと信じて疑わなかった。

接待のおにぎりは、徳島県産の新米こしひかり、売店のひなぎたきび餅は、手作りの餡が格別に風味よいのもうれしかった。雨ざらしの木の長椅子のごみを、とっておきの花柄のハンカチではたいいてのけるのも、父を座らせるため。何もかもが幸せであった。

おどけたような口ぶりで、遍路の白装束を身につけたいという父とともに肩寄せ合い、白衣に菅笠、輪袈裟に納札入れ、手甲に念珠、ずだ袋に脚絆を一通い買い整えた。

「風さんは買わないのか」と父。

「ええ、……恥ずかしいもん」

「遍路姿はお四国さん参りのパフォーマンスやで。格好ええやないか。風さんも白装束にしよう」……ちよつと変な気がしないではなかったが、面白がっている父を見るのも幸せで、風はいそいそと父寛治の着替えを手伝った。周りにはツアー客が立て込んでいて着替えにおおわらわ。これも四国八十八ヶ所参りの心得を忘れていた。

一番札所霊山寺は、人間の修行段階で言えば発心の場で

白装束の寛治は言った。

「私は……」娘に向かって「私は」と言うのであるから、

寛治はよほど緊張していたのであろう。

「私は嫌なことは皆、忘れるようにしています。あなたも嫌なことは忘れてください」

風は自分の耳を疑った。

いやなこととは何か。寛治の言う、風にとっていやなことを忘れるとは、父に捨てられて暮らした全生活の否定であった。

忘れてくれとは何事か、と風は思った。

恐ろしく罪深いことや心の傷みを丸ごと抱えて、その懊惱を温め合い、縁の薄かった親子が、共に暮らさなかった歳月を埋めるように、一日一日を大切に生きる、ということではなかったのか。

風の心中で母に聞かされた手切れ金受渡しの無情の仕打ちや母の死や施設暮らしのつらさが、壊れかけの洗濯機の内部のありさまのように脳天をこすりながら現れては消え、それはやがてまるで故意であるかのように憎しみになり、目くるめく速さで殺意にすり変わった。制御できない天の力が風の魂をねじり上げた。

自分の言葉に答えようとしないう娘をけげんそうに窺う寛治の背を風が押した。

死んでください、頭から水中に落ちた寛治を風は溜め息

池の表に水すまし、中には子鯉を従えた金色の鯉たち、格好の語りの場面をお与えになった仏心に、二人の心は高揚した。

ある。だれに教えられたというわけでもないのに、父寛治の言葉をおかしいと思った風は、生まれついでての修行者というべきか。それなのに風の方が殺人を犯してしまうのである。

目に見えぬものにひれ伏す仏心の

果てとも放生のはとは群がる

瀬戸内 艶

餌をついばみ終えた鳩たちは一つ心のように群れて飛んだ。鳩の行方を追ったのち、目を下に転ずると参詣者の死角であるかのように、その池は黒く鎮まっていた。

不揃いな石組みの階段をよるめきながら辿り、父寛治と風は池のほとりに立った。

檜の大木の葉ずれの影が二人を包んだ。どちらからともなく二人は自然にうずくまった。風はそのとき、父に何か話さねばならぬと思ったが、そう思えば思うほど、ことばはもどかしく口の中に滞った。

父寛治も、長年捨てたままだった娘に本気で何か語らねばならぬと焦った。

しながら夢のように見ていた。

したたか池の水を飲み、ばたばたもがきながら、最後の力をふりしぼって、寛治は娘に瞳を凝らし、あたかも死なねばならぬものように目をつむった。

溺死したらしい父がうつぶせのまま動かなくなったのを見て、風は我に帰り、「お父さん！」と叫び、唐突に襲った深い悲しみにうろたえながら「お父さん、お父さんお父さん」と気狂いのようにつぶやきつづけた。それは読経のように池の面に落ちた。樫の病葉が落ちてくる。

殺意は消え、仇討ちの愚かしさも消え、悲しみにうちひしがれているのに、奸智は働いた。

池のなかに胸まで入り、手を伸ばして寛治の革靴を難儀の末に脱がせた風は、水際の石上にそれを揃えて置いた。自殺に見せかけるためである。

風は誰にも見とがめられなかった。参道を目隠しする高い山椿、山椿に続く檜や楠の大木。孤独に黒ずむ池のほとりはまだ紅葉せぬ楓の葉を映して、いよいよ青ざめた風は、まつわりつく濡れた衣装に気狂いしたようになりながら、寛治の衣服をかかえてよたよたと走った。木戸押し開けてすぐのところが駐車場。乗用車が四台停めてあったが幸いにして人けはなかった。泣きながらそこを駆け抜けようとして、出会い頭に自転車にぶつかった。

「これが自動車であつたら即死やぞ。無茶するなあ」男は

間延びした声で風を助け起こした。「ありやまあ、ずぶ濡れやないか。なにはともあれ、早う、うちへ行って服を着替えよう……」男は上着を脱いで風の下半身をおおい自転車荷台に乗せた。濡れた女を気づかして山際の人の通らぬ道を走りつづけ、霊山寺のある大麻町の隣町、大津町のわが家にたどり着いた。この男が、のちに風の内縁の夫となる田沼源である。

源にとつて、風が濡れている理由は問題ではなく、濡れている風に着替えをさせることだけが問題であったのだ。その行為には全く邪心がなく、だからこそ風も心を許して、源の自転車に乗せてもらい、何の不安もなく源の家に運ばれたのであった。

そのころ徳島県内には緊急配備が敷かれ、県外に出ようとする車の検問や列車乗客のチェックが行われていたが、いずれも空振りに終わる。そのころ風は源の家で風呂にはいり、源のもとを去った妻が残っていただぶだぶの服をまとって茫然としていた。

その夜は源との間になにごともなく、風はあくる日、だれに見とがめられることもなく、バスで淡路を縦断し、フエリーで大阪に帰っている。

怪しまれるのを恐れて、父寛治の衣服や持ち物を押入れのダンボール箱の中にしまい、源の家に置いてきたのだけは真底気掛かりであつたけれど。

寝るまえに押入れを物色している風のお尻に源はかきついた。

「何してるんや。怪しいやつや。何者やお前は」声は叱責しているのに、乳房にまわした手は愛撫の手であった。のけぞってそのままあつてなく犯された。風にとつて源は初めての男となった。

証拠の品を捜し出すまでは、と愚かしく居座り、居座るうちにわずかながら情も芽生えた。体を預けることで、目覚めた情念は、源という男の価値を見えなくさせていた。真実、不幸な女である。流行の服を着て装身具をじゃらつかせ、男をつまみ食って飽きない女もいるというのに、風はせつせと哀れを生きていた。

父の遺品は、隠したはずのダンボール箱からは発見されなかった。源も浩も何も言わず、風にとつてもどうでもいいことのように思われだした矢先だった。

「風さん、風さんがさがしとる物、薪の向こうに隠してあるけんな」

風呂の火を繕っている風に、源の息子浩は湯船の中から声をかけた。

「ほんまに？ ほんま！」……剪定した梨の小枝の束の陰に父寛治の衣服はあつた。匂いをかぐように胸元にかかえて風呂の炊き口に走り寄り、一枚一枚吟味しながら燃やした。その煙は頼りなげにすすき野の方へと流れた。傾いた

のんきな源はテレビや新聞の霊山寺殺人事件の報道を見聞きしても、風のありようと結ぶことなどいっこうに考えつかなかったし、自分がとてつもなくいいことをしたなどとも思わなかったのである。

事件から二月、風は自分が霊山寺殺人事件の犯人としてマークされることもなく平穩無事に過ぎたのを確かめ、事件当日世話になった田沼源にお礼を言うために、徳島県鳴門市大津町を訪れた。

犯人は事件現場に回帰すると言うのは真実であるようである。

父親の背をどんとついたわけでもなく、右手の人指し指と中指と薬指で嘘のように突いただけなのに、苦もなくよろめいて、寛治は池に落ちた。父親のもがくありさまを夢のように繰り返し思い起こして飽きない、ということとは、風の潜在意識にある加虐性を示している。罪は深い、と言ふべきだった。

なおまた、いまだに父慕わしさに泣き暮らすのも風である。愛憎の念は風の中でないまぜになりながらたむろしていた。

鳴門に着いた風は、すぐさま源の家を訪ね、お礼を言い、その夜は源の家に泊まった。父寛治の衣類を捜して持ち帰るためである。それらは殺された父親の身元を示す品々で、ぜひとも取り返して処分しなければならぬものであつた。

電柱の街灯が、花なら見頃という時期の金色のすすきの穂波をおずおすと照らしていた。

そのあとで浩の変死事件があったというわけである。

風呂小屋の小窓から首だけ出して、浩は無邪気にこう言った。

「風さん。燃やしたん？ それ、霊山寺で殺された人のと違うん？」

狼狽する風のありさまに、浩はあわてて頭を引つ込め、そのあと、声だけが聞こえたのだった。

「ぼく、風さん好きやから、言えへんよ！」風はしばらく、炊き口の前で座り込み、浩の言葉を反芻はんすうしていた。

浩が勢いよく湯船から出た音がする。風はたてつけの悪い風呂の戸を引き開け、「浩ちゃん！」と濡れた足にかきつき、そのまま力ごなしに前へ引き倒した。

「妊娠はしてましたけど、おなかの子のために浩ちゃんをどうこうする気持ちはありませんでした。妊娠してることを忘れてました。

浩ちゃんの私を見る目はだんだん男の目になってましたから。あのまま行ったら、私は源さんと浩ちゃんの間を行ったり来たりしてしまっただけなんです。簡単に逃げられるはず、と思わはるやろうけど、あの時の私にとっては、出口のない迷路のように思えました」

「けど、ひよっとしたら浩くんは、純真に母親としてあな

よろずの罪も消え失せたのは、風に殺された父寛治であつたのだろうか。

消罪の寺で父を殺し、そのことが元で継子殺しを働いた風が、もう一度この寺を訪れて、「よろずの罪も消え失せにけり」という御詠歌の意味を実感するのは、いつなのだろうか。

取り調べるほどに藤島は、犯した罪は許しがたいと思いつつも、風の哀れな心根にうたれ、抱き寄せて髪などで、心から底から共に号泣してやりたい思いに駆られたが、これをも人は劣情とさげすむであろう。

徳島地方裁判所の法廷に、初めて風が立つ前日にも、藤島はコートコートの襟を立て、大代谷川のほとりを歩いた。

八重むぐらの冬のすすきは、飛ばした綿毛の行方も知らず、そそけた穂先をそよがせて、ただ風になびくばかりであった。

風が田沼源と暮らした廃屋が見える。



斎藤澄子

さいとう すみこ

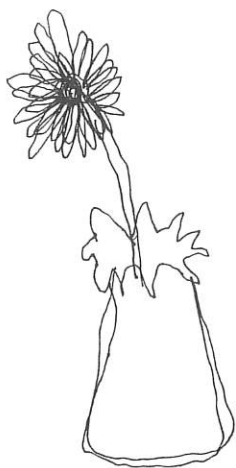
1933年 徳島県生まれ
徳島大学学芸学部卒作文指導において読売指導者賞受賞
旺文社学芸コンクール社会人の部の
小説部門「さざめく%」で文部大臣賞受賞

小説「文楽人形師 大江巳之助」

詩集「世紀末の接続詞たち」(砂子屋書房)

「一人芝居」「人間がワイングラスになる方法」(思潮社)

現在、同人誌「飛行船」所属



たを慕っていたかもしれないじゃないですか。それを確かめる度量がどうしてなかったんです。……むしろ、浩君の言葉をきっかけに自首することを考えればよかったんだ」

語気荒く藤島が迫ると、風はうつむいて沈黙した。無言の間は風の胸に満ち広がり、道義は風の良心を刺し貫いた。声もなく涙が流れ、肩が震える。

その後、父親殺しの動機について風はこのように語っている。

「私にも、ようわかりません。根本のところは、一度だけ謝って欲しかったんやろとおもいます。いとしくて懐かしくて、息がつまりそうになりながら池に落としました。それでいて殺そうと思つて殺した、という思いもあります」

父親は私たち親子を捨てながら、一度も謝つたことがないので。……矛盾した愛憎の念は、限りなく深く、量りがたかった。

四国八十八ヶ所一番札所霊山寺殺人事件の犯人西原風の逮捕は、藤島翔一郎の遭遇した最後の仕事となった。

前述のごとく、順打ち、旅立ちの寺、第一番札所竺和山霊山寺の御詠歌は

霊山の釈迦の御前にめぐり来て

よろずの罪も消え失せにけり

である。

飛行船

徳島県

『飛行船』の目指すもの

『飛行船』は代表である竹内菊世の、文学へのあくなき憧憬から出発した。創刊号「編集後記」から抜粋する。

「『飛行船』。幼い頃、我家の上を悠々と、堂々と、慌てず急がず、音もなく横切り、だんだん遠く小さくなって行く不思議な乗物に、ずっと魅せられていた」

竹内は四十年來の「徳島作家」の同人であった。同誌は一九五八（昭和三三）年に田中富雄が創刊し、半世紀にわたって徳島の文芸界をリードし続けた同人誌である。同人には芥川賞候補になった岡田みゆき、直木賞候補の中川静子らがいたが、田中、中川が他界し、岡田も高齢のため書けなくなったとき、「これまでの栄光の輝きが失せぬ今、その幕を閉じよう」という提案がされ、二〇〇六年、五八号を出して終刊した。しかし、文芸の灯をこれからも点し続けたいという思いは、それぞれの胸の中にあつた。

二〇〇七年の年明け、竹内菊世は新たな同人誌の創刊を旧知の仲間達に呼び掛けた。『飛行船』。その呼び名が集つ



5号出版記念祝賀会 会員から大きな花束を贈られて喜ぶ竹内と、会員たち。前に座っているのが齋藤澄子。右端、作者の松崎。

た者の共感を得た。まさに互いの夢を乗せて飛立つのに相応しい誌名であった。創刊から参加したのは、元「徳島作家」同人の齋藤澄子、鮎合巧、松崎慧。歌人で「玲瓏」編集委員の松田一美、詩誌「逆光」主宰の宮田小夜子、「阿波の歴史を小説にする会」の藤本好浩、徳島ペンクラブの丁山俊彦の七名。竹内がこれほど見込んだ同志である。

『飛行船』は、新緑の美しい五月、創刊を果たした。「ぼんと膨らんだ機体は、夢がいっぱい詰まっているようで、希望を託するにはうってつけのように思う。八人の夢を乗せて、悠々と優雅に飛んでほしい。声高に主張せずとも、しっかり存在感のある雑誌に育ってほしい」

それが、私費を投じて同人誌を創刊した竹内の思いである。小説六編、評伝一編、エッセイ三編。かくして一五〇頁の文芸誌が誕生した。巻頭作品は齋藤澄子の「風花」。他人の幸福を次々壊していく習性を持った女性の姿を通し、人間の心模様や生き方を描いている。竹内の「闇の入口」は老老介護の問題をテーマにしている。いずれも現代社会を反映した作品である。徳島県下の文学関係者からも、暖かい反響を得ることができた。

二号では、第一回大阪文学学校賞を受賞し、現在チューターを務めている四宮秀二氏の、「夕陽に赤い帆」を招待作品として掲載。宮田小夜子が長編評論「倉橋由美子」夢の浮橋——性と文学について——を発表。以上の二編によ

って『飛行船』は、本格的な文芸誌の骨格が備わってきた。

三号では、齋藤澄子が「水葬——永昇丸沈没する——」を発表。この小説はアメリカの原子力潜水艦と民間船の衝突事件を扱った問題作である。あり得ないことがあり得たこととして描かれている点が話題となり、各誌で取り上げられた。齋藤は四号で「謎つばき女波町」を、五号では「消罪の寺」と力作を発表し続けている。「文芸思潮」「文学街」の同人誌評でも絶賛され、新米同人誌『飛行船』の存在を示している。七〇歳代半ばの彼女が秘めた文学的才能と書くパワーに、同人たちは勇氣と希望を与えられている。

二〇〇八年発行の四号からは、大北恭宏が評論陣として参加。「吉本隆明論」の連載で、博学ぶりを披露している。また、松崎慧は「宮内鳩彦の誌友たち」と題して、戦後の徳島で、詩作に情熱を燃やしていた詩人たちの評伝を毎号連載し、関係者の好評を得ている。

以上、『飛行船』は順調に号を重ね、五号発行を記念して、「第一回飛行船文学賞」を公募した。これは、県下の文学を志す者への呼び掛けであり、後進育成の目的でもある。幾編かの応募があり、文学賞に該当作はなかったものの、「麦わら帽子の父」の佳品を優秀作とし、作者高木純を表彰した。六号からは高木も同人として作品を発表している。

竹内の文学への情熱に引け張られ、協賛してきた会員は、

日本の新文芸交流の渦を!

徳島県

三好市



富士正晴 全国同人雑誌 フェスティバル

2010

10月30日・31日開催

全国同人雑誌の文芸交流をめざして

全国の同人雑誌作家みんなで集おう

富士正晴生誕の地、同人雑誌のメッカ徳島県三好市で
ここから日本文学の新たな興隆を



- 第4回富士正晴全国同人雑誌賞授賞式 10月30日 1:30
- 特別記念講演「小説家の頭—アイデアを探せ—」
作家・日本ペンクラブ会長 阿刀田高氏 30日 2:00
名古屋で出会って5年、今年は三好市で!
- 第2回全国同人雑誌会議「同人雑誌という主張を広げる」
対話シンポジウム 勝又浩・松本道介 & 富士正晴賞受賞3者・徳島代表 30日 3:30
懇親パーティ
- 「作家&読者交流のつどい」全国同人雑誌振興会 30日 6:30
- 全国同人雑誌最優秀賞「まほろば賞」公開選考会
■おまほびけ 大歩危オプショナル観光あり 31日 9:00

会場 ■徳島県三好市 (甲子園でおなじみの池田高校の所在地) ホテル・サンリバー大歩危など
主催 ■富士正晴全国同人雑誌賞実行委員会・徳島県三好市・三好市教育委員会
後援 ■徳島県教育委員会・県立文学書道館・徳島新聞社・四国放送・徳島ペンクラブ・中部ペンクラブ・
全国同人雑誌振興会・三田文学・季刊文科・文芸思潮・作家集団「塊」・文学街
問合先/申込 ■三好市生涯学習課 TEL0883-72-3900 (団体・グループ申込歓迎/個人参加も歓迎)

※参加申込先
右の団体でとりまとめ
受付をします。こちら
にお申し込みください。

中部ペンクラブ	〒461-0004	名古屋市長区葵1-16-31 サンコート新栄9F	TEL052-931-5230 FAX052-931-5606
文学街	〒168-0065	東京都杉並区浜田山2-15-41	TEL&FAX 03-3302-6023
文芸思潮	〒158-0083	東京都世田谷区奥沢7-15-13	TEL03-5706-7847 FAX03-5706-7848

飛行船



同人雑誌紹介



多少の出入りを含め、現在十名。二〇一〇年五月には七号を發刊する。会費なし、会則なしのつましい会であるが、唯一「書く」ことが会員の資格である。書けなくなったり、発表を怠ったりすれば、退会である。地道に書き続け、発表し続ける会員によって『飛行船』は支えられている。平均年齢の高い『飛行船』であるが、健康に留意し、勉強を怠らず、文学的興味を磨き、世間の動きを察知する努力をして、これからも弛まず動んでいきたいもの。「徳島に飛行船あり」と、文学を志す若者が憧れる存在となり、中央に通用する同人が育ってくれば嬉しい限りである。これが、代表竹内の目指すところであり、我々同人の向かっていく方向である。(松崎慧)

飛行船

連絡窓口 ●竹内菊世
〒460-0026 徳島市通町二・二
TEL & FAX 088-655-2074



徳島 阿波踊り

もう一つのドア

中山茅集子

手術のあと二ヶ月して退院を許されてからも、夫は週に一度、後には月に二度の割で予後の診察にかよい、私も付き添った。医者の指示がおおむね私に向けられるからである。

慢性盲腸炎の手術は三十分もあれば済むはずだったのに三時間もかかった。長年にわたる放置から、盲腸に癒着した尿管をはがすのに手間どり、あげくに尿管の一部が切りとられて脇腹にストマ（人口膀胱）がぶら下がった。「ストマをつけたままで風呂に入れますよ」

さんざんロビーで待たされた私を呼んで医者は言った。そうか、そのまま風呂へ入れるのか。私は医者に感謝した。手術は成功したのだ。だがその夜、集中治療室のベッ

ドで眠り続ける夫の体についた異物、ストマなる人工膀胱のぶざまに胸を突かれた。

手のひらをひと回り大きくした厚手のビニール袋を脇腹に貼りつけた夫の体は、私の見知った体ではなかった。老いのトバ口に立つてはいるが、どこかにまだ少年のホルムを残していた。ことに背中から尻へと流れる柔らかいカーブに。鉛色のビニール袋はそれのやさしい窪みを隠している。男にとっても敏感な場所であるはずの脇腹にぶら下がる異物。

術後の快復につれてストマを貼ることでおきる症状、湿疹や尿漏れは、ストマの洗濯と皮膚がそれに慣れることで少しずつよくなったが、四六時中異物のぶら下がる憂鬱は

夫だけのものではないと突きつけられた。夫婦の営みで肌を押しつけられるストマのぞっとする感触と異臭に、これから先も決して慣れることはあるまい。

「異常はありませんな、ストマをつけることでおきる尿の逆流から腎盂炎になることが多いのですが、よく管理ができるとりますよ」

医者は私をねぎらった。機嫌よく対応する医者をまえにしては何も言えない。あのこと。いや、もしかして察しているかもしれないが、医学的には些細なこととして切り捨てているのだろうか。

診察を終えると夫は待ちきれぬように喫煙コーナーに向かう。待合室をかねるロビーを抜けたところに、売店や自販機、椅子テーブルを備えたコーナーがある。夫は自販機からウーロン茶を取りだすと、窓際のいつもの場所に落ち着き煙草に火をつけるだろう。診察日には決まって繰り返しされる後姿を見送り、渡されたカルテを窓口のケースに入れる。

先週の診察日に彼女を見かけた。

ロビーから病院の要へと延びている廊下の入り口だった。廊下はどこへ行き着くのか、立ち入り禁止のステッカーが立てられている。夫の入院中に一度だけステッカーを無視して先へ歩いた。廊下は行く先々で枝分かれして、ア

ルフアベットを表示しただけのドアが続き、迷路に踏み込む怖さに足がすくんだ。誰かに背中を押されるようにして戻る途中で白衣の男とすれ違う。男は咎めるより先に女の憔悴した顔に気を殺がれたふうで、足早に立ち去った。

あの頃、私は老婆のようだったに違いない。夫を看病するなかで眠れぬ夜が続いたから。俄か老婆になった私にエロスを照射してくれた彼女に、今また刻々と色褪せ干からびてゆく花芯の痛みを訴えたい。彼女なら、素直に耳を傾け痛みを分け合ってくれるだろうから。

廊下の灯りもロビーの天井に埋め込まれた白熱灯の光からも遠い仄暗い一隅に自販機とベンチが置かれ、女が一人本を読んでいる。つんとしゃくれた鼻、栗色の髪を前でふつくらと張らせ、無雑作に束ねている。杓元を飾るブラウスのフリルに隠れて口元は見えないが、私には容易に想像できる、左右のえくぼに消える薄い唇を。

私は女の前に立つ。女の方から気づいてくれるのを待つ。やがて、立っている場所が曖昧になり、時間の深みへはまり込むあの感じがつま先から這い上がってくる。足元に目を落とす。あの日もお気に入りのこの靴をはいていたのだ。ワインカラーのウォーキングシューズ。

あの日、買ったばかりのウォーキングシューズで夕暮れの病院に滑り込んだ。

エレベーターは三階外科病棟で止まった。足元から延びている長い廊下の中ほどに空の配膳車が置き去りにされていた。人影はない。時刻は五時半を少し回っている。窓に面して片側に並ぶ個室は相変わらずしんとしている。食器の触れ合う音が洩れない代わりに病棟全体を食物の匂いが漂う。配膳車の脇をすり抜けて夫の待つ病室のドアを押し開けた。

あ。一瞬足がすくむ。ベッドに近づけた椅子に女がいた。上体を病人の顔のあたりに屈めていたのが、気配で体をおこした。その拍子に黒っぽい上着が肩からすべりおち、信じられないほどの豊かに実った乳房があらわに。同時に寝ているベッドの病人が凍りついた女の視線を追う。

一連の動作がスローモーションの映画のように私に迫るのを、馬鹿みたいに口を開けたままで見た。そして、私を振り返った病人が夫ではないと知ったとき、夢中であやまり廊下へ飛び出たのだった。

主治医の最後の回診のあと、夫は睡眠薬の力を借りてねむっている。病室を間違えたことは話したが、見知らぬ男女の情事は伏せた。話せば夫の欲情を引き出したに違いない。それにしただって、主治医の回診の間には看護婦さんの見回りがある。わたしにはとてもそんな冒険はできない。眠れぬままに思い出した。あの部屋を淡々しく見せていたカーテンを。微妙な色合いと翳りをおびたカーテンが中

いと教えなんだから」
奥さんは或る宗教団体の熱心な信者である。
「奥家くんも奥家くんじゃないか、いくら奥さんが信者でも、そんなところへのこのこついで行くやつがあるか」
夫が口をはさむ。奥さんが赤ん坊を右から左に抱き変えた。

「……ほんととは彼、ノイローゼになってねえ、だから」
「まあ、奥家さんがノイローゼに？」
私と夫はほとんど声をそろえた。
「あら、意外とデリカシーなんよ、この人」
「へええ、ほんとかねえ」
まあまあ、本屋はしきりに照れている。
「おかげでよくなったみたい」
赤ん坊が眠り始めた。

「そんなにご利益があるんなら、わしも行ってみるかな、パンツはともかく、もともと財布なんて持ったことがないからな、あ、だめだ！だめだ！わし、横っ腹に小便の袋がついたんだ、こんなさまじゃ一緒に風呂へはいれんよ、いくら私物を持つなど言われてもなあ、小便の袋を預けるわけにはいきまい」
湯の上にぽっかり浮かんだストマがおかしいと若い夫婦は無邪気に笑い、私は泣き笑いになった。そのあと、奥さんが思い出したというふう聞く。

庭を挟んで向かい合う病棟の灯を映していた。病室はこの部屋と同じはずなのに、乳房を見せてすわる女の周りは別の切りとられた空間に見えた。カーテンのせいだったかもしれない。

思いついてソファから立ち上がる。戸口まで歩き振り返る。間違ってた場所と同じ位置に立つ。病室にある唯一の大窓は今の時刻ブラインドが下ろされ、夜の部屋を縞模様染め分けているだけだ。

病人食が三分粥から五分粥になった日の午後、珍しい見舞い客があった。子連れの若い本屋夫婦は膝の抜けたジーンズの長い脚を組み、繁華街のカフェにでもいる陽気さだ。「どう思う？自分のパンツも人のパンツも一緒くたで、風呂上りに重ねてある順番にはくなくて、ぼくはゼツタイになじめんなあ」

「ちゃんと洗濯してあるんよ、パンツはパンツじゃん」
惜しげもなく胸をひろげて赤ん坊に乳をふくませながら若い奥さんが言う。私のなかに消え残っている隣室の女の乳房が重なる。

「んじゃま、パンツはゆずるとして財布はどうなんよ」
男は毛糸の帽子をかぶっている。濃い頬髯のわりに髪が薄いのは、年中手放さない帽子のせいだ。

「だって、あそこは自給自足、平等、一切の私物は持たないとお隣は娘さんみたいね、お見舞い客を送ってドアの外に立っていたんだけど、ひらひらのついたピンクのガウンが可愛らしくて、ね」
「そうそう、入院してもわたしや目一杯おしやれしてるのよって感じ、いるんだよなあ、ああいうのが」
私はむきになって夫婦の間にわりこむ。

「ちがうのよ、その人は付き添いさんで、病人は男の人、旦那さんかしら、ひよっとして恋人かも」
「へえ、とつても付き添いさんにはみえなかったわ、旦那さん？まさかあ」
奥さんは大げさに手をふり、その拍子に赤ん坊の頭がこくと傾いた。乳をのむ夢でも見ているらしい。唇をすぼめてちゅうちゅうやる。まさかあ！自信ありげな奥さんの声私を不安にする。あのときは頭に血がのぼっていたし、慌ててもいた。女の顔だつて覚えていない。ひとつだけ、これだけは忘れていない。女のたつぷりと実った乳房と、それをむさぼっていたのが赤ん坊ではなかったということだ。

夫婦を送って廊下に出る。なんの変哲もない真鍮のドアが並ぶうそ寒い光景も、赤ん坊を抱いた夫婦が立つと華やいだ。
「ここよ、彼女、このドアの前に立っていたの、あら、赤木さんっていうのね」

奥さんに言われて見ると、ドアの上のほうに「赤木」のステッカーが貼られていた。

八時の回診が終わるのを待つて夫は寝入っている。本屋夫婦が持ちこんだ下界の風は病室の湿気を吹き飛ばす楽しいものだったが、そのぶん疲れたのだろう。備え付けのソファをベッドに作り変え、私が寝たのは消灯の九時を回っていた。

夜は二時間おきに看護婦さんの巡回がある。何度目かの気配で目をさましたとき、目醒ましの針が蛍光盤の一時を指していた。十一時の巡回を知らずに眠っていたらしい。ベッドの夫は豆球の赤い光の輪のなかに眉根をよせて眠っていた。

ふいに、部屋が揺れた。が、すぐに隣室からの物音だと気づく。押し殺した複数の話し声にからむ足音がストレッチャーの滑る音に変わり、慌ただしく廊下を走り去るのをきく。

「昨夜はお隣でなにか」

翌朝、清拭にきた看護婦さんにきく。

え？ 念入りに化粧した中年の彼女は首を傾げただけできばきと手を動かす。夜勤明けの疲れを濃い頬紅と口紅でカモフラージュしているが、すでに隠すすべもない。

「でも、その音で目がさめたの、ストレッチャーの音で」

者に付き添う女たちはたいていエプロンをつけていたが、胸当てのついたものは見かけない。白いエプロンが眩しかった。女は笑って軽く頭をさげた。後ろに束ねていた髪が片方の肩にかかる。振り払うと真つ直ぐに私を見た。

あ、あのときの……

朝の光の中で豊かな乳房はバラ色のセーターに包まれ眠っている。でも、目の前で親しげに微笑む女がはたしてあのときの彼女かどうか。

「またお会いしましたね」

女から先に声を掛けられて慌てた。

「ごめんなさい、もつと早くにお詫びしなければいけないかったのに」

「ああ、もうよしまししょうよ、わたくしだつて間違えることはありますよ、同じようなドアなんですから。それよりもあなた、びっくりなさったんじゃない？」

急に悪戯っぽく目を光らせる。

「お部屋を間違えたんですから、それはもう」

すると女はじれったそうに、ほとんど地固太を踏みかかない素振りです、実際に子供のようには体を揺らす。

「そうではなくって、あのときのわたくしたち、裸の」

女は笑う。返事に困っている私に頓着なく笑う。笑うたびに、切れ長の目、悪戯っぽくしゃくれた鼻、上向きに弧を描いて深いえくぼをつくる薄い唇のどれもが絶え間なく

「なにも聞いていませんけどねえ」

看護婦さんに訊いたのは失敗だった。入院患者のいちいちを他人に口外するはずがないのだ。清拭は手際よく運んでいく。ワゴン車の蒸し器から熱いタオルを取り出しては夫の体を拭いていく。熟練の手にかなわないまでも手伝う。「ひと山こえて……ふた山こえて」

看護婦さんが歌い始める。清拭が終わると新しい寝巻きに着替え、シーツを替えるために歌う。夫はベッドの上で他愛なく左右に転がり、ひと山こえて……で片袖が通され、ふた山こえて……で両袖が通される。

朝ごと、洗濯物が一抱えある。横つ腹についたストマは、フィルムと肌の間に隙間がでやすく尿がもれる。朝までに何度も寝巻きを替えることになった。病棟毎に洗濯場があり乾燥室まであるが、天気の良い日は屋上の干し場へ上がった。洗い物も自分の体も陽と風に当てて、沁み込んでいるにちがいない因われの匂いを晒すために。

今朝の屋上は秋の日差しがふんだんに注いでいた。地面にまでは届かない風がロープに吊るした洗濯物をひるがえした。どれも似たような柄の浴衣の狭間に見え隠れする人影に気づく。そこだけ雨よけのビニール屋根の下に立っているせいか、女の顔はくぐもる光のなかで半透明に見える。広い屋上には私と女だけらしい。

女は胸当てのついた白いエプロンをつけている。入院患

そよぎ、小悪魔的な魅力を放つのだ。私は忽ち彼女の虜になった。

夫が歩く練習を始める。点滴の袋を吊ったパイプを転がして歩く距離が日増しに延びて行く。十一月半ばの晴れあがった日、私たちはちよつとした冒険を企てた。

夫が入院している三階には渡り廊下で二つの病棟がつながっている。ささやかな冒険とは、渡り廊下を越えたあちら側の病棟へ行こうというのだ。

どこまでも続く手摺りを頼りに、おぼつかない足取りの夫に合わせて歩く。こちら側の長いロビーを突き当たり、鍵の手に曲がる渡り廊下を越えると未知の領分になる。夫の部屋からは中庭を隔てた向かいに眺めることはあつても、その内側へ侵入したことはなかった。

渡り廊下の正面にナースルームがある。そこを中心に廊下が左右に延びていた。一瞬迷ってから、光が差し込む側を選んだ。そこは突き当りがベランダになっているらしい。

歩いていく両側に大部屋や個室がまじり合っていて並び、ほとんどが男の患者だった。すれ違ふとき、彼らは胡散臭げとも同病を憐れむともつかぬ視線を投げかけ、私はわけもなく目を伏せる。女の私は闖入者なのかもしれない。

たどりついたベランダは二人が立つと一杯だった。そこからの眺めはどうやら病院の裏手になるようだった。まば

らな立ち木や手入れの届かぬ花壇をすかして看護婦宿舎らしい赤レンガの建物が見えるが、いまでは使っていないのだらう、締め切った窓やレンガの壁に濃く蔦が絡んでいる。「あの辺がうちだなあ」

夫が指差す赤レンガの右肩に丘がのぞき、教会の尖塔が光っている。私たちの家はその辺りのはずだ。ここからはついその距離なのに因われの身には手の届かない先だ。夫が飽きもしないで同じ方向を眺めている間、私はほんやりと、中庭を挟んで向き合う病棟、夫に伴いたった今そこから歩いてきた病棟を眺めた。

そして突然、何かに打たれたようにして思いついたのだ。午後のまだ充分に高い日差しを避けて、病室の窓は申し合わせたように白いブラインドが下りて見分けもつかない。そんな白い窓の連なりをクイズでも当てるようにして探していく。淡色のカーテンを求めて。

一日の終りの回診が無事通過すると、私はほっとして遅い風呂を使う。洗濯場と並びあう風呂は五時から八時までと決められていたが、付き添いの家族は大目にみってくれる。今夜も広い湯船に一人のびのびと体を沈めながら、昼間向かいの病棟のベランダから眺めた窓の連なりを思い浮かべた。どう目をこらしても期待した淡色のカーテンが見つからなかったのを。

どうということだらう。そっくりの白いブラインドの連なりに、どういう仕掛けがあるのだろう。あのとき見たと思っただのは、動揺ゆえの幻影だったのだろうか。

「お隣さんは娘さんみたいね、ひらひらのガウン着て……」

湯船の底から本屋の奥さんの言葉があぶくになって浮かぶ。そんなはずはない、私は声に出してあらがう。「わたくしだって間違えることはありませんよ、それよりもあなた……」

湯船の底からもう一つの声が絡みつく。

「あのときのわたくし、は・だ・か・のわたくし」

眩しいほどの日差しの下でさらりと言つてのけたことに、企みがあったとは思えない。それなのに、今夜おそい湯に浸かっていると鮮やかな企みの匂いを放つのはなぜだろう。すでに私は彼女たちの情事に深入りしているのかもしれない。

風呂から出てひと気のない廊下を歩いていると、少しずつ憑き物がおちる。やがて、病室近くロビーに置かれたソファの一つに背を向けて座る人影を見た。夜の廊下も消灯時間の九時には灯りを落とす。ソファの人を包みこむような薄明かりに髪留めが鮮やかだった。

「いい香りなこと、お風呂を使われたのね」

近づくと、背を向けたままで声を掛けられた。

「きれいなヘアピンですねえ」

回りこんで女と向かい合う。薄物のガウンを羽織っているので肌の白さが際立った。スチームがほどよい温度を保っているとはいえ汗ばむ季節は終わっていた。それなのに、うつつらと汗ばんでみえるのは、湯上りなのだろうか。これまで同じ階にある風呂で出会ったことはなかった。

「七宝焼きなの、彼からのプレゼント」

汗ばんでいる女の体が、私自身の湯上りの体とひとつになる。薄物のガウンから豊かな乳房が透けて、赤い実のように固くなっている乳首は、果てたばかりの情事の証し。ほかには誰もいない暗がりや女を無警戒にしている。ふと、気だるくソファにあずけた女の膝に、ひどく懐かしいものを見た。

女持ちのパイプだ。黄色とブルーを練り合わせたペンシル型のパイプ。負け戦で放り出された女たちは主権を獲得する手はじめに鼻から細い煙を吐いた。戦勝国から入ってきた女持ちのパイプは忽ち流行した。殊に粹がる女たちに。私にも覚えがある。戦場から死にはぐれて帰ってきた男たちに絶望し、グミの実のように唇を彩り、フレヤスカートの足を組んで鼻からの細い煙を競った。

「これ、いまだきおかしいでしょ」

「懐かしいわ、私も持っていたから、とうになくしてしまっただけ。若いときってやたら粹がって、あ、ごめんなさ

る」

「いいのよ、わたくしにも同じようなときがあったわ、でも、さすがに昼間はね、こんな時間だけよ、使うのは」

女は言うパイプをバッグに納めた。それをしおに二人は立ち上がった。

「ご病人の具合は？」

「え」

「あの、いつかの夜はストレッチャーで」

「それがねえ」

女は弾んだ明るさで応えた。

「たぶん、あなたの旦那さまと同じ頃に退院できるかもしれないの」

私は言葉を失う。このところ夫がせつせとリハビリに励んでいるのを見かけたのだろう、ころころと点滴棒を押しながらの。

「それは……じゃあお互いにもうちよつとの辛抱ですね、ほんと、長くいたいところじゃないもの」

ロビーをかねる広い廊下を手摺りにつかまり、空いた手に点滴棒を押して歩く患者は例外なく明るい。退院を間近にしているからだ。女の連れ合いも混じっているのかもしれない。

二人はロビーをあとに個室が並ぶ長い廊下を歩く。天井に埋められた灯りが更に光を落とす。女が立ち止まった。

「おやすみなさい」

女がドアの中に滑りこむとカチリとロックが鳴った。瞬間、私は再び夢の中に引き戻された。

ドアが閉まる寸前、女の肩越しに見たカーテンはあの夜見たのとそっくり同じものだったから。この時刻、どこの病室も暗く寝静まっていたが、各棟の真ん中を占めるナーズルームだけは不夜城の明るさの中に静まり、カーテンをきらめかせた。たった今、ロックの音と共に閉ざされたドアの前に佇み、仄暗い灯りを頼りにステッカーの名を確かめようとしたが、読みとれなかった。

睡眠導入剤を与えられてよく眠っている夫の傍らでひっそりと目を開けている。簡易ベッドの上で何度も寝返りをうつ。夫の体から下がっている二本のチューブは、胃液と尿を排出するためのものだ。昼間、胃液が緑色になることがある。隈なく流れる赤い血、尿の黄色、その他にも人の体の中は思いがけないほどの華やかさで彩られ脈打つらしい。そして今は二本のチューブが暗いなかにひっそりと垂れている。

誰かに揺り起こされて目覚めた。深い眠りの中にいたようだ。時計の青い文字盤が四時を指していた。肩に手を当て揺り起こされた感触が残っていた。朝一番の検温には二時間も間がある。私は頭から毛布をかぶった。

空しくすり抜けていく。

十メートル先に立ちふさがるエレベーターのドアは閉まったまま、一切の物音が消えた。廊下の片側に連なる窓に朝の光は見えない。誰かに揺り起こされて目覚めてから、ほんのいつときしか経っていないようだ。それとも、これは夢の続きだろうか。

ふと、足をベルトのように這う光を見た。慌てふためくように出て行ったあとのドアの隙間から洩れているのだ。明け方近い冷え込みが簡易ベッドに残してきた温もりを思い出させ、引き返そうとして逆に光のベルトに絡みとられる。同時に意志を離れた右手がドアを押しした。

背後でカチリと澄んだ音を聞く。あの日の夕方、夫の待つ病室のドアを開けたつもりが、隣室のこの部屋に立っていた。いま私はあの時とそっくりドアの内側にいる。入院患者に決められた五時半の夕食に遅れて走りこんだ時の胸の動悸がよみがえる。違うのは、ベッドにいたはずの男も看護する女もいない無人の部屋であることだ。

つい今しがた迄いたはずの人の気配はまったくくない。それらしいものといえば、幽かにゆれるカーテンだが、よく見ると、淡々しい光に漂う小花模様と見たのは凍てつく雪の結晶なのだ。中庭を挟んで向かい合うナーズルームの灯に、たとえようもない美しきできらめく。それと気づいた

と、そのときだ。

押し殺した声にまじり慌ただしくストレッチャーが隣室に運び込まれる気配を聞いたのは。とっさに毛布をはねのけると床に下り立った。ベッドから夫の深い寝息がもれてくる。この部屋の異変でないことがわかると私は急に大胆になる。バジヤマ代わりのスエットスーツの上から毛糸のカーデガンを羽織るとドアの前に立ち、息を止めた。

廊下で待機する人と病室の医者との間で交される低い応酬のほかに、怖ろしい速さでことが運ばれているようだ。止めていた息を吐くとドアのノブを握り締める。

廊下を滑っていくストレッチャーの軋みと、羽をこするような複数の足音が一団となって突き当たりのエレベーターを指すらしい。そこまでの距離を推し量ると、握っていたノブをゆっくりと回す。

ドアを引き一気に廊下へ出た。今しも、大きく口を開けたエレベーターの中へストレッチャーを囲む一団が呑み込まれていく。間違いなく彼女もいるはずだった。

私は呆けたように冷たい廊下に立ちすくんでいた。頭はどこかで、再びエレベーターのドアが開くのを待っていたのかもしれない。病人はともかく彼女だけは戻ってくるだろう。今度こそ労わりの言葉をかけなければ、たぶん同じ頃に退院できるかもしれないよ、今夜ロビーでの会話が

とたん、締め付けるような寒気に襲われる。素手で氷に触れた瞬間のような。

窓のそばのヒーター、ソファベッド、病人用ベッド、置かれていた順序も場所も夫の病室とかわらないのに、銀色に光るヒーターがまるで氷塊のように見える。ソファに毛布は角を揃えて畳まれていたが、病人のベッドは整える間もなかったろう。それにしても、あまりの乱れようだ。

ストレッチャーで運び出される事態ならば苦痛のきわみにのたうつこともある。思いやって目をそらしたすぐ側の壁に止められた一枚の写真。セピヤ色に変った古い写真。ベッドに近寄ってよく見ると、凍てつく大地を這う虫の行列。なおも目を凝らすと、虫と見たのは背を丸めて歩く男たちの隊列なのだった。虫になった男たちは有無をいわせぬ力で私を縛り付ける。これとまったく同じ写真が夫の画室に貼られていたのを思い出す。イーゼルのすぐ傍らの壁に。焼け爛れたほどに変色して。

病人が寝ているベッドから虫になった男たちはいやでも眼に入るだろう。あの戦いが負け戦に終り、新しい国づくりが始まったからといって、なにもかもが終わったわけではない。虫になった男たちは今も記憶の暗闇に生き続ける。夫の画室や古い病院の一室で。又も目をそらしたとき、枕に絡まる髪の毛、長い栗色の髪とぬめるような黒い髪が、交尾の蛇を思わせて立ち上がる。

いつからとも知れぬときから、捕虜収容所ならぬこの部屋に閉じ込められた愛の営み。虫の男の飢えが決して満たされないように、男を待ち続けた女の飢えも満たされることはないのだ。氷に閉ざされた夜半は、一つベッドに抱き合い命の温もりを分け合う。

壁の中からナースコールが響き、飛びのいた。もう少しで声を上げるところだった。自分が今どこにいるのか、気がついて夢中でドアを引く。廊下に出たとたん、入ったときと同じようにカチリと内側から閉まる音を聞いた。

「あら、今のコールは奥さんのところ？」

ナースルームから走り出た白衣の人と危うくぶつかるところだった。

「あ、いいえ、うちじゃありませんよ」

「でもどうして、いま時分こんなところに」

顔見知りの若い看護婦さんが慣れた仕草で私の額に手を当てる。

「ほんとに大丈夫です、ただ、お隣の部屋からストレッチャーが出て行ったものだから、もしかして急なことにでも……、昨夜ロビーで付き添いの方とお話ししたばかりだったんです、もうすぐ退院と聞いたのに」

「それっていつのこと？ この病棟で変わった事はありませんでしたよ、ナースコールだって、たった今お隣の部屋から鳴ったばかりよ、それに、付き添いさんの泊まりも聞いて

熱心に読みふけていると見えた女の膝から本が滑り落ちる。私は拾い上げると女の膝へもどした。女が顔をあげた。投げやりにも見える気だるい目、悪戯っぽくしゃくれた鼻、端でえくぼをつくる薄い唇、どれも間違いなく彼女のものだ。こうして待合室にいるのは、女の夫も無事に退院して、今朝の私たちのように外来として待っているのだろう。女の目は私にはなくロビーを行き交う人の流れを追う。

「ほら、いつか病室をまちがえたわね、あの時の」

私は殆ど女の肩をゆさぶりかねない期待で言う。

「あのときは、ほんと、どうしようかって、だってねえ、あなただって」

彼女だって忘れるはずがない。

「あなただって忘れるはずがないでしょう」

私は唄のようにリフレインする。女はどこを、何を、見ているのだろうか。私はまたも女の肩を揺さぶりたい衝動にかられた。思いつきり激しく。そして、ふいに或ることに思い当たったのだ。

もしかして、彼女の夫は今もまだあの部屋にいるのではないか。赤木というステッカーが貼られたドアに仕組まれたもう一つのドア。その内側で共に生き続ける。淡色に光る氷のカーテンが窓を覆うラゲルでは、夜ごと営まれ

てないけどねえ」

首をかしげながらドアを握ると振り返った。

「奥さん、ご心配なさるようなことは何にもありませんから、お部屋に帰って休んでくださいね、お疲れなのよ、きつと」

慰め顔にいうと、たったいま私を送り出してロックされたドアを押す。ドアは苦もなく開いた。中は暗い。私を絡めとり誘い入れた光の帯は間違いなくこの部屋から洩れていたのだ。看護婦さんが持つ懐中電灯の赤い光の輪を追う。赤い輪が床からベッドへと這い上がる。

「赤木さん、どうかなさいましたか」

呼びかける看護婦さんに細く甘えた声が返った。

「眠れないの、お薬頂けないかしら」

覚え知らぬ若い女の声だった。

夫が眠る部屋にもどり、頭から毛布を引き上げる。あの人たちが今夜あの部屋に戻ってくるのはいつになるのだろうか。ストレッチャーが運ばれた先は、いつか私が迷い込んだ辺りに違いない。アルファベットのステッカーが貼られただけの部屋では訪ねようもないけれど。

深い徒労感におそわれる。引きあげた毛布に体温が残されている。幽かな体臭さえも。自分の体温と匂いが信じられるすべてに思われた。あと一時間もすれば夜が白み始めるよう。

愛の激しさに男は命を削り、女のエロスが男を死の淵から連れ戻す。あの負け戦で引き裂かれた愛の空白を取り戻すために。互いの命と愛を永遠のものにするために。

あのドアは、内側の住人の意志でしか開くことはなかったのだ。ではなぜ、あの夕暮れに私は……。それが、ドアの内側で待つ女の意志だとしたら。病院というラゲルに囚われた互いの身を舐めあうためのたくらみだとしたら。じじつ私は女によって救われた。えたいの知れないもどかしさは付きまとも、女にみなぎるエロスの照射に勇

気づけられ、ラゲルの日夜を耐えることができた。女は本を読み始める。物語に没頭しているようでも、その振りをして私が立ち去るのを待っているようでもある。ラゲルから解放された私にはなんの関心もないらしい。

「お別れしたほうがよさそうね」
そっとささやいて膝を折る。

「ほんとはあなたと花芯の話をしたかったの」

つい、と女の顔が間近にせまった。息を殺し、四つの目が結び合ったときどちらからもなく抱き合う。女の体をめぐる血の音が伝わり、私のそれと一つになる。唇が重なる。一瞬、氷の冷たさに貫かれた。

クレーン

群馬県

『クレーン』ユラユラ

前橋文学伝習所事務局 和田伸一郎

一九七九年の創刊です。『クレーン』という誌名は、井上光晴著『虚構のクレーン』より、井上光晴さん自身に命名してもらいました。井上宅で、私たちが提案した「風嶺」に、「これでもいいんだけど、なんか俳句の雑誌みたいだな」と言っただけで、虚構のクレーン」はどうかと井上さんが提案した。それを横で聞いていた井上夫人が、誌名に「の」が入るのはおかしいわよといわれ、『クレーン』に落ち着きました。

創刊時は、建設機械であるクレーンの一般的なイメージと文芸同人誌のイメージとのギャップがはなはだしく、説明するのに困惑してしまいました。

前年度の井上光晴文学伝習所前橋分校（後の前橋文学伝習所）の参加者の有志十五名が、創刊メンバーでした。二十代から六十代までさまざまな職種の人が集まりました。

自費出版承ります

文芸思潮 出版部

あなたが残したい本、形にしたい本作りに協力します。文芸思潮編集部がアドバイスして、最良の本を作ります。

心に残る本を

200P 500部

ハードカバー

80万円上製本

並製 65万円

詩集 100P 50万円 ご相談に応じます

文芸思潮出版部へお電話ください。

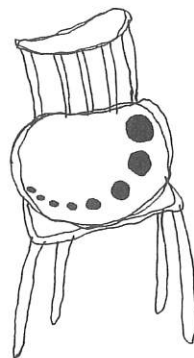
TEL03-5706-7848 五十嵐・池田・里見まで



なかやま ちずこ

中山茅集子

- 1926年 北海道札幌市にて生まれる
- 1944年 広島県立府中高女卒
- 1976年 「蛇の卵」にて中央公論第19回女流新人賞受賞
- 1977年より1997年まで「井上光晴文学伝習所」に学ぶ
- 1988年 同人誌「ふくやま文学」創刊、今年22号を出す
- 1997年より同人誌「クレーン」に小説を投稿、現在に至る



クレーン 31号



初めて小説を書くという人が、半数以上いました。文学伝習所の師である井上光晴さん（井上さんはセンセイと呼ばれることを嫌っていた）に、毎号、合評会に出席していただき、厳しい批評を受けました。井上さんは、書くことと生きることとの関係を常に問い続けることの重要性を、私たちに訴え続けました。

その井上光晴さんも、一九九二年に癌で亡くなりました。それは私たちに、自立していくことを強いるものでした。私たちの多くは、自分で道を切り拓くことを二の次とし、受動的になっていました。今さらながら、井上さんが口癖のように言っていた、君たちは努力が足りないという言葉



上光晴さんが亡くなってから新メンバーの加入がほとんどなかったため、これは強力なメンバーとなりました。

二〇〇五年に、第二回富士正晴全国同人雑誌賞特別賞を受賞したことが、大きな励みになりました。「クレーン」という誌名を群馬県内外の人たちに知ってもらえるよいきっかけとなりました。

年一回の発行（二〇〇部）で、『三二号』となりました。『三〇号』は、井上光晴特集と「ハンセン病療養所入所者からの返信」が話題を呼び、完売しました。

現在は、会員十名で、五十代から六十代が中心です。群馬県内の

会員は二名となり、埼玉、東京、千葉、沖縄と分かれています。

が身につまされたものです。その後、井上光晴という類まれなる強烈な個性の持ち主である師を失い、会員は少しずつ減っていきました。それでもぼくらひとりひとりの中に、井上光晴さんの生きざまがいろいろなかたちになって残っています。しばらくして、東京の『新文学伝習』が解散し、そのメンバーが『クレーン』に仲間入りしてきました。井

『二七号』以来、私の個人編集が続いています。同人誌といえども、自分自身が読みたい雑誌をつくりたい。まず自分が読者として楽しめる雑誌をつくっていききたいとおもってきました。

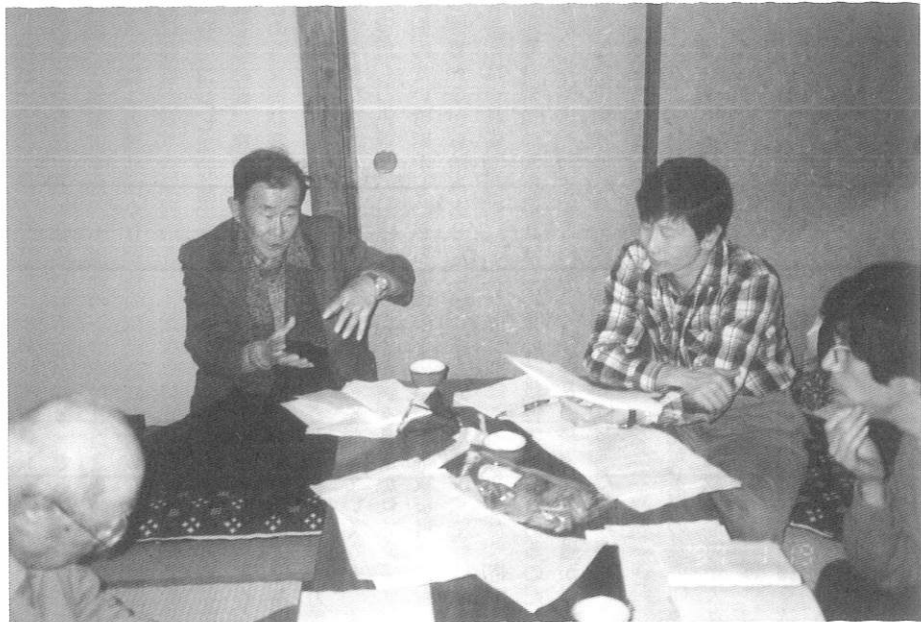
心がけていることは、開かれた同人誌とすることです。

同人誌はとかく内向きになって、部外者が読むことを想定した編集になっていないのが大半でした。そこで、『クレーン』では、執筆者紹介欄やイチャオシ本コーナーを設けて、部外者にもとつきやすくしました。また、特集エッセイを組んで、会員以外にも広く原稿募集しています。そのため、会員以外の執筆者は毎号います。

マンネリ化を恐れて編集を交代することも考えましたが、井上光晴さんと懇意にしていた編集者から、持ち回りはよくないとアドバイスされ、とにかくやれるところまでやろうと決意しました。今後も、おおいに楽しみながら文芸同人誌の可能性にチャレンジしていくつもりです。

※ホームページ <http://www.geocities.jp/hiwakil/doujin/kakushi/crane.html>

「文芸同人誌案内」で検索。同サイトの同人誌一覧から「クレーン」をクリック。



クレーン

〒371-0035
群馬県前橋市岩神町三・一五・一〇
わだしんいちろう方 前橋文学伝習所
TEL&FAX 027・2335・3999